1989年11月20日発行（毎月1回20日発行）第8巻第9号　1982年6月18日第三種郵便物認可

自立した女と男を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

We
ウィ

新しい家庭科

家庭刊行物
平 元 11.21
国立婦人教育会館
婦人教育情報センター

12
1989

特集　コミュニケーション―私をひらく

風の地図

佐藤哲生

暮雪

巻頭詩

展覧会「メディア」

ウジェーヌ・ドラクロワ
ドラクロワとフランス・ロマン主義

メディアは剣を持ち　膝の上に二人の子どもを右手でしっかり押さえている　子どもはもがいている
愛する人は誓いを破った
金羊毛皮を手に入れに来たイアソンに　メディアは恋をした　イアソンは誓った　「注この三つの姿をもつ女神（ヘカテ）の祭儀と、この森に鎮座する神（ヘカテ）と、かれの未来の舅の父にあたる、万物を照覧することのできる神（太陽神ソル）と、自分のめざす冒険の成就とそのための危険の大きさとにかけて」かたく夫婦の契りを約束すると誓ったのだ
自分の子どもを殺さなくてはならない怒りが　メディアの顔を青白くする　メディアは一瞬ふりかえる　何をふりかえったんだ　顔の上半分は　背後のやみのような陰だ　目はやみの中でおびえる動物のようだ　決意ゆえにあおざめ　心の暗さゆえに大いなるものをおそれるのか
メディアは逃げなくてはならない　残忍な復しゅうをとげ　イアソンの剣をのがれ　翼ある竜のひく車に乗って逃げなくてはならない
誇り高い女の人の怒りを見るがいい
女の人が自分の愛を表明するのに　メディアにはそんなつらい方法があった　メディアの愛はつらい愛だ

一九八九年九月　東京　国立西洋美術館

注＝オウィディウス　転身物語（田中秀央・前田敬作訳・人文書院）から

羽生槙子

新しい家庭科

We

ウィ

通巻89号

1989.12月号

特集 コミュニケーション—私をひらく

●インタビュー 吉福伸逸さん（インタビュアー 稲邑恭子） 4
—体験し、自覚し、表現すること—
■ことわざの力・変形する力 ・村瀬 学 12
■送り手と受け手—分業から兼業へ— ・加藤春恵子 16
■「ぼく」に先行する「ぼくたち」 ・斎藤次郎 20

発言

からだの声を聴こう ・鳥山敏子 24
「海のぬいぐるみ」をつくる人と ・高崎 明 28
中学生とぶつかり合うなかで ・とだみすず 30
高校生とのコミュニケーション ・磯部 隆 32
男の井戸端会議 ・永田和宏 34
カウンセリングのなかで気づく ・河村ふみ 36
●投稿 家庭科教育における消費者教育的視点 ・加藤真代 41

学習の主人公たち

こんな友達がほしい／静岡県立盤田北高等学校三年生 38

●新しい家庭科を創るために

小学校では／野菜カレーを作ろう ・岩田智子 44
中学校では／人がやすらぎ、命を育む住まいとは ・島田喜美子 49
高等学校では／課題解決学習の中からの成長 ・田村より子 54

■連載

風の地図/暮雪　佐藤哲生

巻頭詩/展覧会「メディア」　羽生槙子　1

家族と家庭科/高等学校学習指導要領にみる「家族」領域の特徴　酒井はるみ　60

親子論と心理学/親業について考える(2)　小沢牧子　62

海の輝く日/作ること食べること　佐藤通雅　64

広がるネットワーク/「痛さよりも感動が先、だからなんでもできると思ってしまうのね」　平井雷太　66

あっちゃ、こっちゃ、フフフ/男の子の育て方(後)　田中正彦　69

筐/「教科書問題」　村田直文　70

幼児クラブやってみる？/おばちゃんとお母さんのあいだ　佐多和子　71

KNOW HOW共学家庭科/高遠高校での共学　その7　湯沢静江　72

私の朝鮮史/「鳳仙花(ほうせんか)」の歌　岡百合子　73

食べもの文化史/副食　その3　石川尚子　74

よそおい　内山裕子　75

コンピューターと暮らし/その8　碧海酉癸　76

石けんコンサート通信/「イメージふくらませて僕の家庭科」　よしだあきひろ　77

波/コミュニケーション—幼女連続誘拐殺人事件を考える—　半田たつ子　78

●ひと　村田直文さん　27

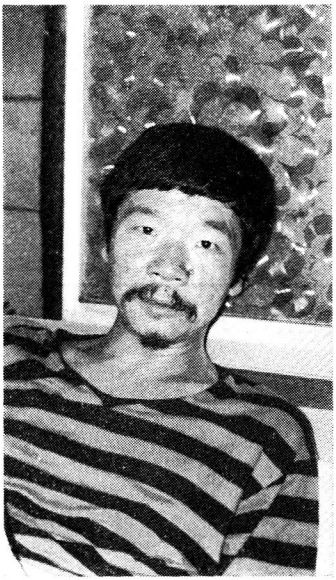
○今月の読書から　59　○Weになんでも言おう　なんでも聞こう　80
○わたくしからあなたに　84　○Weの読者会だより　86　○Weの会通信　88
○イキイキぐるうぷ　89　○泉　90　○十字路　92　○アンテナ　94
○編集室からあなたに　83　○WE EDITOR'S NOTE　96

表紙／長野ヒデ子　目次・特集イラスト／ごじら・りょうこ

Interview ●吉福 伸逸さん

体験し、自覚し、表現すること

'60年代後半から'70年代初頭にかけて、米国では、ベトナム戦争―反戦運動、学園闘争の挫折の中から、〝西洋社会(文明)の原理〟を問い直す動きが出てくる。非合理性を排除した「科学」への疑問、常に自分の外に敵を想定する運動論への反省……、東洋思想・宗教・医学と出合い深まってゆく大きなうねりの中、心理学の分野では、臨床場面での正常・異常の境界のゆらぎに触発されながら、〝自我〟や〝理性〟を万能とすることによって抑圧されてきた、身体の感覚や非合理的な領域などを解き放つ流れが合流し、誕生したのが〝トランスパーソナル心理学〟。その潮流を日本に紹介し、自ら、セラピストとして、ワークショップ、講演と、多彩な活動を展開してきた吉福伸逸(しんいち)さんをお訪ねした。胸の奥にまっすぐ届く声が、相手の構えを解きほぐしてしまう、深い〝知〟に支えられた自然体の人。



インタビュアー

稲邑恭子

一九四三年、倉敷市生まれ。早稲田大学文学部中退後、ボストンのバークレー音楽院に留学。その後、カリフォルニア大学バークレー校でサンスクリット語を学ぶ。C+F研究所(東京・三鷹)主幹として、セラピイ、ワークショップ、講演・翻訳、と幅広く活動してきた。

〈著書〉「トランスパーソナルセラピー入門」(平河出版社)「トランスパーソナルとは何か」(春秋社)

〈訳書〉「意識のスペクトル」(1)(2)(春秋社)「タオ自然学」(工作舎)「無境界」(平河出版社)など多数。

西欧個人主義の行き詰まり

――近頃は、主に欧米との比較で、日本でも、〝個〟が確立していないということがさかんに言われるようになってきたのですが、一方では、日本は、急激に〝西洋化〟した国として、その行き詰まり状況をも共有している。だから、ある種矛盾した二重の課題を抱えていて大変だなァと思うのですが。

吉福　そうですね、西洋化という現象に集約されてくると思いますが、都市化と言う現象も否定することができない。近代世界における都市のあり方が相当極限化されていますから、まあそのあたりと西洋化と絡めて考えて行けば、どうしてこんなことになってしまったかということがわかってくると思いますね。

西洋化というと、科学技術の使いかたに問題がある。科学理論技術の発達に比べて、人間の情緒を中心とする心のあり方がついていけないということが多いんじゃないか。心のほうはそんなに早く展開していきませんからね。頭で考えていろいろ作る。ところが頭で考えるということは我々の体や情緒のことはなおざりにして進行していますから、頭、心、体、の三つの集合体としてうまく適応しきれない。

日本なんかは本来は非常にいい立場にいるとおもうんですね。西洋の文明の都合のいい部分を非常に上手に取り入れて、経済や技術では急速な発達をしているわけです。ところがその背景には西洋文化とはだいぶ違う極東の文化を持っているわけですから、伝統的な人間社会の知恵と、西洋文明の持っているものをうまく融合する実験場にはなりうる。

しかし、合理的に捉えにくい、言語化しにくい曖昧なコミュニケーションの仕方や、西洋に対するコンプレックスの裏返しのような物が入り混じって、この融合はうまくできているようでできない。だから、当分、実験場として、つらい思いをするでしょうね。

――トランスパーソナル心理学がアメリカでてきたのはどういうニーズがあってでしょう。

吉福　心理学の枠で考える限りは、クライアントが、セラピストが考えもしない体験を報告してきて、それを理論化するためには個人の内に個人を越える要素が存在していることを認めるような理論を出さざるを得なかったということだと思うんですね。'60年代をピークに、社会的に適応できず、いわゆるサイコシス（精神異常）という状態に陥る人が激増していたということもあります。そういう状態になった人が再発しないようにするには、〈自我の強化〉によって抑えて社会に適応させるという旧来のやり方ではだめで、その錯乱状態・衝動を受け入れてあげる人がいれば必ずおさまり、幅の広い自己というものがでてくる、と考えたのです。その基盤に

は、'60年代あたりから言われるようになってきた、個人の実現ですか、個人が本来持っている自分の傾向をこの人生で実現していくという「自己実現」の概念だけでは人間をくくることは出来ないということがありますね。

人間というものはあくまでも群れとして、集団として関係性の中で生きて行くものであって、独立した個別の実体でありながら、他方では、相互関係を持ちながら結ばれているという、その二つの側面がある。

ところが日常生活では、どちらの側面を優先させるべきかという選択を迫られますから、その選択で、多くの人が間違った選び方をしてしまう。自分を優先させるべきときに関係性を優先させたり、またその逆をしてしまう。

日本人の場合は、関係性のほうを重視してしまって、あまりそれが頻繁になると、自分が何を求めているのか、どういう生き方をしたいのかが往々にして見えなくなってしまっている、あるいは、もう、どう探してもあまりにも多くあって、手が触れられない、触れることが怖いということになる。

アメリカでは、自己主張が激しいために対人的な摩擦や壁がはっきりと表面化するが、日本の場合、一見、対人的な摩擦がなかったり、対人的な壁が透明に見えたりするが、その奥を見ていくと問題は同じです。本質は変わらないが、現象化、表現の仕方が違う。どちらが良いというわけではないですね。自分の感性、衝動を重視するか、他人に対する共感を重視するか、その判断さえ間違っていなければいい。

ただ、そういう、他人のことをしかるべき時に思い、自分のことをしかるべき時に思う生き方をしてきたとしても、個体として生きていくかぎり、様々の抑圧を体験せざるを得ません。

成長ということは、抑圧を学んでいくことの違った表現ですから、何等かの形で特殊な状況を作ってそうした抑圧感を取り除くことが必要です。昔は、そういうことは、祭りなどの形でうまく処理されていた。それが現代社会になってきて、祭りも基本的に合理的な経済的な発想で行われるようになってきていますから、本来の姿が見失われてきて、文明人につきものの抑圧構造の解消につながっていきにくいですね。文明社会の失った物は大きいですよ。そのハレとケの問題にしても、通過儀礼の問題にしても。

たとえば、通過儀礼と言うのは、一人の人間の成長のプロセスの中で、アイデンティティを転換するポイントに、自分自身が自分の変化を感じ取るだけでなく、周りの人の自分に対する対応が大きく変わるということで、内外両面からアイデンティティの移行を支えていく儀式なんですね。それが現代社会ではあまりうまく行われていないと思うんですね。成人式なども画一的で有機的に行われていない、そういったこと

も個人にとっては生きづらくなっているという気がします。

ヒッピー文化のなかで

――吉福さんとトランスパーソナル心理学との出会いは？

吉福　僕は21歳でアメリカに行って、二十代全体を過ごしてきました。日本を出る前は音楽ばっかりやっていたのが、むこうに行って、日本人であることを強く自覚させられて、そういったことを通して、当時のヒッピー文化やカウンターカルチャーの影響を強く受け、強烈な精神的葛藤に置かれたりした。それが何であったのかということをある程度理解させてくれる枠組みを与えてくれたのがトランスパーソナル心理学でした。ちょうどそれが生まれて来つつあるときにそういうサークルにいたりしましたから、知らず知らずのうちにまきこまれていた。時代潮流がそういうふうになっていて、呑みこまれるところに自分がいたということでしょうね。自分の関心の移行と重なってもいた。

――今のお話をうかがっていて思ったのですが、当時のヒッピー文化のメッセージは日本に表層のほんの一部しか伝わっていなかったのですね。そのカウンターカルチャーのうねりのすごさを共有できていたら、ずいぶん今の状況も変わっていたのではと思うんですが。

吉福　そうですね、でも、それは当時、日本がまだ経済発展のほうに重点を置いていた段階にいたということもあると思うんですね。ああいうものが入って来るだけの余裕もなかったし、日本は欧米の都合のいい部分しか取り入れていないから、それほど大きな打撃を受けていなかった。

たとえば、アメリカ人はベトナム戦争という生死をくぐり抜けるようなことに直面していたのに対し、日本ではベトナム反戦のような動きはあったにしろ、現実に生死を賭けるわけではないから。それはある意味で仕方がなかった。

――日本では20年近くたったいま、やっと同じような問題が出てきた。

吉福　そうですね、経済的な余裕が出来たことがその一つの要因ですね。つい十何年ほど前は目に見える共通の目標が暗黙の了解としてあった、それがほぼ実現され、それから先は、目にまったく見えない、より個人次第の目標に変わっていくと思うんです。個人がどういう人生を選ぶのかというような、多様な人生の目的観、目標に変わっていく。

欧米では、そのような、あまり物質的な世界観ではもはやって行けないという感覚が'60年代にはあったのが、日本では'70年代後半から'80年代にかけてようやく、その意味で共通の問題を持てるようになった。ところが、問題は緊急な切迫感がないということ。島国で隔離されているから、自分たちだけは安全だという気持ちがどこかにある、欧米に比べ危機

感がないということがありますね。

身体の復権

――トランスパーソナル心理学は主にユング心理学と人間性心理学の流れを受けて出てきたとうかがっていますが、日本では、人間性心理学はあまり馴染みが無いようですが。

吉福　日本にも人間性心理学はありますよ。ただ向こうの人間性心理学とはだいぶ違う。欧米では人間性心理学は'60年代前半に出てから、ヒューマン・ポテンシャル・ムーブメントという形で、「ポップ心理学」化していって、一般に深く浸透していった。心理学もセラピーも日常化した。日本の場合、その人間性心理学の発展の非常に初期の状態のものまでは入ってきたが、'60年代半ば以降、相当ラジカルなかたちで展開した心理療法や心理学は入ってきていない。一部を除いては、抜け落ちてしまっている感じですね。

――それはどういうことでしょうか。

吉福　一つ、単純には、'60年代後半から'70年代初頭にかけて、向こうのセラピーが、セラピストや心理学者が大きく巻き込まれていく形で変化していった。患者とセラピストという壁を取り外してしまうというきわめて人間的な変化が起きた。たとえばセラピーの場でLSDが頻繁に使われたり、エンカウンターグループだとか、グループ・セラピーが出てきて、セラピーの現場で感情、情緒の激発をよく起こすということが出てきた。日本の臨床家たちは、それに耐えられずピタッと門を閉ざしてしまい、そのためにそれ以降の大きな展開が抜け落ちています。それですから、トランスパーソナルなグループセラピーを日本でするとと、参加される方の多くが、その中の、喪失された身体をいかに復権して行くかという人間性心理学的な側面に感動されたりするんですね。

――野口体操、整体、ヨガなどは、やっていらっしゃる方もいらっしゃいますが、全体の傾向としては、セラピーでからだの問題を扱うというというのは少ないようですね。

吉福　そうですね、東洋のボディワークにもなかなかいいのがありますが、ただ、人間の心理面がその中に取り入れられていないことが多い。体と心を分離して、体だけのものになりがちです。ところが、体と心というものは切り離して考えられるものではなくて、一緒に動いている。僕たちは、人間というものは体、心(情緒)、対人関係の三つの面で考えればよいといっているんですね。根底にある同じ一つの過程が、体に生じて来ることもあれば、心や、対人関係の問題として生じてきたりする。それはその人のパーソナリティのタイプによります。

体が頑健な人は、心や対人関係の問題として生じて来るし、対人関係に対し鈍感な人の場合、体や心の問題として生

じて来るというふうに、弱いところに出るのだが、それがすべてつながっている。ですから、体だけ、心だけのアプローチでは片手落ちなんですね。人間関係を無視したアプローチもそうです。

――トランスパーソナル心理学はそれを統合している。

吉福　トランスパーソナルというより、その前の段階のもの、つまり、人間性心理学がそれを統合した。といってもそれほどシステマティックでもないのですが、またそうなるべきでもないという気がしますね。人間はそれぞれ独特の宇宙を抱えたかけがえのない存在で、それを単純共通な部分に還元して考えていくことは出来ないですから。

――ユング心理学は神話性や、言語で表現しにくい非合理的な領域を扱ったことで下地を作ったのでしょうか。

吉福　ユングが出ていなかったら、トランスパーソナルはこういうふうに展開してこなかったでしょうね。ただ、彼も理知主義的な当時の時代の限界を受けて、言葉を重視した。体や関係性に関するアプローチがなく、形而上学的になりがちでした。ですが、あたらしいタイプのユング派はトランスパーソナルと重なってきていますね。

「敵・味方」の構図の終焉

――トランスパーソナル心理学やニューサイエンスの根底にあるという「敵と味方という発想を外そう」という考え方、あれは、その'60年代後半の動きの中でできたのでしょうか。

吉福　そうですね、一番根底にあるのは学園闘争、ベトナム反戦運動に於ける挫折感、「自分は善で、外に敵がいて、その敵を批判し続けることの中に自分の正しさがある」とする限り基本的な分裂があり、解決にはならないということが相当明らかになった。世界と言うのは自分の様々な思いの投影の側面が強い、その投影ということをしっかり認識することから始めなければいけないという共通の理解が出てきた。自分自身の分裂をいやす方向でないかぎり、どんな問題も解決できない、敵すらも自分の心の反映だと。ただ、こういうのは、戦うエネルギーを喪失させる考え方ですよね。

――現状肯定的だという批判を受けやすいですね。

吉福　ところが、それは敵・味方という形でものをとらえない限り、世の中で積極的に行為が出来ない人の立場からみたものであって、別にそういうふうにしなくても、生きて行くための目的意識や生き生きとした生命力は生まれて来るわけです。

　現状肯定でそれでおしまいというのは、多くの人の陥りがちな間違い。現状肯定というのは、あくまでも成長にいたる第一歩であって、そこから更なる努力、新しい道が始まる。我々は余りにも強い現状否定や自己嫌悪にとらわれているた

めに、いったん現状肯定というと、あ、もうこれでいいということで、非常に受動的な関与になってしまうんですね。

――日本でもこの頃になって、ネットワーキングの発想が出てきたり「Think globally, act locally」という言葉が目にとまるようになってきたようですが、20年前はめだたなかった。同じ学生運動などのうねりがあっても、すぐにはそこにつながらなかったような気がしますが。

吉福　トランスパーソナルは新左翼に象徴されるような流れの延長線上にあるんですよ。社会改革派がそれまで「敵・味方」でやっていたのが、「それでは世界が変わらない。個人が世界の問題を自分の問題として等身大の範囲内で、まず自分の事を、それから、徐々に広がったところにと一歩一歩関わっていて解決するしかない」と、そういう立場なんです。

トランスパーソナルというのは心理学に限って考えないほうがいいですね。科学の分野からのニューサイエンスの動きとつながっている。

アメリカでは、運動の挫折体験をしっかりと踏まえて現場に戻って行き、自分の専門領域の中でそのときの実感を背景に理論化し、学問的な力を社会的な力に変えていこうとする運動があった。それが、トランスパーソナルであり、ニューサイエンスであり、ホリスティックヘルスという包括的な健康運動であり、フェミニズム運動であり、エコロジー運動である、というようなことだと思うんです。

でも、これは相当東洋を西洋化してたくさんとりいれているとはいえ、きわめて西洋的図式を持ち、直線的な発想が強いですから、そのへんを差し引いて考えたほうがいいでしょうね。僕は心情的にひかれるものがあって、いろいろ学ぶものもあり、日本に紹介しているんですが、同時に批判的でもあるんです。問題点はいっぱいあるし、日本に導入するにあたっては注意深くしなければと思っています。

――自己超越の問題ですか。

吉福　超越志向の問題であるとか、いわゆるカテゴリーの誤解ですね。何か偉い神様のような人に自分をあずけてもぬけのからになってしまうとか、あるいは非合理なことをすべてすばらしいといったりして、日常生活の場をおろそかにしてしまうとか、いま、欧米では特にファッションのようになっている、そういった要素も当然この中には含まれますから、危険と言えば危険です。

――個の強化をしないとそちらに流れてしまう？

吉福　そう思いますね。個の強化とか個の確立とか言うのは別に自己主張が強くなることではありませんし、境界線をしっかり保つということ。自分の本来性のある衝動と、そうでない衝動を明確にして、妥当なときにはその本来性のある衝動にしっかり従い、何処までが自分の本来性のある衝動であ

るかを知っているという。

――自分を知っていることが個の確立につながるという？

吉福　そう思いますね、そのあたりさえしっかりすれば。

体験・自覚・表現

――コミュニケーションが成り立つということを、どのようにお考えですか。

吉福　コミュニケーションに関してはいくつかの考えがあります。たとえば、カール・ロジャーズという、来談者中心療法を開発したことで有名な人ですが、彼は体験、自覚、表現の三つの角度からみるように言っています。

体験がしっかりしていても、その体験に対する自覚がなければ、それが一体なんであるかということを表現できない。逆に、体験がしっかりしていないと、いくら自覚があってもあやふやな表現しかできない。また、いくら体験していて、それをしっかり自覚していても、しかるべき表現の能力がなければ、コミュニケーションが出来ない。コミュニケーションが成立するためには、コミュニケーターが、自分が今ここにいることをしっかりと体験、かつ自覚して、しかるべき表現を有効にするということが重要になって来ます。

たとえば、体験と表現力が立派にありながら、自覚が無いという人だと、はっきり自覚のないことを体験的にぐじゅぐじゅ語るので、聞いているとごまかしているように聞こえる。今度は逆に、表現力は立派にあって、自覚も十分にあるんだけれど、今ここにその場に体験していない人の話を聞くと、作り話を聞いているようになる、ということになります。

――今の風潮として、自分をどこか外に置いた、評論家的な言い方をしてしまうことが多いということは、今のお話でいうとその体験、自覚のあたりなのでしょうね。

吉福　自分自身の意見なのか、感性なのか、自分の体験かと無関係に、ほかの人の言っていることを借りてきてしまう。体験をいやがるということもありますね、できるだけ、体験から疎外されたい、二次的な体験、シミュレーションにとどめ、自分自身の関わりはなるべく危いから無くしていこうとする時代ですから、様々な体験から、特に、人間的な体験から疎外されていきますよね。自覚に関しても、紋切り型の、マスメディアが押しつけるような、こうあればほかのひととあまり変わらない、安心だというような側面が強いですね。

＊

十月末にハワイに移住。「引退するんですよ」と笑いながら「これからはほんとうに関心のあるところだけをやっていきたい。欧米では、今の日本の考え方・感性の紹介などが非常に遅れているので、その紹介、東西研究なども」と吉福さん。時々は帰国し、ワークショップを開催の予定。

特集

コミュニケーション―私をひらく

ことわざの力・変形する力

村瀬　学

漱石のあの一文は、世の中の住みにくさ、人と人の交わりにくさを、最終のイメージとして踏まえている。けれども「ことわざ」の方は、「交われない」ことが出発として押えられている。「交われない」からこそ何とかしよう！　というわけである。「交われない」ことは、人々にとっては「あたり前」であり、特別なことではなかった。人々にとってあの「ことわざ」はこんなふうにも言われてきた。

1　郷に入れば　郷に従う
2　手をかえ　品をかえ
3　大海芥を選ばず
4　柳風にしなう
5　弓もひき方

ちょっと意味の違うところがある？　気にしない。用にかなえば宝。

1

私の好きな「ことわざ」を五つ上げてみる。

1　所変れば品変る
2　物はためし
3　塵に交わる
4　堅い木は折れる
5　魚心あれば　水心

さしずめ漱石なら、こう言う場面である。

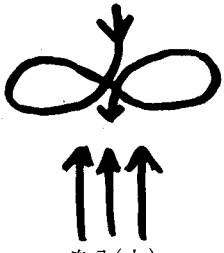
「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかく人の世は住みにくい」（『草枕』）

漱石の言い分は、いかにも知識人らしい。それにくらべ、五つのことわざの常識くさいこと。けれども私は、このあまりにもよく知られている「ことわざ」に実践的にかなり支えられてきた、と感じている。

ふつう「ことわざ」と言えば、進歩的な考えの人から見たら反動的に見られてしまう。この処世的、現状肯定的な発想は鼻もちならない、というわけだ。「郷に入れば、郷に従う」なんて言う保守的な発想から、どうして変革の発想が生まれ得るのか、と。頭からそう思っている人には、「ことわざ」の世界がもつムチのようなしなやかな構造はとうてい理解できないかも知れない。頭が堅いのだ。「堅い木は折れる」。

「ことわざ」の世界は、確かに多様だから、ひと口にその特色を言うことはできないが、私はその表向きの多様さとは別に、その中核をなす発想ならひと言で言い表わせると思ってきた。それは、世の中の動き（あるいは相手）を「力」「意志」「権力」の動きとハッキリと意識してかかわるという発想である。

相手、あるいは集団は、それ自体「力」であり、自分の意図を通す筋道をもっている。私たちがその相手（集団）と向い合うということは、その力、その意志と向い合うということであり、その力、その意志と「一戦交える」ということである。ところが、どっこい、力と力が「一戦交える」ことは、いつでも大変しんどいことであった。そこから漱石のあの一文も生まれてきたはずである。ところが、巷に生きる人々にとって、「しんどい」なんて言っていられない。しんどさを百も承知で、相手と交わろうとしなくてはならない。そこに生まれたのが、あの「ことわざ」の知恵であった。その知恵とは、相手の力と直線的に向い合って傷つけ合うのではなくて、自分の力の出す方向を変えて、相手とかみ合うまで、自分の力のかたちを変化させる、そういう発想であった。（図参照）



ここに、自分を「直線」や「一本」にしないで、「曲線」や「復数」にし、かたちを変えて「変身」、「分裂」させることで、相手の力を受けとめるかたちをつくり上げようとするそういう発想のあることが見えてくる。

これは、相手の力を受けとめる場合だけではなく、自分の力を出す場合にもあてはまる。ちょっとした力でも、直接的に出せば、相手が無防備であればあるだけ大きな傷を与えることになりかねない。「力」は「塵」のように細かくくだいて、ひとつの大きな力にならぬようにすること。それでいて「塵」のようになった力は、「水、方円の器に従う」のように、相手の力に見合うだけのかたちはいつでもつくれるようになっていること。おそらく「ことわざ」の秘められた力は、そういう変幻自在と化せるように「力」をかみくだくイメージを喚起させる所にあったように私には思われるのである。

2

昔から、人と人の「交わる」ことは一筋縄でいかないのだということは、このように十分意識されていた。ところが、ある時から「コミュニケーション」なるカタカナが輸入され、それが何やら人と人との「交わり」の代名詞のように簡単に使われ出してきた。親と子の、夫婦の、地域の、二国間の、異文化のコミュニケーション、……私個人の感覚では、このカタカナで具体的に思い描ける状況はほとんどないのだが、たくさんの人が今やこのカタカナを「交わり」と同義語のように使っている。

一体この「コミュニケーション」というカタカナの使いやすさはどこから来ているのだろうか。考えられることは、おそらく「交わり」というもののイメージを、このカタカナは何やら「情報」の「交換」「伝達」のように見なしているからではないかということだ。まるでドッチボールをするように、「情報」を投げ合いする。だから「情報（ボール）」の投げ手―受け手は、輪郭をハッキリと持っている。輪郭をハッキリもった二者が、輪郭をハッキリ持った「情報」を投げ合いする、というイメージは、大変にわかりやすい。そのわかりやすさとマッチしたのが「コミュニケーション」というカタカナだったのではないか。

もしそうだとしたら、このカタカナの裏には「交わり」の相手を常に「個人」「個体」とみなし、その個人（団体）のもち物として「情報」を考えるような、そういうすこぶる「個人主義」「個体主義」の強い文化の発想があるのが想定できる。ところが私たちの暮らしている生活圏では、人と人との「交わり」はそんなふうには意識されていない。「個」の背後にはいつも何やら訳のわからない不気味な「力」が感じとられている。「個」あるいは「相手」はいつも何やら得体の知れない「力」につながっている。それが一定の「かたち（輪郭）」として見えない間は、自分の方も一定の「かたち（輪郭）」として出せないという感じが常にある。

そこで人々は、所変れば品を変え、手をかえ品をかえ、まず柳のように相手の出方に合せる自分をつくり出す。「人には添うてみよ、馬には乗ってみよ」というわけである。それは、しかし、決して相手のいいなりになったりするようなことではなかった。そうではなくて、「交わる」ためにはまず自分を軟らかくして「相手」を受けとめ、その中からお互いの意向が受け入れられるそれぞれのかたちを創り出すのが良策だと考えられていたのである。お互いのかたちは、あくまで後で創られる。

「コミュニケーション」では、まずはじめに個体があり、個体のかたちがあった。そこで考慮すべきことは「情報」のやりとりの仕方だけであった。けれども「ことわざ」の世界で

は、はじめに「柳」があり、「不定形」があった。不定形はよくしなう。そしてしないながら相手と共に生きられる「中間のかたち」をつくり出そうとするのである。「生きられる中間性」と言うべきものがここで思案される。

3

「ことわざ」と「コミュニケーション」という対比は、いかにも芸のない話である。そもそも対比になりようがない？学問的に言えばそうなのかも知れないが、日常性を生きる者の感覚から言わせてもらえば、この両者はもう少しいくつかの手つづきを踏まえれば、必ずクロスしてゆくものであるように感じられる。特に「実践的な感覚」からすれば、多くの人は無意識のうちに、これらのいくつかのことわざを自分の行動の指針にしているのかわかるからである。観念的なコミュニケーション理論より、ことわざは、はるかに実践的な交わりの方法を指南してくれている。

もし、今日「変質するコミュニケーション」という主題で語りうる状況があるとしたら、それは世の中に「情報」なるものが、山積みされるようになり、そこに人がいてもいなくても関係なくそれだけで一人歩きするような「情報」が主役をにない、今までとは逆にそういう「情報」が人間をつき動かすようになってきた所辺にあることが考えられる。

今までは人が情報を操ってきた。ところが今日では操っているはずの情報に逆に人が操られるようになってきている。ちょっとした「情報（デマ）」に世界の株式市場が瞬時にして振りまわされるというのも、この情報主役の時代の不気味さをよく象徴している。「情報」はすでに「力」と化している。だから、送り手→情報→受け手といった図式は古典化してきている。むしろ情報→送り手・受け手→情報というように情報が人間をとりまき、情報が送り手や受け手をつくり出すようになってきているのである。ここに「変質するコミュニケーション」を見てとるのは賢明かも知れない。

すでに情報化の世の中は今までと一味違った「力」の動かし方をみせている。そんな「力」に向い合うためにはとうてい今までのような「直線」的な構えではたちうちできない。そんな状況の中で「変形する力」を指南してきた「ことわざ」の世界を想い出すのは、そんなに悪い事ではないような気がする。「情報（うわさ）」の水準はすでに「ことわざ」でもよくとらえられていた。「鳥が触れたか、風が言ったか」「話半分」「聞けば聞き腹」「噂の種」「十人寄れば十国の噂」「噂は風より早い」……この「うわさ⇄情報」がさらに「力」として作用し合う世の中で、私たちはいかに現代的な「柳」として「変形する力」を身につけうるか、それが今問われているような気がする。珍言「人間は考える柳である」。

（むらせ　まなぶ・心身障害児通園施設職員）

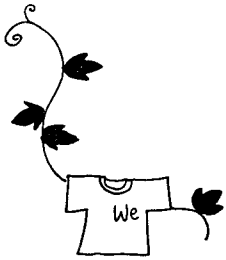
特集

コミュニケーション—私をひらく

送り手と受け手

——分業から兼業へ——

加藤春恵子



●役割の固定化

社会を変えようという目的でコミュニケーションが行なわれるとき、ともすれば送り手と受け手の役割が分化し、固定化して、いわば送り手受け手の役割分業システムができ上ってしまうというのが、これまでの日本の社会の常であった。

私自身が関わってきた性差別撤廃のためのコミュニケーションにおいてもそのことが起こった。他の人々に先立って性差別の不公正さに目覚めた人々は、送り手として、女性の人権確立のためのメッセージを、マス・メディア、教壇、社会教育の場、ミニコミ等々を通して、他の人々に伝えようと努力を重ねてきた。

そうしたメッセージは、拒否反応にぶつかることもあり、まるごと受けいれられることもあった。その両極の間に、口ごもりながらも問い返すことをせず、沈黙のまま受け手の位置にとどまった多くの人々があった。もちろん、問いが投げかけられ、それが受けとめられて対話がひらかれ、認識が深められてゆくこともあったが、送り手は送り手、受け手は受け手の役割を守ったまま、受け手があえて自らの経験と伝えられた情報とのギャップをことばにして質問や意見を織りこんだメッセージの送り手となることも、送り手が口ごもる人々の思いを何とか聴きとろうとして受け手役を買ってでることもないままに過ごされた場面も少なくなかった。フィードバック機構を欠いた啓蒙的なコミュニケーション場面のなかで、人々の現実とつき合わされて検証され彫磨されてゆくことの少ないままに、原則論や翻訳・翻案の理論が、一部の拒絶者と一部の受諾者とその中間の「そうもいえるけれど、しかし……」と口ごもる人々に向かって投げかけられる、といった状態のなかで、早く目覚めた人々は苛立ち、疲れ、外国

の先達や国内の仲間に力づけられて、再び活力をとり戻して送り手の任務を担う、といったことがくり返された。すなわち、「啓蒙」も「教条主義」も大嫌いな人々が、結果としてそうした落とし穴にはまってしまう場面がそこでは起こりがちだった。送り手と受け手の役割が分かれてしまって、同時に双方が送り手でもあり受け手でもある状態をつくり出さなければ生まれないものとしての「対話」――「送り手＝受け手」と「受け手＝送り手」の相互作用としてのコミュニケーション――とは程遠い、一方的コミュニケーションの状態にとどまらざるをえないことが少なくなかったのである。

●受け手になれない送り手たち

さらに悪いことには、このような状態に陥っていることに気づかず、講師への賛辞以外は発言しにくく、発言されてもうやむやにされてしまうような「話し合い」の時間をもったことで、対話をした、と錯覚してしまうような事態さえ起こりがちであった。賛辞以外の意見を聴きとってしまったら、自信を失い、混乱してしまうような自我の脆さが、しばしば送り手たちの強力なメッセージのかげにかくされていた。問い返すことをしない忠実なフォロワーたちを支えに、「わかっていない人々」への不満を言いあうことや、仲間を裏切って強者や多数派に迎合するかに思われる者をスケープゴートすることで、辛うじてディスコミュニケーションの重さに耐えていくような状況が、送り手たちのなかには存在しがちであった。

こうした記述を読まれた方々は、いや、そんなことはなかったといわれるかもしれない。たしかに、送り手と受け手の役割の分化・固定化にともなうディスコミュニケーション状況を問題としてとり上げようとするのは、よき受け手となってフィードバック機構を働かせることの下手な「脆い送り手」であるところの私自身の自我像を、女性解放のメッセージの送り手たち、さらにはより広く社会変革のメッセージの送り手たちに投影し、他の送り手たちの多くも私と同じ弱さをかかえているときめこみ、自らを慰めようとする見当外れな自己防衛の試みにすぎないのかもしれない。けれども、もしそうであったなら、いま本誌でこのような特集が組まれ、メッセージの送り手と受け手について書いてほしいという、一見いとも古典的な課題が編集部から私のもとに舞い込むこともなかったのではないだろうか。たしかに参議院選挙で山は動いたかにみえる、が、しかし、と、その内実を問い返さずにはいられないもどかしさが、社会をよりよいものに変えようと願ってメッセージを送り続けてきた人々のなかに、いま渦巻かざるをえない状況があり、その一因として、「受け手になれない送り手たち」の問題が存在するのではないか？　そんな思いで、もう少しこの問題を掘り下げてみたいと思う。

●省エネルギー

全力を挙げてメッセージを送り、同時に、全存在を賭けて相手の思いを感じとり、聴きとって、これに応答しつつ自分の思想を検証し発展させてゆく、ということは、実に大きなエネルギーの要る仕事である。自分と、相手と、思想と、お互いの生きる社会の四項のすべてを大切にして、それら全部の発展を願い、そのためにベストを尽くそうとする広やかかつ細やかなパワーの持続が必要だからである。人に先駆けて真理を見つけ、それを守っていくだけでも大きな力を必要とするのに、さらに他者と向き合いながらその真理を広め深めていくとなれば、私たちの多くは燃料切れを起こしてしまいやすい。そこで、省エネルギーをはかるべく、すべてはすでにわかってしまっている、あとはそれを伝えるだけ、相手はそれを受けとるだけ、わからないのは相手の問題、という単純化された構図を選ぶ、ということが起こりがちになる。このような姿勢をとるとき、相手の生身の存在と、その存在がその人しか経験しえなかったかけがえのない人生体験の中から投げ返そうとする複雑微妙な応答は、切り捨てられてしまう。イエスかノーか、ものわかりのよい人か悪い人か、味方か敵か、という単純なカテゴリーのなかに、人々の多様性・固有性は括りこまれ、切り捨てられてしまう。こうした姿勢のもとでは、コミュニケーションの過程を通して、送り手のメッセージを支える思想や理論がゆさぶられ吟味され、より豊かなものにされる、といったことは起こりにくい。また、相手に通じる用語をさがし求めて自分のボキャブラリーを吟味し、かけ橋となることばを紡ぎ出していこうとする努力も、そうした一方的伝達の姿勢のもとでは十分に行なわれることがない。それぞれの送り手が自らのキャリアを形成する際に習い覚えたむずかしいことばが、送り手とは全く違う背景をもつ相手に必要性の吟味もないままに押しつけられる、といったこともそこでは起る。問題の認識をさらに深める手がかりとなる理論も、運動を活性化するキーワードも、こうしたなかでは産み出されにくい。

●二重メッセージ

そうしたかたちで受け手との関わりをつくり損ねたもどかしさのなかで、送り手がしばしば行なうのは、メッセージを理解しかねて、あるいは理解してもそれに全面的にイエスとはいいかねて離れた場所にとどまろうとする受け手に対して、自分の本来の思想とは異なるもう一つのメッセージを送って、相手の存在をとにもかくにも受け入れていることを示そうとする、というやり方である。こうすることが必要だ、と一方で語りながら、他方で、そうしないままでもよいのだ、という矛盾したメッセージを送って相手をダブルバインドに追い込み、自分自身も運動の担い手としての自分と人間

としての自分との分裂に耐えつつ辛うじて相手と自分との間をかぼそい一本の糸で結びつけようとする――そうした苦渋を、「早く目覚めた者」の多くは味わってきたのではないか。

●「送り手＝受け手」に向かって

以上、私自身の「病状」を自覚化させながら問題状況を語ってきたのだが、次に、こうした状況を打開するために何をしたらよいか、ということについて考えてみたい。

送り手となる「早く目覚めた者」たちが、自分の弱さ、脆さを自覚化し、聴く力をつけ、応答できる強さを育てていくための訓練――「受け手になれない送り手たちのためのトレーニング」とでもいうべきものを創り出していくことが、いま、私たちの社会のなかでは必要なのではないかと現在考えている。このようなことをいうのは、最近、従来「受け手」の位置にとどまっていた人々のなかに自己主張の力が育っていく場面に遭遇することが少なくないこと、それに対して私自身も含めて、情報の「送り手」側の応答力の不十分さを痛感することが少なくないこと、女性解放の運動・理論においてめざましい発展を示しているアメリカのすぐれた送り手の応答力に驚嘆した経験をいくつかもったこと、などによる。

この夏、国立婦人教育会館で、女性学四団体と同会館との共催で三五〇名余の参加を得て開かれた第十回女性学講座のフィナーレは、スピーク・アウト――発言したい人が申し出ておき次々にメッセージを述べるプログラム――であったのだが、そこで私が最も感銘を受けたのは、研究者たちによって物言わぬ「対象」として括られてきた主婦が、従来の理論のなかでの自分たちの扱われ方に真剣にはっきりと異議申し立てをした一場面であった。また、十月一日に開かれた「フェミニスト・セラピイなかま」の十周年の集まりでも、アメリカのフェミニスト心理学者フィリス・チェスラーのすばらしいスピーチに対して、堂々と質問する女性たちの姿に驚いた。必ずしも彼女たちの発言の中身に賛同するわけではないが、日本のこれまで専ら受け手専業であった女性たちが「うけたまわり学習」のかたちを脱して自己主張する力をつけていることに、遅まきながら感動したのである。フィリス・チェスラーの示した応答力――まずしっかりと質問者を確かめ、その人と向きあって全存在を賭けてことばを選びながらメッセージを送る姿も、私に大きな励ましと、これからだ、いつまでも甘えてはいられない、という決意とを与えてくれた。私たち一人一人が、送り手・受け手の役割分業と、それに伴う断絶とを廃絶して、同時に二つの役割を兼業し、コミュニケーションを実り豊かな対話として行なうことのできる「送り手＝受け手」として自らを育てお互いを育てあっていくことこそ、ことばの真の意味での民主社会の成熟にとって不可欠だと思う。（かとう　はるえこ・東京女子大学教授）

特集

コミュニケーション―私をひらく

「ぼく」に先行する「ぼくたち」

斎藤次郎

「死体」へのこだわり

映画「スタンド・バイ・ミー」の原作であるスティーヴン・キングの中篇小説は、ごくシンプルに“The Body”（「死体」）と題されている。この半年ぐらい、あの映画の死体はいったいなにを意味していたのだろうか、とぼくはぼんやり考えつづけている。死体探しの旅に出かけた少年たちは、使われなくなった駐車場の楡の木の上に、小屋を作っていた。家庭にも学校にも町にも「居場所」といえるものがなかったゴーディ、クリス、テディ、バーンの四人にとって、そこは唯一の安らぎの隠れ家だったのである。ラジオを聞き、雑誌を読み、賭けトランプをし、煙草をすい、冗談を言い合った。

隠れ家の第一義は、いうまでもなく、おとなの視線を遮断することだ。廃材置場から運び上げた厚板は、節穴には周到にティッシュペーパーがつめられて、確かに彼らをかくまってくれた。だが、それだけではまだ安らぎの場としては不十分だったろう。トランプでコインをやりとりし、冗談を言い合う仲間が、厚板以上に自分を守ってくれている、という感じを、彼らは相互に抱いていたのではなかったか。ひとりひとり、性格も違えば好みも違う。が、十二歳の夏の終わり、四人にとってそこだけが、自分を肯定的に受け入れてくれる唯一の場所だと知っていたはずである。

九月から新しい学年に進む。つかのまの猶予期限が切れようとする日、四人は、ふとしたきっかけから、ブルーベリー摘みに行ったまま行方不明になった同い年の少年の死体を探しに出かけたのであった。ラジオのニュースで聞いていただ

けで、むろん見ず知らずの少年である。

死体を見つけていったいどうするつもりだったのだろうか。年上の不良少年たちに分の悪いたたかいを挑んでまで、彼らが死体を奪われまいとしたのは、なぜだったのだろうか。

この旅のあと、四人はそれぞれ不良グループからしたたかに復讐され、新しい学年とともにバラバラに別れていく。木の上の小屋は、テディとバーンが別の子どもたちと時を過ごすために使いつづけたが、ゴーディやクリスには、もうそこが安らぎの隠れ家でもなんでもないのが、わかってしまったのだ。厚板は残っていても、お互いを確かめ合う仲間の関係がこわれてしまえば、そこは単なる物理空間にすぎない。

お互いを確かめ合うとは、お互いに共有している思いや気分を確かめ合う、ということにほかならない。最後に四人が共有したのは、「死体を見つけたい」という意志であった。見つけた瞬間、だから四人の関係の崩壊は宿命づけられていたのかも知れない。そのような重要な役割を担う「死体」とは、いったいなにをあらわしているのだろうか。

「五人目」の仲間

中学生や高校生のグループにつき合っていて、奇妙な錯覚にとらわれることが、ぼくにはしばしばあった。それぞれの顔と名前といくらかの過去を知っている四人のグループと話していると、その子どもたちの話の中にどうもよくわからないところが出てくる。むろん、いつも行動を共にしている四人の話に、不意にぼくが加わるのだから、わからないことがあって当然である。「それ、どういうこと?」と、部外者は解説をあおがねばならないのだ。

ぼくは、別に、そういう子どもたちの何から何まで知りたいなどとは思わない。わからないことにしておきたいことも少なくない、といった方がはやいかも知れない。だが、「そういう「事実」や「いきさつ」ではなく、なんか未知の「気配」のようなものを感じてしまうことがあったのだ。「気配」のようなものだから、漠然と「見えない部分」を感じるだけで、「それ、どういうこと?」というふうには聞けないのである。

そのうち、その気配が少し煮つまって、うっすらと「人格」のようなものを予感したこともあった。四人がよく知っていて、少なからず影響を受けている五人目の子どもがいて、ぼくはまだその子に紹介されていないのではないか。しかし、そう考えるのはどうしても不自然である。四人がそのひとりをぼくから隠しておかねばならない理由が、思い当たらないのだ、座敷童子(わらし)みたいなものだろうか、と考えたこともあった。

ゴーディたち四人の子どもが求めたあの「死体」は、見ず知らずの子どものボディでありつつ、同時に四人が四人とし

て仲よくやっていく基底の部分であてにしていた、五人目の仲間だったのではないだろうか。

無理に理屈をつければ、その五人目の仲間は、自分をふくめた現実の四人の共有する価値観や気分や意志を、ひとつの「人格」として想定した幻影にすぎないのかも知れない。自分とあとの三人をくらべたり、調整したりして構成される関係は、関係それ自体がひとつの価値をもつ。その価値の安定こそが隠れ家の安らぎの本質をなすものであったはずである。「死体」としてそのような集団的自己意識（奇妙な言い回しだけれども）を見る、ということは、四人の関係の破綻を確認することにほかならなかったのだろうか。

情報濾過器の機能

仲よしグループは、外からの情報をとり入れ、整理し、共有すべきものを選択する。テストの範囲やレポートの期限から、テレビ芸能情報、女の子ならファッション、男の子なら車やバイク、それに細分化された音楽、スポーツ、ゲームといった趣味領域に至るまで、雑多な情報を取捨選択して行動の指針を立て、それを共有するのが、中、高校生のグループの最大の機能だろう、とぼくは見ている。いや、大学生や若いサラリーマンでも、そのような情報濾過器を集団的につくっておかないと、世界がよく見えてこないといったら言いすぎだろうか。

情報選択には、一定の基準が必要である。その基準を個性的にひとりひとりが自分で立てることができれば問題はない。だが、みんなで渡れば赤信号も怖くない（怖くないだけで危険性はむろん高い）とする時代意識が、ひとりで渡る確実さを逆に危険視してしまっているからだろう。自分がおもしろいと思った「インディー・ジョーンズ」を、はたして仲間はどう受けとっているだろうか。夏休みの終りごろ久しぶりに仲間が集まる。しばらく離れてくらした間の話が出る。今度みんなに会ったら、このネタでジョークを言ってウケをねらおう、と用意していた話題にはこと欠かないはずだ。

そういう話が一段落したとき、ひとりが「おれ、インディー・ジョーンズ、見たぜ」とさりげなく言う。さり気なく言いながら反応に気を配っているはずだ。「えっ、おまえもかよ、おれも見た、見た！」とだれかが言ってくれることを、その子は期待する。「おもしろかった？　おれも見ようと思っていたんだ」という反応の方がもっとうれしいかも知れない。「なんだよ、おまえ幼稚だな」といった批判が、仲間のうちで映画に詳しいと定評のある子の口から出れば、ちょっと苦境に立つことも考えられる。

その短かいことばのやりとりをとおして、「インディー・ジョーンズ」は受け入れる価値のある文化か否かがきまって

しまう。間違っても妹と「魔女の宅急便」を見て感激したことは黙っていなければならない。いや、みんなの気分がうちとけてくれば、全体として共有すべき価値の体系は許容度を増すから、そういうタイミングさえはかれば、「魔女の宅急便」でも「小熊物語」でも大丈夫なのだけれども。

かわりばんこの弁証法

共有されるのは、価値の体系のみならず、それにそった経験全体である。そのグループ外の人間の価値観とそれが適合しにくい場合は、経験の共有は一般に共犯の色彩を帯びる。「スタンド・バイ・ミー」の子どもたちは、おとなの常識からも、それから完全に逸脱した年上の不良たちのエゴイズムからも、自らを守らねばならない。木の上の小屋の逸楽もふくめて、彼らのやることはほとんどすべて、共通の敵を想定した共犯意識に刺し貫かれている。

共犯は外との関係で生まれる緊張だが、内にあっては相互の経験の共有は「かわりばんこ」の民主主義を基本原理とするものらしい。孤独な遊具として一部のおとなから非難されたファミコンなども、子どもたちの遊び方を見ていると、数人で一台の遊具を「かわりばんこ」に使うときの方が「本番」で、ひとりで黙々と新しいソフトに挑戦しているのは、それ自体が十分楽しいとしても、リハーサルの感をまぬがれがたい。

昔の少女たちのまりつきや石けりなど、伝統的な遊びの組織論も「かわりばんこ」であった。各自愛用のボールを持っていても、同時に勝手についているのではおもしろくない。ジャンケンで順番をきめ、ひとりがやっているときは他のメンバーは審判をかねたギャラリーとなる。そして、失敗のたびギャラリーのひとりが主役となるのである。

こうした組織論は、俳諧の座を支配していたものとも、ジャズのプレイヤーがアドリブを一コーラスずつ受けもつ円環奏法とも共通している、といえるかも知れない。「かわりばんこ」とは個としての部分を、部分として生かしつつ、グループ全体に集約していく弁証法である。こうした経験の集積をとおして、「五人目の人格」のようにあらわれていた集団的自意識を、自分の中にすっかりとりこむことができたとき、そのグループはグループとしての使命を終るのだろう。「自己」の問題が、こうしてようやく始まるのである。

自己意識は、自己の危機から芽ばえる。その危機感が脅迫的に強まっている現代では、集団的に防衛しながら、「自己」のシミュレーションをもグループでつくるところから始めなければならなくなったのではないか。そんなことを思ってもみるのである。

（さいとう　じろう・著述業）

発言

からだの声を聴こう

鳥山敏子

この夏、モンゴルの子どもたちに会った。モンゴル大草原を四十キロ、馬で走りぬいた直後の子どもたちのどっしりした立ち方に目をみはった。

それに比べて、胸が落ちこみ、背中をまるめ、あごをつき出して立っている日本の子どもたちの増えたこと。特に男の子だ。二本の足ですっと立っている子に、めったにお目にかかれなくなった。しかも、静止すること、力を入れることになると、なかなかできない。これは、どうしたことなんだろう。つい最近まで、リラックスを重視していたわたしも、からだをひきしめる訓練をする必要を感じ、それを手がけ始めた。ことわっておくが、じゃあ、子どもたちがリラックスできているのかというと、あちこち固めて、からだはかたい。体育の日に発表された文部省の調査でも、今の子どもの柔軟性が問題にされた。びっくりするくらい、しなやかさがないのだ。上にのび、大地に足をおろす軸が通っていなくて、限りなくぐにゃっとした軟体動物のようなのだ。すぐ椅子の背もたれにからだをあずけ、両足を机のむこうに投げ出してしまう。それは、創造力がはたらいたり、考えたり、自分からかかわっていくからだではないのだ。

というより、想像力・創造力をはたらかせること、自分で考えて、からだ全身で試行錯誤をくり返し、とりくみ、挑戦再挑戦をくりかえしていくこと、自分から物や人にかかわっていくこと、それらの総合された遊びを思う存分やってみることなどの体験が保障されない結果として、からだはぐにゃっとしてきたのだろう。そう、もう「やらされることにうんざりしているからだ」なのだ。「うんざり」しながら何もやらず、自分から何かやり出そうというアクティブなものまでぬきとられたからだなのだ。

学校って、一体何なのだろう。この国家をつくるためにつくられた学校は、成立の最初から、子どもたちのためのものではなかった。しかし、なんとか、学校を子どもたちのものにしようと、たくさんの先輩たち、親たちは努力してきた。その努力は、実を結ぶにちがいないと思いながら。

教師になって、二十六年半。この間に、子どもたちにとってよくなったことに何があるというのだろう。学校だけでなく、学校をとりまく社会もそうだ。今、大人たちに

「もう一度子どもにもどって、今の、この時代を生きてみたいと思うか」ときくと、ほとんどの人が

「昔だったらいいが、今、この時代ならいやだ」とこたえる。しかし、そのこたえ方は、どことなく人ごとのようだ。こういう社会をつくったのは、大人たちだ。大人たちがこのしまつをしなければ……という自覚のある親はまだまだわたしの知る限りでは少数だ。この社会をよくするのは、誰かがしてくれるわけではない、自分からとりくんでいくしかないのに、どうして、親たちもこんなに受身になってしまったのだろう。

これには、いくつか原因が考えられるが、わたしが一番思いあたるのは、日本の教育が、親の受けた教育もふくめて、今だかつてひとりひとりの子どもたちの体験や、その中で思いついたり考えたりすることを本当に大切にしたことがないということだ。それを大切にしたりするふりをしながら、実は、自分以外の価値・評価に基準を合わせ、それに近づけることをやりつづけてきたのではないかということだ。じっくりていねいにものにふれたり、心ゆくまで納得するまでやりぬいていったり、自分で感じて動き、じっくり考え、自分の興味関心、自分のからだの要求と満足いくまでつき合って生きるということをしたことがないことだ。テレビやファミコンなどの間接、擬似体験なるものがふくれあがっている現在、なお、このことが大切なのに、そのことの大切さに本当に気づいていない大人が大多数をしめている。そうしないのは、あるいは、そうさせてもらえないのは、この「からだ」というものを信じていないからなのだ。好きなことをやっていると、とんでもないことになるという不安が先にきてしまうのは、そのためである。それは、自分というもの、人間というもの、このからだを信じていない人たちの考え方なのだ。子どもたちをみていると、人間というものは、相手の回路を通ってはじめて快になるということがとってもよくわかる。ひとりでは生きていけない。人と共に生きて、人もよくなり、自分もよくなって、快感はふくらんでいくようにできている生き物なのだ。それが、人を信じない大人に出会って、だんだんゆがめられていく。

「人からみてどんなにつまらないことでもいい。今、自分がもっともやってみたいことを、『もうこれで充分満足した』

と思えるまでやりぬいてみるといいよ。人間のからだはとってもぜいたくにできているから、それをやりきると、今度はもっとむずかしいことに挑戦したくなるようにできている」といって、受験勉強を拒否しているからだのわが息子に言ったことがある。受験体制に疑問をもつといいながら、けっきょく、現状を肯定するからだにしたてて、その渦の中にわが子をまきこませている親や教師をいっぱいみてきたが、彼らは、自分のからだの声に従って生きてきたことのない人たちなのだ。

たとえ、大人や親たちが自分のからだの声を無視して生きてきても、そういうからだをつつみこみ、いやしてくれる自然があり、遊びや、大地につながる労働があった時代は、何とか生きてこられた。ところが、今の子どもたちはどうだろう。「学べ」ば「学ぶ」ほど、生きる力はなくなり、人と顔を合わすのがいやになり、人をも自分をも信じれなくなっているではないか。

小学生のとき、わたしをへとへとにするほどエネルギッシュで元気いっぱい輝いていた子どもたちが、二十歳すぎたばかりなのに、年寄りみたいに背中をまるめ、あごをあげていう。

「女とつき合うにはお金がないとつき合えない。今の女の子は、いざ結婚という時には、やっぱり金と家とスタイル、それに出身大学、給料の多い仕事でないと相手にしない。だから当然ロリコン。みんなそうでない顔していて、けっきょくは、そうなんだよ、先生」

「どうして、女とつき合うのにお金がいるの」

「だって、喫茶店や映画に入るのだって金がいるでしょ。ワリカンなんてやってると女にきらわれるから、出かけるのは無理」

「どうして！　どうしてワリカンにしないの、女の方は！だって、お互い学生の身だから、ワリカンにしましょうって女はいうでしょ」

「いわない、いわない。そんな女にあったことないよ、先生。日本では、ウーマン・リブの活動は定着していないんだよ。だから、今は女は無理。三十歳位になって、自分でお金を稼げるようになってから考えることにしようって、おれたちの世代の男は考えてるんだ。でも、三十歳位になったら、そういうエネルギーはなくなるかも。今だって、研究心と創作意欲はめちゃめちゃ強くなってきたけど、その気はうすれてきたよ。会社人間が仕事に夢中になるのがよくわかるよ。宮崎さんが二十六歳にもなってその気があったのは驚異だよ」

わたしは不安になる。そうだろうか。二十歳そこそこでそういうエネルギーを押さえこんできた結果が、宮崎さんのやったことではなかったのだろうか。人間は動物なのだ。一番

サカリの時に、男は女を求め、女は男を求めるという生きもの性を発揮できない今の社会はやっぱりおかしいのだ。そういう生き物の本能を保障し、なおかつそれが女の泣き寝入りにはならない社会をつくること、をやらなければならないのではないだろうか。動物としての本能を封じこめ、「優しさごっこ」を強いている今の学校や親たちの子どもへの対応の残酷さ。それが、どれほど生きるエネルギーを奪いとっていることだろう。

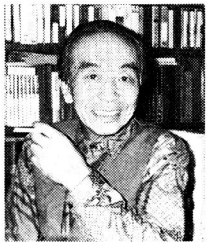
今、「本当に、からだにとって、どうなんだろう」というからだの視点から授業や学校、そして制度や環境や人間関係——このからだとかかわる一切のことをみていかないと、大切なことを見失ってしまう。さらにまた、それをかぎとるからだをするどくしていかないと、からだの視点ということがどういうことなのか、わからないのだ。

ひと

〈筐〉の村田直文さん

『筐』の村田直文さんをお訪ねした。杉並の閑静な住宅街の中、そこだけ塀が途切れて、丹精されたお庭が、通りかかる人の目を楽しませる。部屋の壁には、世界各国の魔女人形、ピカソの『ゲルニカ』、ジャワ更沙の絵、パリの古い地図etc。旅先で求められた思い出の品々の一つ一つが物語を持ち、語りかけてくるようだ。

山口県生まれ。幼稚園時代、既に、「他の子を扇動するので」と、〝退園処分〟になった「悪童」だった。小三のとき上京。当時の子どもたちにとっては、刃物を持っての喧嘩もしばしば。近くの朝鮮部落の子たちともやり合った。「ナンダ、こん畜生」とこちらは言い、相手も同様のことを言っているとばかり思っていたのを、十年以上たって、「ナンダサーランヨ、インガンヨ、マーリカッソ（俺も人だ、人間だ。同じ言葉を話す）」と言っていたのだと気づき愕然とする。そのことも、差別の問題に目を開かせることに。



自由の気風の強かった麻布中学へ。「校長相手に議論をするなら授業は出なくていい」という恩典をフルに利用した硬派学生だった。中三の十二月に太平洋戦争勃発。「軍人だけにはなるのよそうよな」と真剣に訴えかけてきた親友との出会いもあった。その前後の話の一部は四月号の『筐』にも。

東大法学部在学中、アルバイトで裁判実務。〝青臭い屁理屈〟が採用されたことでも「法廷の正義」に幻滅して、中学の教師に。

テストを教科書持ち込み可とすると、生徒たちは授業中懸命に書き込みをした。他に用意した、教科書だけでは解けない問題を、彼らはクイズのように楽しみにした。

三十年以上手がけている教科書執筆の仕事の他に、最近は、この春英国で出版され評判の、子供の解放を考える本“The Politics of Childhood”を翻訳中とうかがう。（稲邑）

発言

「海のぬいぐるみ」をつくる人と

高崎　明

養護学校の子どもたちと地域の子どもや大人たちがいっしょになって、演劇ワークショップをやっています。演劇ワークショップというのは、自分達で芝居をつくり自分達でそれをやってしまう、そういったことを通して、お互いが出会ったりいつもとちがう自分に出会ったり、あるいは新しい世界が見えてきたり、といったことがいろいろ体験できるようなそんな〝場〟です。月一回のペースで、もう四年もやっています。

でも、それは「障害児と共に地域へ」（編集部からの依頼のテーマ）といった感じでは今はありません。はじめた当初は彼らといっしょに芝居やったら楽しいだろうなっていう思いと同時に、彼らといっしょに地域へ出ていこうとか、地域で新しい関係をつくろうという思いがありました。そしてその根っこのところには、〝彼らのために〟なんて、今から思えばちょっとはずかしいような思いもありました。ところが、実際にワークショップをはじめてみたら、もう何もしなくてもワークショップのまんなかに彼らの存在がドーンとあって、彼らのそんな魅力が人を自然に集め、地域の人達との新しい関係も彼ら自身がどんどんつくってしまうんですね。そうなると、〝彼らと共に地域へ〟とか、〝彼らのために〟なんて言葉を口にするのがもう気はずかしいというか、ちょっとちがうんじゃないかって思うようになったのです。

紙のぬいぐるみを使って芝居をつくったことがありました。模造紙二枚に自分の好きなものの表と裏の絵を描き、その二枚を重ねて間に新聞紙を丸めたのをはさみこみ、はしっこをホッチキスでとめていくと、簡単なぬいぐるみができます。ぬいぐるみですから、たいていの人はミカンとかイモ虫とか赤ちゃんといったわりと丸っこいものをつくります。ところが、養護学校の彼らがつくったぬいぐるみのなかになん

と〝千円札〟とか〝海〟なんてのがあったのです。

あの薄っぺらな千円札がどうしてぬいぐるみになるのかとか、はてしなく広い海のどこがいったいぬいぐるみになるのかといった質問は、この際ヤボです。とにかく「どうだ、見たか！」といわんばかりに、大きな千円札と大きな海のぬいぐるみが目の前にデン！　と居座っていたのですから。ぼくのつくったイモ虫のぬいぐるみなんて、いっしょに並べるのもはずかしいくらいでした。まわりを見ると、同じものをつくった人が何人かいて、そのあまりに月並な発想にガックリきました。

健常者だなんてえらぶっていても、こんなふうに同じところに立って勝負すると、もう完全に負けてるのですね。その負けを素直に認めることで、私たちは彼らと出会えたと思っています。彼らのこと〝知恵遅れ〟だの〝精薄〟だのといってはばからない人が多い世の中ですが、逆に知恵が進んでいることの中身が、たとえばイモ虫のぬいぐるみぐらいしか思い浮かばないことであれば、なんというやせこけた進み具合なんだろうと思います。

イモ虫のぬいぐるみを作るような人達ばかりが集まるよりは、千円札や海のぬいぐるみをサラッとつくってしまうような人達もいっしょのほうが絶対におもしろいとぼくは思います。彼らといっしょのワークショップであんなにもおもしろいものがつくりだせたのは、なんといっても彼らのおかげです。そういうことがワークショップ参加者の間でごく自然に共有できるようになり、今や彼らはいないと困る存在です。

いっしょにいると勉強のじゃまになる、と普通学級からしめだされたり、生産の効率が落ちる、と職場からしめだされたりするのがあたりまえのようになってる世の中にあって、「あなたがいないと困る」と彼らにむかっていえるような関係が知らないうちにできてしまった（がんばってつくったのではありません）というのは、実に愉快だと思います。

同じ街のなかに彼らがいて私たちがいるとき、〝共に生きねばならない〟というちょっとしんどくなってしまいそうな関係ではなく、〝いっしょにいたほうがいい〟〝いっしょのほうが絶対おもしろい〟〝そのほうがトク！〟ってごく自然にいえるような関係を街のなかにもっともっとつくっていくことができたら、彼らはもちろん、私たち自身が街のなかでもっと楽に生きられるように思うのです。それが彼らといっしょにワークショップをやってきた実感です。

＊

＊彼らといっしょのワークショップを体験してみたい方は御連絡ください。十月より第五期目を始めます。そこでつくる芝居は、三月四日、横浜女性フォーラムのホールで発表します。ぜひ見にきてください。ワークショップの記録写真集もあります。

連絡先　☎045―934―4648　高崎

発言

中学生とぶつかりあうなかで

とだ みすず

今の子供たちが、変容して来ていると言われてから久しい。「子は親のあわせ鏡」と言われているが、その子供たちが、もし本当に変わってきているとしたら、これは親や社会（大人たち）の変容を、そのまま写し出しているに過ぎない。今、私は中学校に勤めながら、そんな感じを強く抱いている。

確かに、一昔前の中学生と変わった面はあるが、本質的なところでは、ほとんど変わっていないとも思っている。子供たちとぶつかりあうというよりは、さらにつき進んで、つき合って見ると、彼らは、愛らしく人なつっこい存在である。中には、人間関係の苦手な子も目につくが、そんな子でも、こちらが空っぽでつき合っていくと、心を開いて来る。現実には、そんなにスムーズにいくものではないが、要するに、大人どうしが心を割って話をするのと同じなのである。しかし、それが、つき合い方を変えると、大人たちには手に負えない異星人と化してしまう。

一般に「問題児」といわれる子供たちは、つき合っていくのに時間がかかる。しかし、目を転じれば、中学生という時期には非常に様々な子供の姿が存在する。小学生（それも低学年）の子供たちと同じように、カードを集め遊ぶような幼い生活を続けている子供たちもおれば、もう大人の世界を体験して世の中をハスに眺めている子供たちもいる。心の成長の度合いが、えらく違っていて、それぞれの子供たちが、中学生という枠組の中では論じられない。

そんな子供たちと個々に関わっていくには、画一的なつき合い方はできない、その子がどう考え行動するのか、その子との関わりの中でしかその子を知り得ないし、また、その子の成長をサポートしていかなければならない。そのことを再確認する場面は、その子供との大なり小なりの摩擦が生じた

時に多いのだけれど、大人と子供という年齢的な違いがあっても、基本となるところは人と人との関係であり、お互いを尊重しあう姿勢を二人で（あるいはそれ以上）で創っていかなければならない。

動物でもそうであるが、赤ん坊のときは、特に三ケ月頃から、他者との関わりに興味を持ちはじめ、相手を調べ、相手の動きにつき合う行動傾向がある。そして、さらに他者との共同で共通なものを創り出していくようなコミュニケーションをとりながら、大人へと成長して行くのだろうが、なぜか、子供たちの中には、その過程が分断されてしまっている者もいる。

「肥（こえ）（声）のかけすぎは根が腐る」というような言葉を聞いたことがあるが、母（父）親の一方的な声（雑音）のかけすぎから、他者との関係を断つことによる心の平安を選択したり、また逆に、寡黙な環境の中で、他者との関係の表層的にしかつくられない状況を押しつけられてしまった子供たち。実は多くの想いを抱きながら他者との関わりを切望しているのにも関わらず、その状況を打破できない、その術を知らない子供たちがいる。

自分の人生をエンジョイすることが第一となり、スマートな人間関係を求める大人たちは、子供たちとも軽い人間関係の間柄で、深く関わらず、関われず、そのくせ、無防備に自分の表裏をさらし、自分の都合で子供を動かし、大人世界のエゴを無意識に子供に植えつけてしまっていることが多い。だから子供たちをとり巻く環境も変わって来る。

どんな子供でも、特に「問題児」と言われる子供たちと接してみると、驚くほど人との関わりに飢えているのを、そしてさらに、大人からの愛情に飢えているのを感じる。人間関係に不器用な彼らにとっても、一般の子供たちにとっても、大人がおしつけでなく素直な気持ちで対等に話していくことは、非常な喜びであるらしいことは、彼らの顔を見ていればわかる。しかし、大人は、なかなか素直になれないことが多い。子供に迎合することと勘ちがいされては困るが、子供であろうと、大人であろうと、偏見や高慢さを持ち接する限りは、問題は解決しないと思う。

学級を持っていて思うことは、より一層子供とコミュニケーションをとることはもちろんだが、親たちとも、心を砕いてつき合う必要があるということ。親と教師が仲よく交わり、その中で子供が両方から愛されていると感じるとき、本当に子供は伸び伸び活動できる。そのためにも、大人たちは、心を開いて暖かいコミュニケーションをとっていかなければならないだろう。それにはまず、相手の出方を見てからでなく、今、自分から、それを始めることだと思う。

発言

高校生とのコミュニケーション

磯部　隆

つい最近のことでした。朝のショートホームの時間に、連絡事項を伝えたあと、HR長（クラスの代表者）が、「みんな立って下さい」というのです。一瞬、何事が始まるのだろうかと思ったのですが、ピンとくるものがありました。一学期にも同じ場面があったからです。全員の生徒から「きのうはアイスクリーム、ごちそうさまでした!!」と気持よいことばがひびいてきました。前日、体育大会で私のクラスが準優勝したので、ささやかでしたがアイスクリームのプレゼントとなった、それを、次の朝、感謝の気持ということで伝えてくれたのです。その声に接して、私は大変すがすがしく、また、そんな態度を示す生徒たちを受けもっていることをうれしく感じたのでした。

そして、私はこの感じをそのままにしないで、生徒たちに伝えておきたいと思い、次の日、こう話しました。「きのう、全員が立ち、一瞬、なにがはじまるかと驚いたけれど、あの君たちの態度とことばが、僕にはとても心地よかった、すがすがしく感じたよ！　一学期の終わりの球技大会で優勝した時もそうだった。こうして、言葉にして返ってくるって、感じがいいものだね。これから、君たちが卒業して大学生になり、また、社会人になっても、伝えられるといいね。けっしてお世辞というのではなく、ありがたいとか、うれしいという感じが、自分の中にあるなら、伝えられるといいね……」と語り、私はさらに、一つのことばを引用し板書しました。『気持があっても、それを形に表わさなければ、ないのに等しい』と書き、「この言葉、ある面で厳しいことばだけれど、われわれに訴えているものがあると思う。人はその時々にいろいろな感じや気持を抱く。大きくとらえれば、いい感じか、それとも悪い感じか、細かくは、ありがたい感じやホッ

とした感じなど、いろいろと心の中で、実は〝経験〟されているものです。問題は、それらをきちっと自分の中のものとして感じとめ、さらにそれを形にして伝えてゆくかどうか。ことばの態度で示さなければ、なかなか伝わらない。そういうことが誠実だと思う」と、以上のように話したのです。

数日前のことになりますが、今ふり返ってみて、いい場面をもつことができてよかったなと思っています。一つの実際場面を通して、私自身の気持や思いを伝えることができたからです。

ところで、「高校生とのコミュニケーション」という題を与えられて、今の私は何よりも、感情とか気持という言葉を浮かべます。それらが伝えられ通じ合ってこそ、コミュニケーションだと言えるからです。しかし、現実は、それらがスポイルされて、単なる事柄のみのやりとりに終始しているように思えます。それだけ、現代は、気持の伝え合いや通じ合いが希薄になっているように思えます。

たとえば、学校社会では、いわゆる受験体制下にあって、どうしても知識量を競うあまり、一方通行になり、事柄中心になりがちです。つい最近も、提出されたレポートにこう書いてありました。「……歴史には、人がいて、感情があったのですね」（D子）というのです。教科書には、確かに感情の記述がありません。私が担当している科目は、「高校日本史」ですが、何年に誰がどうしてどうなったかと、たくさんの事柄が、四〇〇ページにわたって書かれています。生徒にとっては、歴史とは、事柄のそれであって、生きた人間の歴史にはなっていないようです。D子にとっては、それだけに一つの発見だったのでしょう。

私が担当する授業では、しばしばレポートを生徒に要求します。定期テストにおいても、左半分は一般的な解答を求める欄ですが、右半分は、「この一カ月、授業を通じて自分自身に感じたこと、気がついたことを、どんな小さなことでも、具体的にレポートしなさい」と説問しています。一方で、受験を意識しながら、プリントした資料や視聴覚教材を使って、人物や事件をクローズアップするようつとめています。そして、その区切りのたびに、「それで感じたこと、気がついたことは」と問うのです。

人間性の喪失の時代といわれる現代にあって、大事にしてゆきたいことは、様々な事柄や出来事に接した時の「私自身の感じや気持」です。それらをどれだけ意識し、自覚してゆけるかは、今の私たちに問われている課題でしょう。なぜなら、私たちの多くの伝え合いが、事柄に終始して、それに伴う感じや気持を表明し、分かち合う場面があまりに少ないからです。

発言

男の井戸端会議

永田和宏

井戸端会議といえば、その昔は長屋の共同の井戸でおかみさんたちが洗濯やら炊事やらをしながら、隣り近所のうわさ話をかしましくおしゃべりするというものであったが、昨今はそんな井戸はなくなり、共同購入のサークルやら幼稚園の集まりやらがその代りになっているようである。で、男はといえば、その昔は町内の寄合いとか何とか理由をつけて、ちよいと一杯、よろしくやっていた。私の田舎では薬局を経営していたこともあって、店をのぞいたついでに、ずっと奥まで入ってきて、上がりがまちに腰を据え、お茶をすすりながら長々と親父と世間話をする近所のおっさんが後を断たなかった。彼らは議員でも町の顔役でもなかったが、今度の祭りをどうするかとか、時には床屋政談にも花を咲かせた。

昭和四十年代、高度成長期になっても、田舎はそれほどの変化はなかったようだが、若者の流出により祭りの神輿のかつぎ手は着実に高齢化し、当然、町内の寄合いの常連は固定化して、次第に集まりにも熱が入らなくなった。若者を吸収した都会は膨張したが、もはや砂漠としか表現され得ないような索漠とした人間関係しか生み出さなかった。一時間も二時間もかけて超満員電車で通勤しなければならず、ほとんどの時間を職場で過ごし、くたくたに疲れてやっと我が家に帰りついても、ただ、「めし、ふろ、ねる」と言って、寝てしまうしか出来ない環境では、男たちは隣りの住人に関心を持つことは不可能である。

都会の周りにドーナツ状に膨らんだ団地には、自治会やら町内会、小学校や中学校のＰＴＡがあるが、そこには母親と、昔からの地元の実力者と言われる人達しか見当たらない。男たちはどこへ行ってしまったのか。

横浜緑区のけやきが丘森林愛護会は、四年前に結成された。

団地に付属する一・二ヘクタールの保存緑地を緑が好きな住人でボランティアとして管理しようと言う趣旨の団体である。会合を月一回第三土曜日に行い、翌日、日曜日には草刈などの定例作業をすることになっている。さらに森の祭りやら肝試し大会、餅つき、竹の子採りなどイベントも企画し、団地のコミュニティの一つを形成している。会合にはおかみさんも出席するが、ほとんどが亭主である。その最大の原因は「男の井戸端会議」にある。どう言うわけか、男達がああでもないこうでもないと議論していると、たいていの女房は「男は議論が好きね」と言いながら、あいそをつかして逃げ出してしまう。酒が入ればなおさら、口角泡を飛ばしていつのまにやら夜更けに至る。中には激論を酒の肴にして黙って飲んでいる人も居る。こういう集団は今どき珍しい存在かもしれない。その証拠に周りにいくつかある団地にはいつまでたっても「男の井戸端会議」が出来たと言う話は聞かない。

通常、企業戦士と言われている男達が、団地の管理組合や自治会の理事会という場に仕方なく引張り出されると、必ずと言って良いくらい「企業の論理」で物事を割切ろうとする。団地は生活の場であり、さまざまな考えの人達が住んでいるソフトな人間関係を持っている。当然、上意下達のハードなシステムは存在しない。ここに「企業の論理」を持込むとどうなるであろうか。森林愛護会が最初に直面した事件は、管理組合の理事会がボランティアには保存緑地の管理は任せられない、と言い出した事である。その理由は管理に対する保証がない、いつお手上げになるか分からないと言うのである。参加する人がその力量に応じて森に係わりあい、話し合いながらイメージを作り上げて行くと言う方法は「企業の論理」では到底受入れられないばかりでなく、一部の住民が森を私物化しているとしか見えない。この考え方は、理事会が「声無き声」を代表していると言う一方で、住民の意見が全く聞えないことにむしろ恐怖している現れでもある。家に帰ってもコミュニティが「企業の論理」で動いているのでは、男たちはどこで安らぎが得られるのであろうか。管理組合や自治会の理事、学校のＰＴＡの役員になりてが無いのもまた当然である。不思議なことに、市や区の役所の市民課には自治会しか見えていないようで、新しく移り住んだ住民との意識のずれはいかんともし難い。

男の井戸端会議は、誰かが何かをやろうと言い出し、賛同者が集まれば、突然、あっというまに出来てしまう。機動性は抜群である。しかもその過程では様々な角度からの意見が得られるので、非常に面白いものが出来る。時には失敗もあるがそれは「マ、いいか」で許される懐の広さも持っている。そこには個としての人間が作り出す優しい集団がある。そして議論はそこから始まる。

発言

カウンセリングのなかで気づく

河村ふみ

カウンセリングを仕事にしたいと思ったのはそもそもいつ頃からで、何が動機だったのか。内的動機という意味で考えれば、幼児期から始まっていたともいえる。私は近所の遊び仲間から、今でいえばいじめの対象にされていた。いわれない嫌がらせや仲間外れはしょっちゅうだった。そんなときの気持ちはどうだったかといえば、なぜ私がいじめられなくちゃいけないんだという怒り、いじめないでよという要求、仲間外れにされた悲しさ、悔しさ、孤立感、そういったゴッタな感情がほとばしってしまうのをぐっと喉元で押え、涙を見せてはまたそこでバカにされるので、涙がこぼれてしまわないように、体の中からこみ上げてくる異物を喉に詰まらせながら、すごすごと家に帰った。それを吐き出せる場所は母でも父でもなく（二人とも私が弱みを見せるのを嫌ったから）祖母の胸だった。祖母にすべてを話し、祖母が私の頭をなでながら私の代わりに怒り、おまえはちっとも悪くない、いじめるほうが悪いんだと言ってくれたとき、初めて、私は自分の抑えられていた感情が解き放されて癒されるのを感じることができたのだった。

祖母と言う存在がなかったなら、私は今ごろどこかでカウンセリングを受けている側にいたかもしれない。祖母が私のカウンセラーになれて、父や母がなれなかったのはどうしてか、それは祖母が自分の感情を抑圧しない人だったからである。実に率直で自分に正直な人であった、「他人はだませても自分はだませないよ」と言うメッセージを常に与えられたし、おまえはそのままでいいんだよと、私を丸ごと受け入れてくれた。そのことが、私が自分を認められる核として作用してきたように思う。

自分がカウンセラーになってクライエントに向かう時、今

度は私が祖母の役をやればいいと思うのであるが……。その基本的なことを忘れて、最初のクライエントには失敗してしまった。クライエントの話を聞きながら感情を引き出そうとする一方で、この人の問題の原因はどこにあるのだろうと原因を究明したいという意識が働いてしまった。そんなことは初めから分かるはずもないし、それはクライエント自身が話しながら気づいていくことで、カウンセラーはクライエントのペースにじっくり付き合っていかなくてはならないのだった。大事なことは原因の究明ではなく、クライエントが抑えてきた感情を解き放てるように援助し、その感情を一緒に味わうことである。原因はどこにあるのだろうなんて頭の片隅で考えていたら、聴くことが疎かになってしまう。私は計らずも私の母の役割を採ってしまっていた。母は理性的・論理的な人で、感情を表現することが苦手な人であった。

失敗の原因はもう一つあって、クライエントの挑戦的、攻撃的な態度を、自分に向けられたものと錯覚してしまったことである。クライエントになる人は怒りを溜めこんでいる人が多い。それが、いきおい、対人関係において攻撃的な態度となって現われる。そのことに私が思い至らず、自分が攻撃されていると感じてしまったのは何故なのか、それは私自身に構えがあったからである。初めての仕事で、自分が果たして相手からカウンセラーとして信頼されるだろうかという不安が私に鎧を着せていたのである。

私は今、カウンセリングの他に自己表現トレーニングというのをやっているが、受講生はカウンセリングの勉強をしているという人がほとんどで、皆一様にカウンセリングというのは受容が一番大事だと教え込まれ、それを金科玉条のように思っている。しかし、相手を受容するためには先ず自分が自分に正直でなければならず、常に自分の中に起こってくる感情を見つめ、それに気づいていることが大前提だということにはなかなか気づかないようである。カウンセラーといえども生身の人間だから、クライエントの話を聞きながら様々な感情が湧き起こってくる。カウンセリングの勉強をする前は、そういった気持ちを押し殺して、『自分を無にして』相手の話に耳を傾けるのがカウンセラーだと考えていた。

カウンセラーはクライエントの気持ちを映す鏡だといわれる。鏡は曇っていたら真実を映さない。カウンセラーが自身の問題を解決して鏡をクリーンにしておくということは理想だけれども、生身の人間である以上葛藤は常に生ずるわけだから、自分の中に湧き起こってくる心理的葛藤を扱えるということがカウンセラーの条件になってくる。

カウンセラーは、クライエントの気持ちをみつめると同時に、自身の気持ちをみつめながら、クライエントの話を聴いていくのである。これを実践してゆくのは本当に難しいが。

◆学習の主人公たち◆

こんな友達がほしい

静岡県立磐田北高等学校三年生

橋野真由美

◆やっぱり、私達の年代で一番ほしいと思っているのは『親友』だろう。高校生にもなると将来のことを真剣に考える時でもある。そんな時に、自分の心を開いて何でも相談できる相手、そしてその相手も親身になって答えてくれる『親友』が一番ほしい。友達はたくさんいてもこの『親友』というのはなかなかできるものではないと思うけど。

井上　由紀

◆私がほしいと思う友達は、いっしょにいて楽しくて、お互いに何でも相談できて、ケンカできる、そして何よりも私を理解してくれる人。もしかしたら、自分がほしいと思う友達は、自分がなりたいと思う、自分があこがれている自分なんじゃないかと思う。私の理想の友人像に、お互いを高め合っていけるっていうことが加わったら最高だと思う。理想の友人像に自分が近づくことが、ほしい友達を得るための第一歩だと思う。

村松ゆう子

◆私にとって友達というのは、すごく大きな存在です。私は周りに影響されやすい性格なので、人の行動などに動かされたことが何度かあります。でもそういう事で自分の長所や短所が見えてきたり、人から何かを学べたりすることも多くあります。だから私は、年上でも年下でも何か自分にとってプラスになる影響を与えてくれる友達が欲しいと思うし、私もそんな存在でありたいと思います。

塩野　明海

◆私にはすばらしい友人がたくさんいます。どんな悩みを打ちあけても、優しくアドバイスしてくれる人、友達がたくさんいて、友達の輪を広げさせてくれる人、何かあった時、「ああ、こんな対処の仕方もあったんだなあ」と思わせてくれる人。これ以上の友人なんていないと思っています。ただ、もっともっと友達の輪を広げること、今の友達といつまでもつき合っていけることを願うだけです。

鈴木　佐織

◆私の周りにはいろいろな友達がいます。ですから今、これといって〝こんな友達がほしい〟ということはありませんが、しいて言うと、これから一生つきあっていける友達がほしいです。そのためにはこれから、いろいろな人とのつきあい方に注意して良い関係を保っていくことが大切だと思います。

奈良橋香里

◆やっぱり、いっしょにいて楽しい人が友達として一番良いと思います。現在私にはたくさん良い友達がいて、毎日がとても充実しています。いっしょにワイワイ騒ぐだけでなく、時には相談にのってもらったり、反対に相談をもちかけられたりもします。こんなつき合いができる友達がたくさん欲しいです。

藤村　景子

◆私はこんな友達がほしいといった感情を具体的に抱いた覚えがあまりありません。どちらかというと沢山の友達と仲良くなりたいという感が強かったように思います。しかし、私は初歩的な挨拶から多くの友人を得ているのです。挨拶は飾り気のないようで実は人の心まで動かす力を持っています。そんな挨拶の出来る人が私は好きです。

橋本　輝世

◆今、ふと思った。すっごく悲しいことがあったのに、涙が止まんないくらいつらいはずなのに、私はけろっとしている。なぜ？　私って鈍感なのかなぁ。ううん違う。そうじゃなくって、なんかとっても温かいものがあるんだ。なんかそのものに肩をよせてると安心できるんだ。いったいそれは何？

今、ふと思った、私が笑ってる。バカみたいに大きな口あけて笑ってる。この内気な私が。なぜ？　だって楽しいんだもん。

急に私が泣き出した。寒い。どうしたの？早く言わなくては、あの言葉。明日言おう。

よく考えると私には、これがとっても必要なのです。何よりも大切なものなんです。

鈴木　清子

◆私は友達がたくさんほしいし、いろんなタイプの友達とつきあいたいです。いろいろな人と会えば、視野が広がるし、様々な考え方を学ぶことができて自分にプラスになるからです。その中でもやはり一番欲しいと思う友達は本当に困った時に助けてくれたり真剣に相談にのってくれるような友達です。そして私もその友達が困っていたりしたら親身になって相談にのりたいと思います。

山下千名美

◆私はやはり友達というのは大勢いたほうがいいと感じます。楽しいだけじゃなくて、自分がみがけると思うからです。たくさんの友達の中にいると人の欠点とかも気付き、そういうことは自分はしてないかとか反省するし人の良い所はとりいれようとかも思います。

平野　幸枝

◆私はどんな友達がほしいのだろうと考えてもあまりよい答えは見つかりません。それは今の友達で十分満足しているのだと思います。どんなにたわいのない言葉のやりとりの中でも「こんな風な考え方、やり方があったのだな」と気づくこと、それが私にとって本当に楽しいことなのです。両親や先生に注意されそれに従うことより友達に感化されることの方がよほどすばらしいことだと私は思います。私はたくさん友達を作りたいのです。

青島はるみ

◆友だちはたくさんほしいし、廊下であってあいさつを交わすくらいの友だちなんかは、たくさんほしい。また、いろいろな面（勉強、趣味、クラブなど）それぞれの友だちがほしいです。そして、それぞれについて、まったく同じではなくて、少しだけ違って、話し合いができたらいいです。

最後に、今まで書いてきたものすべてを持った、なんでも話せて相談できる、すてきな親友ができたらいいなと思います。

榑松　立子

◆私がそばにいて欲しい友達は、喜びを二倍に増やしてくれ、悲しみを半分に減らしてくれる友達。実際私にはこういう人達がいるが、本当に私にとって自慢できる友達である。

あと、もうひとつ。信じられる友達。お互いが信じあえるようになるのってすごく大変だとは思うが、私にとって友達の第一条件は信じあえることである。

永井　幸子

◆私は「友達」には二つあると思います。一つはあいさつをしたり楽しく話をする友達、もう一つは自分の思っていることを話せる友達です。一つめの友達は誰でもたくさんいると思いますが、もう一つの友達はそんなにたくさんいないと思うし、私なら一人いれば十分です。自分の気持ちを素直に出せる友達が一人いればとても心の支えになると思うし、つらいことがあっても大丈夫です。私は一人、素直になれる友達がいて、他にもたくさんの友達がいればいいと思います。

山野辺真須美

◆誰もがほしがるもの。それは、何でも話せる友達だと思います。浅いつき合いの友達はたくさん持つべきだと思います。こういう友達を持っていると、忘れ物をした時、すごく助かります。深い何でも話せる友達――これは一人か二人しかできないと思いますが、一人で十分です。何度も何度もけんかして、お互いの性格が分かって。それでもなお、まだ友達でいる。そんな友達がほしいです。

鈴木　純子

◆私は、何でも言い合える友達が五人ぐらい欲しいです。二人で親しい友達としてつき合っていくのもいいけれど、私は多勢で楽しくやっていくのが好きです。私は、相手のことも自分のことも、知りすぎたり、知られすぎることはあまり好きではありません。だから私の場合、複数の方がよいのです。それに、いろいろと変化があると思います。

匂阪　恵子

◆「友達」って何だろう。辞書で調べてみると、「一緒に何かをして遊んだりして、親しくつきあっている人」とあった。この意味での友達なら何人でもいると思う。でも、自分の悩み事などを本心で話し合える友達は、ほとんどいないと思う。一人いれば十分なのではないかと思う。

だから私は、いつでも一緒にいて、落ちつき、普段はふざけ合っていても、お互いに悩み事などがあった時、心を開いてつき合える友達がほしい。それには、自分も信頼されるような人になりたい。

高須　有里

◆どんな友達が欲しいかと聞かれれば、やっぱり姉妹のように、つきあえる友達がいいです。姉妹喧嘩をして、その時には、もう二度と話なんかしないと思ってもしらないうちにまた話をしているのです。つまり言いたいことも言えて、喧嘩も出来て、時には真剣に相談も出来る友達です。

大庭　千歳

◆私は、兄弟のような友だちがほしいです。困ったときには親身になって相談にのってくれ、また助けてくれるような、それでいてうれしいことがあったときには一緒に、心から喜んでくれる友だちがいたらいいと思います。

高柳　千恵

◆普段は冗談を言い合って笑っていても、良くないと思った事は厳しく意見を言ってくれる、こんな友人がいてくれたら私はとてもうれしいし、助かる。中学生の時、朝の小テストで、C君が、仲の良いN君に、「答えを見せて」と頼んでいた。すると、N君は、「だめ。お前のために見せないんだからな」と答えていた。最終的にN君が見せたのかどうか、その後の事はわからないし、冗談だったのかもしれない。だけど、この会話を聞いた時、こういう関係いいなァと思った。

とにかく、自分がだらしなくていいかげんな性格なので、それを平気でしかってくれるようなたのもしい友人が欲しい。

柳沢　住也

◆「その服似合わないネ」ってそんなふうに言ってくれる友達が欲しい。普通、人の心にさわるようなことは言えないと思う。勇気をもって率直に言ってくれる人は、私のことをよく見てくれ、私の心までも探ってくれるあるいは探ろうとしてくれる人だと思う。私のしたことに対してそれは間違っているときっぱりと言って欲しい。そして私も言いたい。それにはまず、相手が私のことを認めてくれる自分を作らなければいけないと思う。

友達というのは相手を信じれば信じるだけ自分も信じてもらえる、そう思って相手を信じる心を持ちたい。

投稿

家庭科教育における消費者教育的視点

加藤真代

一、埼玉県の消費者教育

埼玉県の学校教育における消費者教育は、主として消費者行政が主管してきた。消費者保護基本法制定は一九六八年だが、一九七三年以降、県消費者生活センターで小中高校家庭科・社会科教員を対象に教職員消費者生活夏期セミナーを開催するようになったのは、草の根グループや生協を初めとする県消団連や県民の声が、学校教育における消費者教育を待望して働きかけたからにほかならない。

定員二百名、志ある現場の先生方が毎年参加されていたが、八十年にやっと県教育委員会と共催になった。同時に、消費者教育とは何か、といった内容体系の検討と、学習指導要領の関連項目等の洗い出しが行われ、八三年に「消費生活関連家庭科指導資料（小学校編）B5・一四六頁」、八四年に「同（中学校・社会科・技術・家庭科編）B5・二二〇頁」が発行され、県下全域に配布された。八五年からは、教育委員会、教科研究会、学識経験者と消費者行政で構成する消費者教育推進協議会が設置された。同時に、指導資料を活用した消費者教育モデル授業の研究・実践が、小学校家庭科、教育事務所二地区三十校中学校社会科二地区二十四校、中学校技術・家庭科一地区十六校で展開された。それらは実践報告書にまとめられて全県下に配布されたと聞いている。また、八九年一月から、消費者教育通信という、論文・実践報告・書籍紹介などが盛り込まれた冊子が発行され、関係各所に配布されている。

八八年から、県・県教委は、大宮ソニックシティで、全国から教員、事業者、消費者、教育行政担当者約五百人が参加する「さいたま消費者教育フォーラム」を共催している。

フォーラム二年目の今年は、夏休みも終わりに近い八月二十九日、多数の現場の先生方の参加があった。全体会で、文部省初等中等教育局視学官、柿沼利昭氏の基調講演「新学習指導要領と消費者教育への取組」があり、部会は二つに分かれて、「契約社会に向けて―学校でどう教えるか」と、この拙文を書かせていただくきっかけとなった「家庭科教育における消費者教育的視点とは」が催された。

実は、私はこの部会の五人のパネラーの一人であった。司会は、先頃、ウイ書房から『消費者教育の創造』を出された東大教育学部教授、宮坂広作先生で、二時間半という短い時間内では、司会のご苦労もさぞやと思う一方、発言者としても、自分の意を届け得ないもどかしさを感じた。そのことをWe編集部に訴えたところ、貴重な誌面を提供して下さった次第である。以下は、消費者運動をすすめてきた立場からの〝家庭科教育における消費者教育的視点〟についての一私見である。

二、消費者教育の必要性

日本のこの三十年余りの経済の変転を、真に〝豊かな経済発展〟といえるかどうかは、後世の判断にゆだねるとしても、経済成長の多様な側面、段階は、私達に、物やサービス

お金の豊かさと共にさまざまな消費者問題をもたらした。

食品添加物や合成洗剤のような安全性の問題、虚偽誇大な広告や詐欺的商法といった不公正な取引に係わること、輸入自由化や消費税にみられるような高度に政治的な問題など、家計を通じて社会と関わるには、常に鋭敏な生活感覚が求められている。このような時代に大人と共に生きる子供消費者もまた否応なく、そのことが要求されている。昔のように、親や祖父母の知恵や常識が、子供の防波堤にはなり得ないし、子供は子供なりに独りで、時に仲間と共に、この経済社会の波間に溺れることなく、たくましく成長していってもらわなくてはならない。私達は、家庭や地域で、子供の消費者教育をすすめると同時にこの十年余り、学校教育における消費者教育を定着させる運動をしてきた。私達のこのような働きかけについてその根拠となる関連法を記しておく。

憲法二五条＝生存権、国の社会的使命、二九条＝財産権、一二条＝自由・権利の保持と責任とその濫用の禁止。

消費者保護基本法五条＝消費者の役割。

教育基本法第二条＝教育の方針……等。

三、主婦連の調査からみえてきたものと、私たちの取組み

八五年に、主婦連合会では、経済企画庁の委託調査に、「学校における消費者教育の現状と課題」を取り上げた。消費者行政は、明治以来の産業育成行政と異なり、正にゼロから女を中心にした主権者パワーが生み出してきたものである。姉妹団体の地婦連ともども、私達が取り上げて政策提言してきたことは、一定の限界があるとはいえ、他の社会的な力とあいまって、これまでに、いくつかの行政の施策や法の制定をもたらしてきた。

この調査では、母親の意識のアンケート調査を、小中学校における実態を授業参観と教師面接による調査で行った。その結果判明したことは、

㈠親が学校で消費者教育が必要と思っている項目は、環境公害問題が一位、次いで物を大切にする、三位が生産や流通、四位商品の安全性、五位訪問販売など新たな売り方等であった。

㈡実践校とそうでない学校の親の比較をすると、前者の親の方が「おやつを家で用意、教科書に目を通している、消費者教育をするために学校へ働きかけている」比率が高く、学校での消費者教育の実践が、家庭の消費者教育に相乗的に作用していることがうかがえた。また、子供をとりまく消費者問題について、家庭で話し合っている親は八三％と極めて高かった。

㈢消費者教育実践校の実態は多様で、授業を通して生徒、保護者に対し社会にも目をむける姿勢を養うよう努力している例、校長の理解のもとに一人の教師が男女共修で取り組んでいる例、県から家庭科研究の指定をうけ家庭科を軸に理科、国語、算数などと関連づけて取り入れている例等、さまざまであった。

私達は、消費者教育の導入による学校教育の質的転換を期待し、すでに奮闘している先生方へのエールを込めて、これらの調査を基にいくつかの提言を行った。主なものは、㈠消費者教育の目的、概念、意識のＰＲ、㈡推進するための方法や教材等の開発、㈢教員養成講座に消費者教育を必修に、㈣教育課程の中での位置づけを明確に、㈤継続して校内に定着させるために、実践研究できる環境づくりを、㈥関係資料や情報が入手しやすいよう、米国のリソースセンターのような組織を、㈦教育と消費者両行政の連携を緊密に、㈧消費者教育研究活動への助成・発表の機会の確

保、(ル)技術・家庭科で男女共修の全面的実現を、(ヲ)国公立大学など高等教育機関による地域に開かれた消費者教育に関する公開講座を、等々である。

四、消費者教育の目指すもの

最近、経済企画庁消費者教育研究会は、「学校における消費者教育の新しい視点—市民社会における消費者教育へ—」と題して報告を行った(一九八七・七)。報告書は、現在の指導要領における消費者という言葉や消費者問題のとらえられ方が「保護される客体」であったり、学習テーマが時にかなっていないとしている。そして、消費者は「自らの経済生活だけでなく、経済社会全体を形つくる主体者」として、「どう行動すればよいのか」という点をまず理解させ、その上で消費者問題を考えさせることが望ましいとしている。

また、前記のさいたまフォーラムでも、文部省柿沼視学官は、「社会の変化に伴って、消費者教育の焦点はちがってくる、が、狙いは主体性をもった消費者。生活における基本的価値観・哲学をもっていけるように手助けしていくことにある」とし「消費者としての生徒と共に考えていく。生徒自らの生活課題と結びついた学習を、座学でなく工夫して展開していく」ことが推奨された。

では、私達市民にとって望ましい消費者教育とは、どのようなものになるのであろうか。それは一票の行使が政治の在り方を決めると同様に、一回毎のお金の使い方が、経済社会や自然環境のあり方まで変えていくということに気づかせる教育、一人の市民が労働者として金稼ぎに真剣になると同じ位、消費者としても真剣になれる人間を育てる教育ということになろうか。消費者教育は、賢い買い方(契約も含め)、だまされない方法の学習といった矮小化されたところに止まってくれては困る。好ましい消費者教育は、消費者としての子供に影響を与えるだけでなく、成人して生産・流通の場に入った時、人権や環境に配慮して仕事ができる人間をも育てる可能性をもっている。家庭科では、基本的な生活技術がこなせ、賢い選択のできる自立消費者の育成と同時に、現代産業社会が生む構造的な消費者問題に、家族や地域の人びと、さらに世界の人びとと連帯して解決に立ち向える、たくましい子供達の育成を期待している。私達日本の消費者も加盟している国際消費者機構(IOCU・国連諮問機関)は、消費者が目指す権利として次の八つをあげている。一、生活の基本的ニーズが保障される権利　二、安全の権利　三、知らされる権利　四、選ぶ権利　五、意見を反映される権利　六、補償を受ける権利　七、消費者教育を受ける権利　八、健全な環境の中で働き生活する権利。そして、これらを実現するために必要な消費者の責任として、一、批判的意識—商品やサービスの用途・価格・質に対して敏感で問題意識をもつ、二、自己主張と行動—自己主張し公正な取引を得られるよう行動する、三、社会的関心—自らの消費行動が他者に与える影響、とりわけ弱者に及ぼす影響を自覚する、四、環境への配慮—自らの消費行動が環境に及ぼす影響を理解する、五、連帯—消費者へ利益を擁護し、促進するため団結して行動する。

具体的な生活場面で、これらを実践するためには、消費者自身の自覚、自立だけでは片づかない。資本や組織力をもつ企業と消費者との力の差を埋めるための法や制度の整備、行政の存在を実現するものもまた、消費者自身の肩にかかっていることをつけ加えたい。皆様からのお声を頂戴して、さらに考えさせていただければ幸いである。

(主婦連合会常任委員)

野菜カレーを作ろう

●熊本県家庭科サークル
岩田智子

一、はじめに

教師になって三年目、二回目の三年生の担任になりました。ちょっとおとなしいかなあという感じの三十五人の子どもたちです。

御船小は熊本市から10㎞ほどはなれた畑や田んぼのたくさん見られる御船町のまん中にあります。しかし農家の子はうちのクラスには一人もいません。だから、たばこの葉に石を投げて破いて叱られるなどの事件をおこします（実は私もたばこの葉が傷つくと売り物にならないことを初めて知ったのですが……）。とにかく、周りはいい環境がいっぱいなのに、田や畑で何が作られ何ができるか知らない子ばかりです。それに、野菜ぎらいの子もたくさんいます。

また、共働きの家が大多数なのに家庭での仕事を分担している子はほとんどいません。私の家も共働きでした。だから私自身三年生のころから夕飯作りなど決まった仕事を担当させられていました。クラスの子どもたちを見ながら、なんだかうらやましいという半面、これでいいのだろうかと心配にもなりました。

そこで、子どもたちに、何か楽しみながら野菜のことを知り、家の手伝いができるようになり、野菜をよろこんで食べることができるような勉強ができないものかと考え、野菜カレー作りにとりくみました。

二、野菜カレーを作る

①野菜っていろいろあるんだな

まず、子どもたちに野菜あてクイズをしました。オクラ、

かぼちゃ、カリフラワー、さやいんげん、しょうが、春菊、セロリ、なす、ピーマン、ブロッコリー、ほうれん草、れんこん、この十二種がクイズの問題です。ちゃんと知っていたのはピーマン、なす、かぼちゃ、ほうれん草。れんこんは五人、春菊は三人しか知りません。

次に、三十四種の野菜について、好き嫌いをたずねてみました。結果は、二十種以上好きだという子は七人。逆に、五種以下の子がなんと五人もいたのです。びっくりしました。

こんなクイズやアンケートをするうちに、子どもたちの中から、「ピーマンが食べられるようになりたい」とか、「私、野菜は全然だめだん」という声が出てきました。親さん方からも、「野菜ぎらいで困っている」とか、「みじん切りとかして好きになるように工夫しとるばってん……」などの声が聞こえてきました。

②野菜を切ってカレーにする

明日が授業という日、子どもたちに「生で食べられる野菜や好きな野菜、いろいろ考えて持っておいで」と指示し、当日をむかえました。以下は授業の風景です。

T　さあ、持って来た野菜を見せてもらうよ。

S　はあい、はあい。（子どもたちは大はしゃぎ、各々ビニールぶくろに入れてきた野菜を発表したくてうずうずです）

T　誠也君、何持ってきたの？

S　なすびときゅうりとじゃがいも。

T　勇君は？

S　キャベツと人参とねぎとトマト。

こんなふうにして、みんなの持ってきた野菜を紹介し合いました。集まった野菜は二十種類以上ありました。

T　それじゃ今日は、みんなが持ってきたので料理をするよ。料理するためには何ばせなん？

S　切らなん。

T　そうね、切る前には？

S　洗う、手を洗う、皮をむく。

などと言いながら、野菜を洗い、皮をむくものはむき、そのまま切れるものは切ることにしてはじめました。包丁を使ったことが全くない子が五人、ちょっとドキッとしましたが、三つの約束、㊀人に刃をむけない　㊁持ったまま動かない　㊂使わない時はバットの中におく、をしたあとスタートです。包丁は、ふつうのものとペティナイフを用意しました。

子どもたちは、「先生、どぎゃん切っとよかあ」などとわあわあ言ったり、片手に野菜、片手に包丁を持って、あたりをきょろきょろ見回したりしていました。「自分で好きなように切っていいよ」と言ってもなかなか切る作業がはじまりません。そうこうしているうちに、一人二人と切りはじめる

子がでてきました。一度包丁を入れると、どんどん切りはじめました。

皮をむく野菜は、えんぴつ削り型の子がほとんどです。「ちょっと見てごらん。こんなふうにするといいとよ」ときき手の親指を案内役にして皮をむくといいことを示範しながら説明しました。「ほお」と感心しながら挑戦しはじめました。なかなかいいぞおと見ていると、「手が痛かあ」と泣き声がします。ちょこっと切って血がにじんでいます。みほちゃんです。「よしよし大丈夫」とばんそうこうを貼ってやると、またがんばってじゃがいもの皮をむきはじめました。

みほちゃんは、そうやって落ち着いたのですが、となりでそれを見ていたてつや君がぶるぶるふるえてなかなか皮むきにとりかかれません。相当、怖かったのでしょう。でも当のみほちゃんが元気に皮をむいているのを見て安心したのか、しばらくすると、がんばってむきはじめました。

時間がたつにつれ、子どもたちは、だんだん自信がついて、楽しみながら切るようになってきました。皮をむく野菜以外を切っていた子も、「かぼちゃが固くて切れない」と包丁をかえたり、「ほうれん草はすかんけん、みじん切りにしてね」と注文をつけたりしています。

それぞれの野菜を切り終えて、切った野菜をさわらせました。

T どう、固い？　やわらかい？

S 人参は固い。かぼちゃも。

T それじゃみんなの切った野菜をなべに入れるよ。

各班から集められた野菜は、大なべいっぱいになりました。

T こんなにいっぱいあるよ。さあこれを今から煮るからね。ほどよく煮えたところで子どもたちに見せました。

T ちょっと、さっきとくらべてどう？

S くさかあ。量がえらい減っとるね。色が変わっとる。

などと、なんだかこれ食べられるんだろうかと不安そうです。

その後、カレールーを入れ味つけをしました。できあがった野菜カレーをごはんについでやりました。

食べる前に、自分の切った野菜がどんなになったか、色や固さはどうかなどたしかめながら食べるように話して、「じゃあ、いただきまあす」と試食に入りました。いつものカレーには入ってないきゅうりやトマト、オクラなどなどの野菜の入ったカレーです。「野菜の大嫌いな知子ちゃんはどうするかな？　きゅうりと言われただけで泣くみほちゃんはどうするかな？　明子ちゃんは？……」と見ていると、おいしそうにパクパク食べています。「みじん切りした人参が見えん」とか、「レタスがとけた」とか、口々に言いながら、十分もたつと、「おいしかねえ」「うん、おいしか」「おかわりしょう」

という声がほとんどです。ほぼ全員がおかわりしました。
知子ちゃんもみほちゃんも明子ちゃんも、全部食べてしまいました。給食ではほとんどの野菜を残すのにと、私はうれしさ半分、驚き半分です。
その日は子どもたちも私も、大満足で家路につきました。

③野菜を切ったり食べたりして、たくさんのことを学んだよ

次の日、子どもたちに聞いてみました。

T　ねえ、楽しかった？
S　うん、楽しかった。
T　てつや君は？
S　気持ち悪かったよ。（ぶるぶるふるえながら切った子です）
T　あら、気持ち悪かったんね。でもね、あれでね、いろいろ勉強してるんだよ。
S　ふうん。
T　日記にね、カレーのこと書いた人がいっぱいいたね。みんなの読んだんだけど、いろんなことに気づいてるんだよ。先生、とっても感心しました。だから何人かのを紹介して、みんなで勉強したいと思います。
と言って日記を読みました。てつや君の日記です。

「今日、野菜の勉強をする時に、手をけがしないように思いました。そうして、はじめにたまねぎを切った時には手はけがしませんでした。いもを切った時にもけがはしませんでした。でも手がぶるぶるふるえていました。手をけがしなくてよかったです」
全員が「あははは」と大笑いです。「私とみほちゃんが、手を切ったけん、てつや君は、わあって言ってびびっとったとよ」とみきちゃん。
T　でも、じょうずになったもんね、てつや君。じゃあ次はかよちゃんのね。
「わたしは、きゅうりを持ってきました。切りおわるとまた切りたかったから、先生にさつまいもをもらって切りました。切るときかたかったのでぼうちょうをとって切りました」
T　かよちゃんはさつまいもが固かったことを発見したね。
S　カリフラワーの根っこの所も固かったよ。人参も。かぼちゃも固かった。
T　じゃあ食べた時は？
S　あっ、やわかった。やわかったよねえ。
T　それじゃ次はこうじ君のね。
「玉ねぎを切るのを手伝っていたらなみだが出てきそうだった。食べたらトマトがうえってはきだしそうになったけどお

いしかった。おかわりしようと思ったけどおなかがいっぱいだったからしなかった。またこんど食べてみたいなあ」

T　トマトは生でも食べれるでしょう。煮たらどうだった？こうじ君は食べてみたらおいしかったって。

S　うん、おいしかったよ。先生、きゅうりはおえってきた。きゅうり、きゅうり。（みほちゃんの方を見て言い始めました）

きゅうりの嫌いだったみほちゃんが急に泣き出しました。

T　あれ、みほちゃんはあのカレーの時きゅうり食べれたでしょうが。元気出してカレーの時食べきれたとよって言い返しなっせ、ねっ。

と言うと、「うん」とうなずいて泣きやみました。自信が出てきたようです。

このように、きらいな物が食べきれた子が、みほちゃん以外にもたくさんいました。

④その後の家庭での子どもの様子

こうやって授業は終わったのですが、その後のことを親さんたちに聞いてみました。すると、「献立をよく聞き、食べ物の名前を知りたがるようになりました」とか、「うど、しょうが、カリフラワー、セロリなど今まで全く知らなかった野菜の名前に興味を持ち、買い物に行くと、たしかめて私に教えてくれます」などと、野菜に対して興味を抱きだした子どもの姿が見えました。また、「ピーマンは体にいいからとへんな顔をしながらも食べるようになりました」と、嫌いな野菜に挑戦する子どももいます。

三、終わりに

この授業で、小学三年生でも包丁を使って切る技能が修得できることがわかりました。また、いろんな野菜を使うことにより、野菜に対して興味・関心も高まってきたようです。

それ以外にも、野菜を煮るとかさが減ること、生で食べられるものは煮ても食べられることも知ることができました。一番よかったことは、野菜を食べきれなかった子が、食べれるようになったことと、家で食事作りの仕事に少しずつではありますが、興味を示し、手伝ったりすることがふえたことです。

三時間の授業は、子どもたちにとっても私にとっても楽しくよい学習ができたのではないかと思います。五年生から家庭科が始まるわけですが、三年生でもじゅうぶんこのような学習ができるのですから、低学年からの家庭科を構想することが必要だと思いました。

人がやすらぎ、命を育む住まいとは

●三重県一志町立一志中学校
島田喜美子

人がやすらぎ、命を育む住まいとは、いったいどのような場であろうか。そこに生活する人を雨や風や夜露から守るだけでなく、身体的・精神的欲求を満足させ、やすらがせ、明日へのエネルギーの再生産が行われる場である。すなわち、食事・睡眠・家族のだんらん及び子供を産み育てる場なのである。

しかし、現状は、どうなのだろう。外から疲れて帰ってきた時、家族一人ひとりが、身体的・精神的にやすらぐ場を保証されているであろうか。

我々をとりまく住環境には、騒音問題、日照問題、狭小住宅、セットされた画一住宅等、人間性を無視したさまざまな問題が山積みされている。これらの問題を生徒に見つめさせ、追求するなかで、人間らしく生きるための住まいとは何かを学習させ、住文化を担う一員として、住環境についての基礎的な知識及び能力をつけることが大切である。

そこで、地域から得られる教材を求めて実態調査を行った。調査方法および調査対象は、二年生百六十八人が、自分の住んでいる地区を中心に、一人三軒を目標に調査した。

調査項目は表1のようなものである。

地域の調査結果より、問題点として騒音が上げられた。各地区の騒音状況は、次の通りである。

1　野村地区四四件を調査した結果、昔からの村二一件と新住宅地一六件、団地七件である。この地域の問題としては、排水が悪い、車の音、電車の音、工場の音などの騒音問題が上げられている。この地区はR一六五、近鉄線に面している

表1　アンケート調査項目

地域と住まいのアンケート　　年　月　日

担当者

① 地区名（　　）

② 地区の形態（団地以外の新住宅地、団地、昔からの村）

③ 家の様式（和風、洋風、和洋折　）

④ 家族の人数（　　）人

⑤ 家族の形態（核家族、複合家族）

⑥ 家の建材（木造、ブロック、鉄骨、ユニットハウス、その他）

⑦ 部屋の数（　　）

⑧ 個人の部屋があったら誰の部屋で目的は何に使用されていますか。

⑨ 家族全員が集まって話しをしたりテレビを見たりする部屋はどこですか。

⑩ 日当りはよろしいですか。（よい，わるい）

⑪ 騒音問題はありませんか。（ある，ない）

⑫ あると答えた人は何の音ですか。（　　）

⑬ 今住んでいる家で、何か希望があれば記入して下さい。※㊀新しく建てかえたい

⑭ 住んでいる地域でこのようなものがあればとか、ここの所を直して欲しいとかあれば記入して下さい。

⑮ 母親が働きに出ていますか（出ている，出ていない）

⑯ 働いていると答えた人は、次のどれにあてはまるか答えてください。

（パート，正社員，自営業，その他）

⑰ 農業は行っていますか。（行っている，行っていない）

⑱ 家のなかの仕事を家族で分担して行っていますか。（いる，いない）

⑲ 略図でよろしいから間取図を記入して下さい。

家がある事と、小規模な工場が数箇所あるからである。

2　小野辺地区一六件を調査した結果、ここは昔からの村で農村地域である。この地区の問題としては、騒音問題があると答えた人が三三％と以外に多い事である。この村に工場があることが少々影響しているのである。

3　野口、東町地区四四件を調査した結果、この地域は四四件とも新住宅地であるということがわかった。この地区の問題点としては、排水、道路の整備、外灯の設置それに騒音問題があると答えた家が四〇％と非常に多い事である。特に線路から二メートル程の所に家が建っているなど問題が多い。

4　川方地区一九件を調査した結果、昔からの八件、新住宅地八件、団地三件である。この地区は畑地が徐々に宅地化されていく現状にあります。そこでこの地区の問題としては、道路を広くしたい、排水を作って欲しい、という要望やこの地区も近鉄沿線なので騒音問題があると答えた家が二六％と割合が多いことである。

そこで、騒音の身体的影響、測定法、防音の方法などについて考えるため、次のような授業を計画した。

一、指導計画

1	住居学習の意義と住まいの役割	1	
2	住まいの歴史	1	
3	住まいの現状	6	(1)
	ア、地域と住まいの関係について		
	イ、自分の家をとりまく環境と問題		(5)
	・住まいと騒音		(1)（本時）
	・住宅難・狭少住宅		(1)
	・給排水・ゴミ処理の問題		(1)
	・造成地問題		(1)
	・セットされた画一住宅		
4	健康な生活と住まいの条件	10	
5	将来の住まいのあり方	2	
		計20時間	

二、本時の指導のねらい

自分たちの住まいを取り巻く騒音問題について考えさせ、人間らしく生きるための住まいとは何かを考える力を養う。

三、学習過程（表2参照）

この授業より、生徒から次のような授業の感想が得られた。

表2　学習過程

段階	学　習　活　動	指導上の留意点	教具その他
課題の発見・把握	実態調査の結果騒音のある地域はどのあたりだろう	校区内地図を見ながら考えさせる	校区内地図
	校区内地図を見て班で話し合い発表する。	代表者を前に出させ地図に示させる	
	円グラフを見て確認する。	調査にもとづいた各地区ごとの円グラフを貼りつけていく	円グラフ
	なぜこの地域に騒音問題があるのだろうか	道路、近鉄、工場などが原因であることを発表させる。	
	ＶＴＲを見てどの地域かをあてる	○教師が線路ぞいとＲ１６５線で測定しているＶＴＲを見せる（10分間）	自作ＶＴＲ
	音の測定にはホーンという単位を使うことを知る	○音の単位を教える	騒音計
課題の解決	どれぐらいの音が何ホーンなのかを体験する。	○ＶＴＲの音は何ホーンなのか考えさせ発表させる（音量は騒音計であわせておく）	
	色々な色を出す ○声を出さない時 ○ひそひそ声 ○大声で怒鳴る	○実際に騒音計を使って測定し生徒に身をもって体験させる。	
適用・発展	騒音は身体的影響を与えるのだろうか	○騒音の身体的影響について考えさせる。	
	班ごとに話し合い、発表する。	○人間らしく生きるためにはどうしたらよいかを考えさせる。	
	騒音を防ぐにはどうしたらよいかを考える。	○自由に班ごとに考えさせる	
	本時の学習をまとめる	二重窓にする、防音材を使う防音壁をつける、行政に働きかける。	

●騒音問題も、人間が生活していく上で健康上よくないことがわかりました。私の住んでいる地域は、このような問題がなかったので、気にしなかったのですが、この学習を通して、騒音で困っている人がいることがわかりました。健康的に生きるためには、静かな環境が必要なことがよくわかりました。

人にとっての住まいは、「命を育み、やすらぐ場」でなければならない。つまり「住まい」は、人間生活の基盤である。

しかし、その基盤になる「住まい」が、今日どのような状況なのであろうか。建売り住宅が氾濫し、外観ばかりをよくし、そこに住む人間を忘れている。人を中心に考えた「住まい」はどこにいったのであろうか。人の生きる権利としてもう一度私たちの「住まい」を考えなおさなければならない。

一戸建ての住宅に住める者は、まだ恵まれている。家が欲しくても、なかなか入手できないのが現状である。通勤可能な条件でということになると、土地の価格は、一生働いても返しきれないようになってしまった。

このままでは、低所得者は、いつまでたっても劣悪な住環境から脱出できないということになる。また我が国の住宅政策は、欧米諸国と比較してみると、貧弱である。その理由の一つとして、基本的人権としての住宅保障にかかわる社会的責務についての国民の意識が低いことも上げられる。好ましい住宅水準の実現は、公共体が国民に生存権として保障すべき内容と、個人が私的要求の実現として努力し対応するべき内容とのかかわりの中で果たされるべきものである。

そこで、家庭科の授業としては、子供たちが自分をとりまく現状を認識し、その問題に意欲的にぶつかっていくような姿勢の生徒を育てていかなければならない。このような意図で展開した指導計画であり授業実践である。

はじめは、実態調査に「行くの、いややなー」と言っていた子どもたちも、調査後の授業には、ずいぶん意欲を燃やし、自分たちの地域を見つめ、そこに問題点を発見し、その結果「騒音問題」が自分たちの地域にあることに気づいた。

今までは、自分の身辺の雑処理でしかなかった住居学習に新しい試みを取り入れ、生きた授業ができた。

しかし、今後の課題として、指導計画を練り直し、騒音問題だけにとどまらず、給排水・ゴミ処理・汚水処理問題など、より多くの問題を見極めさせる芽を生徒に育てていかなければと考えている。

課題解決学習の中からの成長

●山形県立新庄南高等学校
田村より子

新学習指導要領で、家庭科は大きな変革期を迎えようとしています。しかし、その中身は共学家庭科とは名ばかりで、政府と財界が一体となって進めている、ひとづくりの片棒をかつがされる危険性を、大いに含んでいます。

八年ほど前、地域の食文化を教材化した実践例を持って、日教組教育研究集会の全国大会に参加しました。席上、家庭科の男女共学運動を熱っぽく報告する各県の代表者に魅せられて、「早く我が県も見習わなければ」という焦りと肩身の狭さを感じて帰ったものでした。共学についてはそれ以前から「男女共修をすすめる会」の会報やいろんな本を読んでいたので、カルチャーショックはさほど強くはなかったのですが、集会でかわされた家庭クラブの問題は、今も頭にこびりついています。今回発表された新学習指導要領で、高校家庭の三科目に共通して「家庭クラブ・ホームプロジェクト」が学習内容に挙げられていますが、全国大会の光景を思い出して、手放しでは喜べないものを感じます。

私は普通科・家政科・商業科の三学科が併設されている新庄南高等学校に勤務し、専ら被服関係の専門科目を担当しています。前任校は普通科の進学校で、家庭クラブ加入をすすめられても断っていたのですが、女子校として長い伝統のある本校では、家政科の三クラスが加入し、根を下ろしていました。転任当初は、家庭科の男女共学の理念からすれば、「なぜ家政科が職業に関する学科なのか」、「家政科の存在理由は？」、「家庭クラブに振り回されるなんて、おかしい。でも、彼女達が主役になれる唯一の場としての意義はあるかもしれない」、「ホームプロジェクトという課題解決学習は、

主体性を育てるよいチャンスではないか」等と、自問自答の中で葛藤する日々が続きました。

しかし、周囲の状況が少しずつ見え始めると、「家政科は確かに問題だが、普通科の方がもっと問題が大きい」と思うようになりました。というのは、進学校を目指す本校の普通科は、ほんの一握りの進学者の希望達成のための学習内容を、ついてゆけない生徒たちにまで強制してしまうために、消化不良を起こしたり、学習意欲をなくしてしまう生徒たちを多く作り出しているからです。こうした受験体制の中で、無気力になっている生徒たちを見ていると、目標がはっきりしていて、体全体を動かして学習しなければならない家政科や商業科の方が、ずっと楽しく生き生きとしているように思えました。しかし、そうした我田引水的な安堵感も束の間で、実は生徒たちにはもう一つの顔があったのでした。

◎四十五人との出会い

一九八五年四月。私は、本校にたった一クラスだけ設置されてある家政科一年生の担任になりました。十年ぶりの担任なので、立派なクラスにしたいものだと、意気込んでスタートしました。しかし、年度初めの慌しさから解放されて、生徒たちの顔と名前が一致した頃になると、「いったい彼女たちは何のために登校して来るのだろう」、「真剣に学ぶ気持があるのだろうか」という疑問が私の中に頭をもたげてきたのです。おしゃれと遊びに心を奪われた行動や、授業に対する意欲の乏しさ、他学科に対する劣等感を裏返しにした虚勢に対する憤りでもありました。一人一人、それぞれにとても素敵なものを持ちながら、現実には甘えと怠け心で自分を磨く努力もせず、何かというと、「どうせオレたちはバカだから……」と逃げる。そして、自分たちを注意したり叱った先生を一方的に非難するばかりで、自らを問いません。そんな彼女たちにいら立ちを覚えるのでした。

転任当初の胸のふくらむ思いも意気消沈しようとした時、「家政科ならではのクラス作りをしてみたら」と、先輩の先生が励ましてくださいました。私も雑念を一掃、がっぷり四つで卒業までの長期戦を耐え抜いてみようと決心しました。それ以来、「やる気」をどう起こさせるかが、私の大きな課題となりました。

◎クラス経営と教科指導の柱

家政科で学ぶ専門科目は、人間生活をより豊かに営むための力をつけるものであり、実生活と密着した内容であるため、学んだことをすぐ生活に生かすこともできます。しかし、教壇に立ち、生徒の反応を見るとどうも勝手が違うのです。前任校のようなピリッと引き締まった緊張感と響きがありません。授業で生き生きしないと、ホームルームでも積極的な発言や協力も得られないものなのですね。ぺちゃくちゃ

南高の家政科に入学した動機

① 最初から家政科に望んで希望した　9人
② 中学の途中から自分の意志で希望した　17人
③ 他学科希望であったが、成績をみて、しかたなく希望した　16人
④ 先生や親に言われて嫌々ながら希望した　1人

とおしゃべりはできても、話し合いや討論が出来ない彼女たちのホームルーム活動を見て、「入学時の中途半端な気持（表参照―'85年6月、一年4組45人調査）が、そのまま学習からの逃げにつながっている。貴重な三年間を意味のないものにしてはいけない」と痛切に思いました。そこで、三年後、家政科で学んだことを誇りにして卒業できるよう生徒を育てたいと、教科の指導とクラス経営をしました。

自分の言いたいことをきちんと筋道立てて発表することができるように、朝のショートホームルームと家庭科の授業の最初に、三分間スピーチを実施しました。テーマは「新聞記事に見る家族や家庭生活の問題点について」とし、現在の家族や家庭生活が抱えるさまざまな問題を新聞記事から拾い、それに対する自分の意見を発表させました。

「家庭一般」の授業では、受け身で丸暗記の学習から脱皮して、主体的に学ぼうとする姿勢を作るために、課題解決学習としてのホームプロジェクトを積極的に取り入れました。始めてみると、与えられた知識の丸暗記に慣れきっている生徒には、面倒臭い以外の何ものでもありませんでした。「頑張って」と、投げ出しそうな生徒を励まし、根負けしそうな自分に鞭打ちながら続けていくと、思わぬ人が予想外の活躍を見せたりして、生徒も教師も共に新鮮な気持で教材に向かうことができるようになって来たのです。こうして、我がクラスも少しずつではありますが、真剣に学習に取り組む姿勢が出て来たようです。

◎ホームプロジェクトで主体的学習を

家族・家庭経営の所で、疑問に思ったことは調べてみよう。皆で話し合ってみよう。気付いたことはやってみよう。と、小さな小さな課題学習を数回した後に、我が家の生活から自由に課題を見つけ出して、その解決を図っていくホームプロジェクトを、夏休みの課題としました。

各人が夏休み中実施したものを、クラス発表会で全員が発表し合います。その中からクラス代表を選び、校内発表大会で学校の代表を決めます。我がクラスでは、アイディアに富んだA子の「布に命を……家族のためのリフォーム作戦……」と、身につまされるB子の「弟の視力低下を防ぐために」が選ばれ、この二つのホームプロジェクトに磨きをかけるために、クラス全員の協力体制を取りました。クラス員を二手に分けて、A子とB子の主力スタッフと調査協力班、発表の資

料作り班の役割分担を決めました。以後は、この主力スタッフを中心とした話し合いに任せておいたのですが、意見は多く出るがそれらをまとめるのが難しいと言うので、筋道を立てる所に手を貸しました。あくまでも生徒の自主性を損わないようにしたいと、口をはさみたくなる衝動を押え、じっくり待ちました。

◎生徒が変わった、クラスが変わった

今まで関心を示さなかった生徒たちも、事実上クラス対抗戦のようになっている校内発表大会へ俄然意欲を示し始め、発表までの二ヵ月間は、自分たちでやるんだという意欲込みで活気が出て来ました。今まで、こうした努力や充実感から置き去りにされて来た生徒たちだけに、「やればやれるじゃないか」と、改めて見直してしまいました。

そうした中で、「布に命を」が校内代表に選ばれました。内容はごく平凡なリフォームでしたが、家族への愛がほのぼのと伝わってくるものでした。発表法も皆の知恵と得意分野が生かされて、イラストあり、毛筆やゴシック体を用いた説明文ありで、バラエティにとんだものでした。特に、普段は規則違反の常習で私の頭を痛めさせているF子のイラストが効果バツグンで、発表を縁の下で支える役を買って出たその気持がうれしく、外面だけで見てはいけないな、と反省させられました。

A子（発表担当）―クラスではミーハーで通っており、少々無責任な所がある。

C子（指示棒担当）―素直で誠実ではあるが、消極的で恥ずかしがり屋。

D子（作品紹介担当）―温和な性格ではあるが、自主性が乏しく消極的である。

E子（スライド担当）―素直であるが、学習意欲がなく、成績はいつも最下位である。

このように、A子を直接援助したスタッフは、クラスでも目立たない存在であり、リーダーシップをとった経験もありません。この四人に、東北大会出場が決まった頃から大きな変化が出て来ました。何事も他人任せの姿勢が消えて、自分たちで話し合い、練習し出したのです。自信がそうさせたのか、四人の歯車がしっかりと回り始めたのです。そして、彼女たちが変わったと同時に、クラス全体が変わり始めたのです。甘えと劣等感を打ち破って、自分らしさを十分伸ばす四十五人に、という期待をこめた試みだっただけに、その変化がうれしく、胸にこみ上げてくるものがありました。五月に開かれた東北大会に向けた活動の中で、「私たちもやれば出来るんだ」という自信を得たためか、三年の夏休みのホームプロジェクトは、期待以上の広がりを持って私のもとへもどって来ました。夏休み中に出来た人間的なつながりは、それ

のみに留まらず、ホームヘルパーと一緒に在宅老人の介護に回るグループや、幼稚園児の時間外保育の手助けに通うグループが出て来ました。教室から出発した学習が、大きな広がりを持って生徒たちを生き生きと伸ばしました。差別選別教育の中で、身についてしまった劣等感との戦いに、ちょっとだけでも軍配が上がったような気がします。

次はG子、H子の感想文です。

G子

私が本気でホームプロジェクトに取り組んだのは二年の時でした。何人かが集まって何気なく話したのがきっかけでした。「老人問題に取り組んでみよう」と、話が決まり、夏休みから始めました。

何回も足を運び、係の方からお話を伺ったり、神室荘に行ったり、今まで経験できなかった事沢山経験し学びました。高校生になって今まで以上に沢山の人と出会えたように思います。本当にH・Pを通して人間の心が感じられました。

H子

二年の頃から、老人問題というものに取り組んできた私達ですが、そのなかでいろんな事を学びました。こんな大きな問題を私達が、少しでも解決に近づけることができるのだろうかという不安もありましたが、みんなやってみようということで、夏休み中もがんばってきました。若い人から見過ごされつつある老人問題を、このままにしてはいけない。そう思いました。

一人暮らしの老人の訪問、神室荘、新寿荘の訪問など私達の体験は決して無駄なものではないと思います。老人に対する考え方が、少しずつ変わってきたようにも思います。途中で、「こんな解決しない問題やったって無駄だ」などと、投げ出しそうになりました。しかし、私達が今、投げ出してしまったら誰がこの問題について考えてくれるのだろう。そう思いました。私達が訪問した老人の方で亡くなった人がいました。家族にもみとられないで死んでいったおじいちゃん。こんな孤独な死に私達は強いショックをうけました。老人問題、真剣に考えていかなければならない問題の一つです。

しかし、こうした活動は一歩間違えば、高齢化社会における福祉対策として、行政の肩代わりをさせられることにもなりかねず、家庭クラブやホームプロジェクトの取り扱いは慎重でなくてはならないと思いました。本校のような学校では、自信をつけていく格好のチャンスでもあるが、一方では、やはり問題だな、と心が揺れます。全国的な普通科志向の中で、本校も学科の行方で論議がかわされています。家庭クラブ・ホームプロジェクトや家政科についての御意見をお聞かせいただければと思います。

●○●今月の読書から○●○

稲邑恭子

〝ことばが劈かれるとき〟

竹内敏晴著

◆竹内敏晴さんのお名前を知ったのは、鳥山敏子さんの書かれたものを通してだった。すぐれた授業実践で子どもたちや父母を惹きつけながら、教師集団の間で村八分にあい心の安まることのなかった一人の教師が、竹内さんと出会い、レッスンに通うなかで、そんな自分を徹底的にぶちこわしてゆく。自分の授業は、自分が強引に夢中になっていることに子どもたちをつき合わせていただけではないか、それを勝手に、生き生きしていると思いこんでいたのではないか。一年半ぐらい滅茶苦茶になり、子どもたちの前で「もうできん、ごめん」と床に寝転がってしまう状況にまで陥りながら、少しずつ、からだの敏感さをとりもどし、〝他人の世話をすることによって元気をとりもどしてきた〟呪縛から解き放たれてゆく。〝ブタまるごと一頭食べる〟などの授業で有名な鳥山敏子さんの、かつての話である。（その間の経緯は、竹内敏晴著『子どものからだとことば』にもふれられている）。

竹内さんの書かれたものは、読み返すたびに新しい発見があり、ハッとさせられる。

幼い頃、中耳炎をこじらせ難聴に、十二～十六歳の五年間、全く聴力を失った著者は、やがて回復し、ことばを獲得する苦悶のさなか、敗戦のショックで再びことばを失う。自殺への傾斜。子どもたちにせがまれて語り聞かせをするなかで声を取り戻してゆく。演出の仕事を志し、岡倉士朗氏を訪ねて、「ぶどうの会」へ。「意識が主体であり、その計算にしたがって、素材としてのからだを使って動きを組み立てる」近代演劇論への疑問にぶつかり、野口三千三氏の野口体操、ポーランドの演出家グロトフスキーのからだとこえの訓練と出会い、〝話しかけのレッスン〟ほか独自の治癒としてのレッスンを確立してゆく。終章の「からだそだて」の観点からみた学校教育への提言は示唆深い。「絶対にことばを必要とする状況、そのときのからだになったとき、はじめてこえを発してみよう」にドキッとする。（思想の科学社　一五〇〇円）

★この号を読むにあたって、テーマに関連した、執筆者の方々のご著書を一部紹介します。

村瀬　学
『子ども体験』
『理解のおくれの本質』（大和書房）

加藤春恵子
『広場のコミュニケーションへ』
『女たちのロンドン』（勁草書房）

斎藤　次郎
『子どもたちの現在』（風媒社）
『放課後の子どもたち』（岩波書店）

鳥山　敏子
『いのちに触れる』（太郎次郎社）
『からだといのちと食べものと』（自然食通信社）

高崎　明
『街かどのパフォーマンス』（太郎次郎社）

家族と家庭科

■酒井はるみ

高等学校学習指導要領にみる

「家族」領域の特徴

発足当時の高等学校は、(旧制)中等学校を母体としていたから、現在私たちが考えるほど、高校がすべての人たちにかかわりのあるものではなかった。現在は小中高を通して家庭科を考えることが必要な時代であり、また指導要領に投影される時代の特徴を見るために、あえて高校もとりあげた。

学習指導要領家庭科編高等学校用(「試案」は付されなかった)は'49年八月に発行された。それ以前の暫定的なものと比べると、違いの大きさに驚かされる。この間に民主主義体制がすすみ、特に民法改正('47年)は家庭科に大きな影響を与えた。

「家族」領域は、'49年指導要領ではじめて設置され、「家族」領域の原点であり、かつ家庭科四十年の歴史のなかで最も豊かな内容を持っていた。この内容構成を掲載したい。

さて、「家族」領域の「まえがき」には次の一文がある。

「新憲法のもとの家庭生活、民主的な家族関係のあり方……(略)……。これらを解決し、真の民主的な人間をつくり、新しい憲法に生きる社会をつくるたいせつな仕事の根底が、この『家族』という課目の内容になるのである」

'47年版で家庭科を「家庭建設の教育」と表現したなかに、民主主義の家族を表わすキイ・タームが使われていなかったことを指摘したが、'49年にはこのような形で盛りこまれ、きわだった特徴となっている。しかも「まえがき」は枕詞に終わらないで、「家族」の内容を規定している。たとえば単元三の目標一、二の指導内容などを即座にとり出して示せる。

'47年指導要領の家族観は楽しい家庭や家族の和を強調していたが、'49年版では新憲法のもとの民主的な家族関係のあり方が明記された。改正民法が発効し「家」制度を否定するだけでなく、さらにすすんで民主主義の下の家族のあり方を具体的に明示できるようになったからである。十月号で教育改革が二段階改革として行われたことを記したが、家庭科の家族領域に関しては、「家」制度の否定という第一段階をクリアした後、民法改正を経て、ようやくにして第二段階の改革、つまり民主主義にもとづく家族の提示を実現したのである。

〔家族目録〕

単元1　**友だち**

1 友だちの價値を知る
2 人に好感を持たれる人物になる
3 人に好感を持たれる人物になるには，どうすべきか
4 友情をつちかう能力
5 初対面の心得

単元2　**成人するということはどういうことか**

1 成人になるということの実際の理解
2 成熟したいという望みを持つこと
3 個性の発展について理解を深める
4 社交のまたは仕事の生活に満足に順応して行けるようになること
5 よい社交機関や社交関係を認識し，それにはいって行く心がまえ

単元3　**私の家庭と家族**

1 家族が社会・国家の基本的単位であることの認識
2 家庭生活における民主主義的な生活の理解と價値の認識
3 自分自身を批判的に見ることを学ぶ
4 家族どうし，うまくいかないこともあることを理解し，更にその場合の態度について学ぶ
5 家族が子供に與えているものに感謝する
6 家庭の持っている楽しさに感謝する
7 家族の楽しみと慰安のために，つねに自分の責任を持つ習慣をつける

単元4　**結婚の資格としたく**

1 個々の成長発展をとげる
2 結婚生活に成功するのに必要な要素を認識する
3 一生の伴侶（りょ）（配偶）を選ぶ資格と能力
4 家庭生活を，じょうずにやって行くに必要な技術と力能
5 結婚の準備に必要な物質面の理解
6 結婚に対して法律の重大であることを認識する
7 結婚の身体的な面の認識
8 結婚生活を成功させるには，おのおのが互いに調整し合わねばならぬことを理解する
9 結婚生活を成功させるに必要な精神生活

単元5　**親になる……私**

1 妊娠の身体的・精神的意義を知る
2 親になるということの意味を知る
3 妊娠中の注意
4 親になるために必要な資質を知る

単元6　**仕事に成功するには**

1 仕事に成功するには，個人的特長の重要であることを知る
2 成功に影響を及ぼす個人的特質
3 外容のたいせつなことを理解する。外容をととのえることに，誇りを持つ
4 仕事のための着物と，遊びやその他のための着物との相違を知る
5 着物の手入れについて，よい習慣をつける
6 健康を保つということは，自分にとってばかりではなく，仕事に対しても責任あることである。十分休養することの必要を知る
7 能率に食物が重大な関係のあることの認識
8 職場にある人々にとって，協調することの必要を理解する
9 職場に対する忠実
仕事に興味を持つ
機敏に仕事をする
職場のどんな物も私用に使わない
周囲の者に公平であること

〈注〉一般家庭……単元1～単元4
選　　択……単元5～単元6
すべての表記は原文通りである

親子論と心理学

親業について考える (2)

小沢牧子
(カット・井田裕子)

親の権力性をみつめる

親子問題というのは、権力関係問題であると言いかえられる。子どもは親に養われているという現実があり、それが子どもを弱者の位置においている。また養われているだけでなく、大人に保護されたい、頼りたい、そして愛されたいと、子どもは強く願っている。安全に生きていくためにそれが必要であることを、子どもは身体で知っている。なんといっても、親は強者の位置にある。親と子の関係を誠実に考えぬくということは、親が身に帯びたその権力性から目をそらさずに、とまどいながらも、子どもとぶつかり合って自分を変えてゆくことをさすのだろう。それは、人と人の上下関係や抑圧関係を、どうやって対等な解放された関係に変えてゆくかという、しごくめんどうな課題なのだから、すっきりしたものであるはずはない。すっきりさせようとすれば、うそがしのびこんでくるのだと思う。

私が親業にひっかかるのは、それが子どもとの見せかけの対等関係なのではないかということである。対等という柔らかい衣につつまれた、強固な操作・権力関係なのではないかという疑問である。

抜きがたい教育的視点

前回に引いた、女の子と父親の対話をもういちど引こう。「ねえお父さん、小さいとき女の子のどこが好きだった?」とたずねる娘。親業を修めた父親は応じる。「男の子に好かれるにはどうしたらいいかって考えてるみたいだね。ちがうかい」。相手の問いに直接応じるのではなく、問いの背後にある感情に焦点を当てて解読し、その感情へと設定を切りかえる。そのことで娘の関心は、男の子の社会や父親の体験という外側の世界ではなく、自分自身の内面へと移行する。カウンセラー役の父親との会話はつづき、娘は「自分の憶病な態度」を反省し、「やっぱり話して、危険を冒してみなきゃダメなのね」と結論を出す。父親は自分の役割の成功に満足

して、次のように結ぶ。「能動的な聞き方のおかげで、娘は建設的な自己変革に結びつく行動を新しく自分で考えだすことができた」と。

ここには、抜きがたく教育的な上からの眼ざしがあり、子どもの問題意識を、自己の内面へ還元していく操作性がある。「カウンセリングは問題に対する態度を取り扱うのであって、問題自体を取り扱ってはならない」と、ある企業内カウンセラーが語っているのを読んだことがあるが、個人が状況のなかで抱えるさまざまな問題を、個人の内面の問題へと還元してゆくのがカウンセリングの技術である。個人の心がけの問題へと。「あんな先生、がまんできないわ、信じられないくらい退屈なのよ！」という教師への憤りが、親業的展開を経て、「でもまあ、それに慣れた方がいいのかもね。イヤだからって勉強しないでいたら、いい大学に入れるような成績を取れなくなっちゃうから、自分が損するわね」に行きつくくだりも同様だ。苦しみのなかでのともかくの緊急避難としての是非はさておき、家族のなか、親子関係にまでそれが適用され広まることに、私はおぞましさを覚える。その操作性を「能動的な聞き方」というのでは、子どもは救われようがない。見せかけの対等性のなかに、その欺瞞性を見やぶるすべもなく、やさしく、しかし徹底して支配されつづけるのだから。

率直さとは何か

親業の手法のひとつに、「わたしメッセージを使う」というものがある。子どもに上から命令するのでなく、親もひとりの人間として率直に、自分の怒りや失望などの感情を伝えることを勧めている。たとえば「散らかしちゃだめ！」の代りに「きれいなお台所がまた汚れてると、ほんとにガッカリしちゃうわ」のように。親が権威ある〝親的立場〟に安住して子どもを叱りつけるのではなく、ひとりの人間として率直であることはたしかに大切だし、よりすてきなことだ。しかし効果をねらった率直さや、仕組まれた率直さは、すでにそれ自体自己矛盾であり、率直という名に値しないものであるのは明らかである。親業とは正しくは「親効果訓練」の名をもつことは前号でのべたが、「効果」という言葉がいかに多く登場することだろうか。「わたしメッセージは、親にとって受け入れるのが困難な子供の行動を変えさせるのに効果的で……」、「わたしメッセージのほうが、抵抗や反抗を生むことが少ない」のように。人を変える専門家の技術に学び、その技術を親も身につけ、相手を変え成長させよう、と呼びかける。

親子間に波風をたてないスマートさは、一見心地よく、実は根っこのところで子どもをいっそう深く欺いていると私は感じてしまうのだ。来号でもう一回、論じつづけたい。

海の輝く日

作ること食べること

佐藤通雅

（カットも）

「君作る人、僕食べる人」「私作る人、あなた食べる人」というようないい方は、「僕」「あなた」の側から発想されているにほかなりません。テレビのコマーシャルに登場したとき、性差の固定化と反発が出、ついにとりやめになったことは記憶されている方も多いでしょう。あれ以来それほどの歳月はたっていないのに、「私」「あなた」への男女入れ替えはかなり自由になりました。少なくとも、「私作る人」の「私」が女性なら陳腐だ、男でなければコピーとしての力はないというところまできました。

ところで私は、性差を語ろうとしてコピーを思い出したわけではありません。ベトナムと中国の難民船が次々に日本に上陸してきたという例の出来事を知って、とっさに頭に閃いたのがこのコピーです。コマーシャルが性差別としてさわがれたとき、私の胸には二重写しになってもう一つの風景が浮かんでいたのです。それは都市と地方の問題でした。もっと具体的にいえば東京と田舎の問題です。私は岩手県に生まれ育ち、現在は仙台に住んでいるわけですが、地方生活者であることの劣等感は東京にいる人には想像できないほどに強かったのです。今でこそ中央と地方の差はかなりのところ短縮されました。しかしそれ以前は非常に落差が大きく、東京に行かなければすぐれた知識も才能も身に付かない、地方にいては一生うだつが上がらないと思われていました。現に私の兄弟は四人いるうち二人が大学を東京ですごし、そのまま就職しました。一方私は地元の親や家を捨て切れず、華麗な生涯を諦める思いでとどまりました。地方定住者は多かれ少なかれ、こういう体験をしています。いったい落差とは何だったのか。一口にいって文化が低く、貧しいということでしょう。もっと具体的にいえば農業主流の地方は労力を費やすわりにはもうけが少なく、しかも汚れるということです。それに対して都市生活者は手を汚すことなく、清潔に働いて文化を堪能できる——というのが地方から見たイメージでした。つまり地方は「作る人」で、都市は「食べる人」に当たります。近代の社会は、作るという第一次産業よりは消費産業の方に価値を置いてきました。それは肉体労働よりは頭脳労働

の方が上だと見なすことでもあります。これが中央と地方に落差をもたらしていったのです。一方また地方にもこの構造が侵入し、農業に見切りをつけてサラリーマンになろうとする人が次々に出てきました。私のいとこは農家の後継ぎでしたが、農業をいやがって農学校の先生になりました。そして生徒には「農業は大事だからしっかりやれ」と激励しつつ、さすがに後ろめたさは隠しきれないといったものです。もう「作る人」に固定化されるのはいやだ、「食べる人」の側になりたいという欲望は抑えきれなかったのです。

こうしてある日気づいたとき、日本は国をあげて「食べる人」になっていました。全国どこに行っても同じような表情になり、純粋な田舎は観光用以外、存在できなくなりました。米作り日本一はもはや英雄でなく、過去の遺産です。もはや手を汚す仕事は嫌厭され、清潔思想だけが大手を振ります。若者の朝シャンはその帰結にほかなりません。

ところが第一次産業なしに私たちは消費生活を送ることができません。それが今、どこにあるか。ほかならぬ近隣の弱小国です。かつて都会が地方に押しつけたことを、今度は海の向こうに押しつける。そこの人々は貧しさから立ち上がれない。そこでかつて地方人が東京をめざしたように、日本に渡航する。ところが清潔思想にどっぷりつかった日本人は、汚れを払うように忌避する。こういう構図を私たちは見ているわけです。

ああ、つらいなあと慨嘆するほかない自分にいっそうつらくなります。なにしろ「お前作る人、俺食べる人」を国際的にやっていると同じです。そして消費社会の恩恵をこうむっている一人はまぎれもない自分です。これを解決するなんてとても荷が重い。語れば外部向のかっこいいことばしか出てこないから、やめておきます。でも一人の生活者としての心がまえはあるんです。ごく小さなことで語るも恥ずかしいのですが。「作る」から「食べる」までを自分の中でいつでも連鎖させておく、「俺作る人で食べる人」の視点を持つということです。このための作戦はいくらでも工夫できますが、今やっている一つは農業そのものです。学校の荒地を耕して暇を見つけては土と向き合っています。さらに去年からは家庭科の井崎先生にも畑を持ってもらい、調理実習で出たよごみ（宮城県の方言で残飯のこと）をどんどんコンポスターに入れ、それを肥料にして野菜を作る手伝いをしています。調理の学習が食べることだけに偏るのはよろしくない、「作る」から「食べる」までの過程を視野に入れてこそ生きたものになる――なあんて素人なりに考えています。さて今年の井崎農園は、よごみがまたとない肥料となって、トマトもナスも豊作でした。ヘチマまで元気いっぱい太って収穫される日を待っています。

広がるネットワーク

「痛さよりも感動が先だから、なんでもできると思ってしまうのね」

—長友久美子さんを訪ねて—

●平井雷太

この夏、中国内蒙古自治区に行きました。三六〇度どこを見回しても地平線という世界最大のシリンゴロ大草原を毎日馬で走りながら、なぜこんなところにいるのだろうかと、我ながら不思議に思ったのです。

整体をやっている友人から、(財)ハーモニィーセンター(理事長：大野重男)が学校をつくるから手伝ってくれないかとの要請を受け、それならと知り合いに声をかけ、同センターが経営する福島県相馬の牧場にツアーを組んで出かけたのが五月の連休。タウン誌の編集長森まゆみさんも、仙台でアートアンドハート空間BI(画塾)を主宰している関口怜子さん、福島の山奥で玄米正食のネットワークをやっている橋本知亜季さん、小学校教師の鳥山敏子さんらいろいろな活動をしているメンバーが集まりました。その折、大野さんから「内蒙古は素晴らしいですよ」とお誘いを受け、特に馬に興味はなかったのですが、ついうっかりその時の雰囲気で「行きましょう」と返事をしたことが、内蒙古に行くきっかけになったのでした。

天安門の事件もあり、てっきり中止になるだろうと思っていた矢先、決行の案内が来て、予定通り内蒙古に行くことになったのです。そこで出会ったのが長友久美子さんでした。昨年に続いて、二度目の参加の長友さんは、乗馬学校(草原に行く前に、ホフホト市の国立乗馬学校に四日間入学する)でも、内蒙古の生徒たちからお母さんのように慕われていました。どこをどう見ても運動神経は特別よさそうに思えませんし、どこにでもいる世話好きタイプのおばさん。なぜこのおばさんがこんなに馬を瓢々と乗りこなし、内蒙古にしっかり馴染んでいるのか、不思議に思ってのインタビューとなりました。

*

平井：どうして、内蒙古騎馬旅行に参加したのですか？

長友：馬なんか乗ったことがなかったから、去年は行きたくなくてね。子どものことがあって、無理矢理行ったという感じです。初めは誘われてですね。

平井：どういうことですか？

長友：実は一人娘の良子が五年前に亡くなったんです。小学三年生で九歳でした。葛飾のポニースクールで一緒に馬に乗っていた友だちから、内蒙古で馬に乗っている写真を見せてもらったり、話を聞いたりしているうちに、自分も行きたいって思うようになったわけです。ポニーの人から、上手に乗れるようになったら連れていってあげると言われて、すごく内蒙古にあこがれていたの。

去年は私が行ったけど、その前の年にあんなに良子ちゃんが行きたがっていたんだからと、お友だちが写真で連れて行ってくれていました。

どこへ行くのにも、子どもたちが写真を持って歩いていたから、向こうの雑誌に中国語とモンゴル語で載ったんです。「自分たちの国にあこがれていたのに、亡くなってしまった子どもがいて、障害があるにもかかわらず馬に乗り、内蒙古へ来たいと思っていた。そしてその子の写真を友だちが持ってきている」そんな内容でした。

この記事を読んだ方から、良子ちゃんのお母さんもお父さんも内蒙古に来てくださいという手紙をいただきました。

だけど、馬に乗れないのに行くなんて、想像がつかないでしょ。子どもたちがすごく上手に乗っているのを知っているから、全然乗れない人が行って、どうなるのかなという不安の方が多くて、行く寸前までごねていました。

絶対行かない、お金ももどらなくていいから行かないって言ってたの。そういう人たちに会えるのはうれしいことだったんだけど、馬に乗れないということはすごく不安でしょ。みんなが移動した時、自分だけ置いてきぼりになったらどうしようと考えたりしてね。

だけど、娘が志なかばで亡くなってしまったから、それで去年私が行くことになったんです。

平井：良子ちゃんはいつ馬を始めたの？

長友：その頃の葛飾ポニースクールは三年生になってからじゃないと受け入れてもらえなかったの。

平井：三年生で障害持っていて馬に乗れちゃったの？　運動機能障害だったんですか？

長友：そう、手と足とだったから、歩くのが遅かった。字を書くのもきちんとは書けない。でも、行きはじめて、二か月か三か月で馬に乗れるようになって、亡くなったのが十二月十日ですから、八か月は通っていましたね。その間にあんまり夢中になっちゃうから、早く学校から帰りたくて、先生

にストップかけられたこともありました。学校でそわそわするでしょ。三時までに行かないといけないから、先生に用事があるから帰してくれというわけです。面白い子だったんです。学校終わると毎日行ってました。

平井：心配じゃなかったですか？

長友：全然心配じゃなかった。私は子どもが障害があるからやらせないという姿勢でこなかったから、なんでもやらせたかった。亡くなる一か月前に自分が上手に乗れるからと友だちのお父さんにビデオをとってくれるよう頼んでいたの。私は何も知らなくて、ポニーに行ってみて、初めてわかったんです。亡くなる用意をしていたみたいでしたね。

平井：長友さんは去年、内蒙古に行って最初から馬に乗れたのですか？

長友：初めはもうキャーキャーですよ。すぐ「あぶみがはずれちゃうー」なんて、騒いでね。でも、お尻も体も痛くならなかった。

平井：すごいよね。今年だって山の手のおばさんたち、みんな乗馬未経験だったのに、最初からうまく乗っていたじゃない、どうしてなんでしょうね。

長友：女の人たち、みんなわりとうまく乗っていましたね。どうしてかというと、運動神経が特にすぐれているわけでない人が、ちょっとでも乗れると「やったぁ」と思うでしょ。そこが平井さんとは違うのよ。平井さんはできて当たり前と思っているでしょ。女の人はできて夢のようだと思う。その違いかしらね。私も去年帰ってきて、大したもんだ、これならなんでもできると思ったしね。だから痛さよりも感動の方が先なのよ。

平井：内蒙古に行ってみてどうでしたか？

長友：歓迎していただいたし、馬にも乗ることもできたし、自分の子どもは死んでしまったけれど、いろんな人の心の中で生きているということがわかって、それが一番の収穫でした。

＊

良子ちゃんが亡くなってからの五年間、毎晩のようにお酒をあびるように飲み、睡眠薬を常用していた長友さんが、内蒙古から帰って以来、飲んでも泣いてぐちることがなくなったそうです。

帰国後、今度は長友さんの提案で、中国語講座を始めることになりました。講師は天安門事件に関して動いていた中国の留学生。内蒙古のツアーに参加した他のグループの人たちや私が主宰するすぺーすネットワークのメンバーとの出会いもそこで始まって、どんなことがこれから起こっていくのか、広がるネットワークの面白さを実感したのでした。

あっちゃ こっちゃ フフフ

田中正彦

(8)男の子の育て方（後）

二つの自殺を単に弱い心による無責任な甘えと断じるのは簡単なのね。実際恋人を残して勝手に死んだ馬鹿の場合、非難が溢れた。そんな奴の恋人をやるのなんかたまらない。相手のオナニスムに巻き込まれたようなもの。両者の友人の私など、彼女が心配で、早く別のええ男(女でもいいけど)できないかなと、殆ど保護者の気分。友人からおじさんになってしまった。今度男ができたみたいやから又友人をやれるかな。やれるよね。フフ。

ただ私は簡単に断じるのはしたくないのね。例えば後者なんか発見当日の追悼式を私んチでやったから、寿司代や酒代の殆どを私が負担した。みんな泣いたり怒ったり、仕方なくはしゃいだりと盛り上がっている時に『きっちり割り勘やでぇ』など言えないもんね。私はこの件に関して元手を掛けている。だから簡単に断じるのはもったいないのやね。大阪人をなめたらアカンでエ。

自殺という結果は特殊だけど、彼らが落ち込んだ溝は特殊やないと思う。二人に共通していたのは、社会が認知する男の位置に立とうとし、それと自分の夢とのギャップを埋めることができなかった点。「家を継ぐ」とか「妻子を養う」とか今時古風な男と笑うかもしれないけれど、それは笑える位にしかその問題があなたにとって重くないからだけで、突き詰めて行けば同じ質の古風さは案外多くの人が認知していると思う。もし一人息子が恋人の籍に入るのを選んだら、どう？　もし息子がその妻よりずっと収入が少なかったら、どう？　ま、そういう場合もあるさと全然気にしないなら握手。ホント？　多分二人は「ま、そういう場合もあるさ」をとてもいけないことだと思う男だったのやと思う。自分は男にならなければいけないと社会や親から色々な方法でしつけられて育ったし、それを正しいことだと本人も考えていたのやと思う。けど、抱いてしまった夢はそれと矛盾する。もしかしたら必然的に矛盾する夢に飛び付いたのかもしれんね。で、左右どっちも選べなかった。グスグス悩んで、バイバイした。その結果をまたぞろ、優柔不断で逃避的な男らしくない行為と断じることができる？　私は、男に男らしく(女に女らしくも同じ)生きることを暗にでも求める社会においては二人の自殺の原因は二人だけに押し付けられないと思うの。間違っているやろうか？

「教科書問題」

筐（こばこ）

■村田直文

来年度は中学校用教科書改訂の年で、ことしもその検定が話題になった。マスコミは特にODA関連の新教材に注目し、これを提出した私に対して、NHK・テレ朝・読売などの取材があった。

私の当初原稿は、先進国の「経済援助」の問題点を指摘し、現地の固有の文化を尊重する等身大の交流として、日本の「上総掘り」をめぐる青年たちの《友情と連帯の輪》をとりあげていた。これに対し検定意見は、そのようなNGO活動の限界や問題点をあげ、ODAの積極的評価を要求。この要求に応じた形で原稿が書き改められたことを、マスコミ各社は批判的に報道した。

数度の書き直し要求ののち、結局私が妥協したのは、最終的に、上総掘りと次の記述とが認められたからだ。《（水に困っている村々では）先進国の経済援助で、深井戸用のポンプを取り入れたり、ダムや水道の施設をつくったりもした。しかし、根本的な解決は援助だけではえられない。これらの機械や施設を維持するには……さらに新たな援助に頼らざるをえないという事情が生れるからである。つまり、ひとつの援助が次の援助の必要を生みだし、村々の自立を遅らせる》——これが、搾取と破壊の始まりで、ODAの数々の問題点の中でも、文句のつけようのない基本的事実。

私はODAの評価すべき事例を見出すことはできなかったが、政府部内にも《おかねや物の援助だけではなくて……人や心のつながりに力をいれるように改善の方針をうちだしている》事実があることは認めることができた。NGOをめぐる諸問題はとりあげなかったが、《ささやかながら友情の輪を広げている》という表現で、検定当局の意を汲む形をとった。これが妥協の結末である。

近年財政支出の中では、防衛関係とODA関連費目の伸び率が特に高い。右の新教材は、ほとんど聖域とされてきたその分野にふみこむものだ。しかし、本年度各省分計一兆円以上というODA予算のうちNGO関係は約一億円、それにもいろいろ問題があって、《改善の方針》は当面生かされようとしていない事実については、どのマスコミも報じなかった。「上総掘り」という新教材の意味についても、論じようとはしなかった。

悪の検定に妥協を余儀なくされるものは悪であるとするだけの論調には問題がある。教科書もまた、教科書自体を見て評価すべきものである。

「これとこれを引っ張って、そう、それでいいのよ。できるわね」と、こんな調子でお弁当包みや紐結び、着替えやボタンがけを教えていきます。もちろん、時間はかかりますが、丁寧に見守り、時々教えれば、子ども達は身の周りのことは自分でできるようになるものです。この成長過程を見ていられるのは保育者の特権で、子どもが変るさまを目前にしてその可能性に感激してしまいます。

今も、A君がリュックの紐結びに挑戦。「こっちの紐をこうまわしてから引っ張って」「あっ、そうか。ここができないんだよね」という具合いで一生懸命結ぼうとします。ところが、次週、A君の母親が保育者となった途端、A君は「できない。やって！」と母親に向かって言い出します。ほかの子にはゆっくりと成り行きを見守っていた保育者も、自分の子となると無意識のうちに「はい」と言ってやってあげてしまうのです。母親が交替で保育者となる形態の共同保育で、最大の難関は、このおばちゃんとお母さんの境目をどう乗り越えるかにあります。他のおばちゃんと区別して、母親の時に甘えをみせる子どもと、その子どもに保育者としての節度をはずし、家庭内の保護者となる母親、自分の子どもにはそんなことはできないと思い込んでいたり、子どもの能力を正確に評価できなくなるのでしょうか。弱くなる母親に、子どもはさらに甘えを強めることになります。こんな時は、子どもにとって身辺自立が何故必要なのか話し合います。母親が、その必要性を納得し、家庭内でも身辺自立を促すようなやり方を通すようになるとしめたもので、そうなると子どもの力もぐんと発揮されます。

でも、そんなにうまくばかりはいきません。小さい女の子に何かといえば頭上からゴツンとげんこをおろす男の子を「家ではあんなことしないの。あの子だけにやるのよ」と言い訳をするだけで、注意すらしない母親は、年上の男の子から自分の子がいじめられるのを見て、泣いて可哀想だと訴えるのです。そんな姿をみると、もうおばちゃんの立場はどこにもないように思うのです。子どもを理性的にみようとする保育者の眼と、すべて受け入れたいと思う母親の感情とかせめぎあうなかで、母親達の成長があり、今日もまた葛藤が繰り返されています。

（カット・加藤友子）

幼児クラブを始めてみたら

③ おばちゃんとお母さんのあいだ

●佐多和子

高遠高校での共学

その7

KNOW HOW 共学 家庭科

湯沢静江

高遠高校では、家族の歴史、家庭経済、食生活を、共学の二単位分として組み、残りの分野の二単位は、女子だけの二年生にあてた。

一九七三年から長野県ではじまった共学の家庭一般は、前例もとぼしく、指導する側の教材研究とお互いの意見交換をする場として、共学校交流会議を、教育文化会議に認めてもらい、当初は各学期に一回開催をして、関係学校の担当者による交流を深めた。若干の不安があっても、一校だけ、自分一人だけではないという、気持ちの支えにもなる会議だった。

このようにして何度か交流をしあううちに、「やってみたら、どうということはないじゃないの」というのが、授業者の一致した意見であった。他教科の先生方からは、ともすると、家庭科を共学でなんて……と白眼視する中にいる人でも、この「やってみたらどうということはない」という体験は重要な自信につながった。

かなりの既成概念にとりこまれた大人たちが、頭の中で考えていることと、つき立ての餅のように柔らかく弾力性のある生徒たちの受け取り方は、全くといってよいほど違っていた。

このようにして仮説を立て、実践し、それらをもとに反省したり手を加えたりする教育の営みは、どのような教科教育にも通ずるものだという確信に結びつけることができた。学期に一回の交流会は、年を追うごとに少なくなり、年に一回でも十分やれるように、家庭科の先生方は育っていった。

二単位の指導内容も、それぞれの学校の担当者が工夫をし、さまざまであったが、食生活分野はどこの学校でもとり入れてあった。家族関係や、家族の歴史を入れてあるところも多かった。さらに男女交際や性教育を含めて、保育分野を設定した学校もあった。二単位でなく四単位も五単位もあれば、もっとやりたいことができるのに……という思いが、私たちの胸の中にあった。

共学の授業をはじめるまでは、男子に教えたい教材を、意識的にまさぐっていた。しかし、実際に授業をしてみると、男だから、女だからという性による教材の選択よりも、人間として、生活者として必要な教材は何かということが明確になってきた。

「鳳仙花」の歌

「鳳仙花」という歌をきいたことがあるだろうか。韓国の代表的歌曲の一つだ。哀愁にみちた、格調高いメロディの歌である。

「垣に咲く鳳仙花よ　汝が姿あわれなり　いと長き夏の日に　美しく花咲くころ　うるわしき乙女ら　汝を愛でてあそべり」

幼いころ、わが家の裏庭に鳳仙花が群れ咲いていた。十数センチほどのうす緑の茎に同色の葉がしげり、夏になるとその間から、淡い紅や白、紫の花がのぞく。華やかでは決してないが、なにか田舎娘といった風情の可憐な花だ。実が熟すと固い殻がパッとわれて、小さい種が四方にとぶ。それが面白くて、兄と二人、小さい手でプチプチと実をはじけさせて遊んだものだった。

花は、秋風と共に吹き散らされ、やがて枯れる。

「北風寒雪吹き荒れ　汝が姿消ゆるとき　平和なる夢を見る　汝が魂ここにあり　のどかなる春風に　蘇えれよといのらん」

この歌は、この第三聯（章）にこそ命があるのだという。一見何でもない鳳仙花を歌っているようで、実は、散らされても散らされても新しい力を蘇えらせ、独立運動をうけついでゆく朝鮮民族の姿を、その願いを、歌ったものなのだ。

この歌は、洪蘭波の曲に金享俊が詩をつけ、一九二〇年に発表された。洪蘭波は、朝鮮の近代音楽界の先駆者である。

朴燦鎬氏の労作「韓国歌謡史」（晶文社）によれば、彼は七歳のとき、家の前の梨花学堂から流れるオルガンの音に魅せられ、音楽を志したという。東京の音楽学校に進んだ直後朝鮮で三・一運動がおきる。国を失った人びとの独立を求める動きであった。彼はバイオリンを質にいれて独立宣言文を印刷・配布し、官憲に追われる身となって帰国した。洪蘭波にとって、美しい音楽を志すことと国を愛することは、一つのものであったのである。

その後も演奏家、作曲家として活躍した彼は、一九三八年、独立運動に協力したとして日本の警察に逮捕され、そのときの拷問がもとで、三年後、四十四歳の生涯をとじる。翌四二年、ソプラノ歌手金天愛の絶唱する「鳳仙花」に慟哭する、多くの朝鮮人の姿に恐れを抱いた総督府は、そのレコードを発売禁止にしたのだった。

岡百合子

食べもの文化史

副食 その3（豆とその加工品）

石川尚子

私が所属している食文化研究会では、今年の夏休み、郷土食を体験するツアーと称して、長野で宿泊研修を行った。善光寺の坊で精進料理をいただき、民宿では、おやき、そば、こんにゃくなどを実際につくらせていただいた。

指導して下さった地元の方に、昔の食事の様子をお聞きしたところ、「マメでもあればごちそうでした」とのお返事。精進料理のなかの豆加工品の豊かさといい、このことばの持つ意味といい、マメと日本人とのかかわりに改めて感ずる所があった。

「マメに働けるように」との縁起をかついで、おせち料理には黒豆がつきものだが、マメは、五穀のひとつとして、古くから栽培されてきた。しかし、煮えにくい、消化が悪いという食べにくさのため、穀類や獣鳥魚介類以上に料理や加工に、さまざまな工夫がなされている。

そのひとつは、きな粉などのように粉にする方法、また、みそ・しょうゆ・納豆などのように発酵させて成分を分解させ、さらにうまみをも生じさせたもの、また、もやしのように発芽させて野菜としての食べ方に転じさせたもの、さらに、豆腐・豆乳・ゆばなどのように不消化物をとりのぞいてほとんど100パーセントに近い消化率にまで高めたものなどである。

今から八百年も前に、庶民の生活を著した、『宇治拾遺物語』には〝すむつかり〟という炒った大豆に酢をかけた食べものの話がでてくる。これは昨今ブームになった〝酢大豆〟を思わせて興味が深いが、北関東地区の初午の〝すみつかれ〟にも相通ずるものがある。

大豆加工品のなかでも豆腐は、日本人の食生活を豊かにした点で画期的な食品であった。江戸時代の料理書のなかでも豆腐を取りあげた専門書、『豆腐百珍』（天明二年）は、翌年『豆腐百珍続編』、翌々年『豆腐百珍余録』を発行したほどのベストセラーとなっている。〝奴豆腐〟〝湯豆腐〟〝うずみ豆腐〟〝豆腐田楽〟など二百三十八種に及ぶ豆腐料理の名称と作り方などが述べられており、多彩な食べ方を楽しんでいたことがうかがわれる。

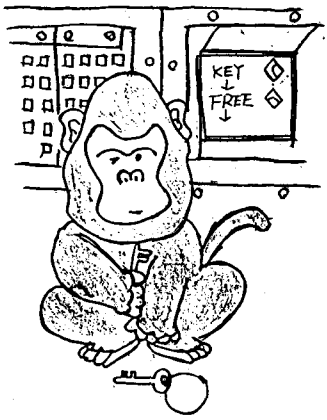
大豆の自給率がきわめて低い現在、一考を要すると思う。

よそおい

文と絵 内山裕子

色って不思議ですね。季節ごとに着たくなる色があります。特に夏から秋冬にむかう季節、深い色味の服が着たくなります。夏は太陽とお友達のキャピキャピ色や柄がよかったのに、コロッとかわるんです。これって脳にインプットされた昔の記憶なんでしょうか。

大昔、自然の原野に住んでいた頃の記憶とか、あるいはもっと昔、木や花と話しができた頃の思い出とか……。だってこんなに人工的なものに囲まれて、ストレスいっぱいの毎日を送っているのに、自然が季節のかわりめに色をかえていく時に、私も色をかえたいと思うのですから。私の中に残っている「自然」な部分のような気がして、少しホッとします。「洋服の色の組みあわせがわからなくて」とか「買ったのはいいけど、何色とあわせていいか」って、よくお店で相談をうけますが、今落ちてきたばかりの一枚の木の葉の中、小宇宙のような色彩のグラデーションや、山の木々の迷宮のような色の変化は、どんな色彩学の本を読むより、参考になります。今日はすすきの穂色のセーターに、われもこう色のパンツを組みあわせるとか、冬に元気いっぱいのどんぐりの葉色のジャケットに、どんぐりの実色のスカーフをあわせてみるとか、洋服の色あわせが楽しくなりますし、着ていて気持ちのなごむ「自分の色」の発見もあります。今年は茶色が流行色で、秋冬になって優しいモカ茶が人気をよんでいますが、茶を始めとする自然色の流行の理由は「エコロジー」という分析もでています。ここ数年、注目された「アフリカの色」といわれた茶色は、深い記憶の底にゆさぶりをかけるような色でした。街のもつ記憶が泡のように立ちこめたのか、大都市の真中に、砂漠色の砂をひきつめた喫茶店や、サンドベージュ色のパオで空間を仕切った料理店がこつぜんと現われ、また消えていきました。アフリカのチンパンジーの研究報告で、日が暮れそうになって、はやく木の上の巣にもどらなくては危険なのに、毎日、夕日をながめていたサルがいたそうです。コンピューターで図形文字を使えるアキラは、シティ派のエリートチンパンジーですが、どちらかというと私は、アフリカの丘の上のチンパンジー君の横にすわって、（もちろん、すわってもいいよって頷いてくれたらですが）、沈みゆく夕日の茜色や琥珀色、みてみたいな。



コンピューターと暮らし

十一月に朝日新聞から「知恵蔵」という現代用語の事典が出版される。少々宣伝めくが、その中の食生活の項目を担当してくれという依頼を受け、うっかり承諾してしまったばかりに今春三ヵ月ほど重責で呻吟してしまった。無事締切には間に合わせたもののこの仕事に関する限り、もし私がOASYS30SFという愛するワープロ(またPR?)を使っていなかったらとっくに投げ出す羽目になったかと思う。友人に一部協力は願ったものの資料を揃えたり、下書きを書いてくれる助手がいるわけでもない。清書だって勿論自分の責任となるがワープロの仕事ぶりは素晴らしかった。

編集者と相談の上項目を決め、ひとつひとつの項目に関する情報を内外の資料から拾い集める。中でも特にワープロが威力を発揮したのが、実は昨年暮れに成功した通信による新聞の記事の検索だった。私が入会している通信サービスの「メニュー」には大手新聞社の記事を四〜五年遡って呼び出せるサービスがある。たとえば最近話題の「機能性食品」をキーワードとして記事を検索し、見出しで見当をつけて本文を画面にそっくり表示すれば、ニュース関連の正確な情報を確認することができるし、新聞に取り上げられた頻度から世間の関心の程度をはかることもできる。勿論このサービスは有料だから一件につき八十円程度の費用はかかるが、図書館を歩かずに調べられ、しかもフロッピーに保存できる便利さはこたえられなかった。

資料収拾が終わり、いよいよ原稿を書く段でも勿論ワープロのお世話になった。本文は縦書きだが外来語の原稿はすべて横書き、賢いワープロにはギリシャ語もロシア語も思いのままで、しかも印刷時の指定記号を入れることで文字通り「横文字」に打ち出せる。

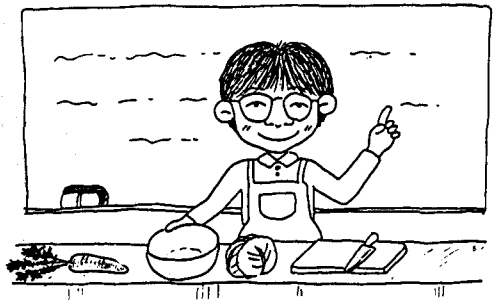
沢山の項目を限られたスペースで効率よく表現するためには、枡目の計算が重要になるが、挿入・削除・移動・複写・修正が自在な能力に頼らず、手書きで推敲を重ねていたら私自身もお手上げになっただけでなく、編集者の側もさぞや整理に苦労しただろう。

文具専門店で新聞社指定の原稿用紙と縦横の字数が同じ枡目が印刷された、まるで誂えたようなカードを見つけたので、まずカードに印刷して検討用にファイル。最後に指定の原稿用紙に合わせて字の割りつけ寸法を変更し、中身はともかく見た目は実に整然と原稿が完成した。事典だから当然年々改訂があるわけだが小さなフロッピー一枚に未使用の項目も含めた全原稿が納めてあるから来年の作業は容易になるはずである。誰に何と言われようとワープロはもう手放せない。

その8　　**碧海酉癸**(あおみ　ゆき)

石けんコンサート通信〈8〉

「イメージふくらませて僕の家庭科」



よしだあきひろ
（イラスト　十倉ゆかり）
連絡先：〒665 兵庫県宝塚市亀井町5-8

家庭科の教員免許をとろうと思って、短大の家政科の通信教育をこの四月からやっています。栄養学があったり、被服工作に育児学、家庭電気などなど。僕にとっては、苦手な分野がたくさんあるのですが、テキストを読んでリポートも書かないといけないし、スクーリングに出かけて洋服をつくったり、実習をしたり。この夏は女の人たちの間にまじって講義を受けてきたのでした。

僕は家政学にとっても興味があって、毎日暮らしていて、こんなふうに思うとか、これからの暮らしに、こんなイメージを持っているとか、そういう視点を大切にしながら、これからの時代をしっかりと見つめることのできる学問ではないかと、そんなふうに思っています。

それで期待してスクーリングに出かけたのですが、最初の講義は住居学。心ときめかせて教室で待っていると、担当の先生が入ってきて「家を買うときに便利なように、図面の書き方でも覚えましょう」とくるのです。それで講義のうちのほとんどは、住宅の見取り図を書く練習となったのでした。僕はとってもがっかりしてしまいました。図面の書き方は知っていて損はないし、こんな家に住みたいと間取りを考えるのは楽しいことだけれど、なんか違うと思うのです。だっていまどき一生働いても、なかなか家なんか買えないでしょう。たとえ持ち家があっても、通勤に二時間も三時間もかかったり、ローンの返済に苦しめられたり。地価高騰は終わりを知らないし、住宅事情は悪くなる一方です。そういう問題のひとつひとつに目をむけて、解決策を見つけだすのが住居学の目的ではないかな、と僕は考えているし、そういうことをさておいて、ただただ図面をひきながら、空想の世界にひたっているばかりでは、なんだかむなしい気がするな。

もし僕が家庭科の先生だったら、子どもたちに「イメージをふくらませよう」とメッセージしたいと思うのです。自分の暮らしをしっかりと見つめ、そんな中から生まれてきた問題にイメージをふくらませる。これからどんな時代になるのか。どんな時代にしたいのか。自分の考えをはっきりと言えるような、そんなキッカケとなる授業をしてみたいな。

波　コミュニケーション

―幼女連続誘拐殺人事件を考える―

半田たつ子

来る日も来る日も、マスコミは「幼女連続誘拐殺人事件」を、しゃべりまくり、書きたてた。あまたの才智きらめく評論家・学者たちが分析し、解説したけれど、私にはしっくりしなかった。蝶の収集家が次々と若い娘を監禁する映画「コレクター」を思い浮かべ、コミュニケーションの苦手な青年の、暗い「男の性」を考えていた。

九月三十日の夜、東京・家の光会館で「許すな性暴力社会―女たちがみる『幼女連続誘拐殺人事件』の背景」と題するシンポジウムが開かれた。検察は、M容疑者を誘拐、殺人、死体損壊・遺棄罪で起訴したが、幼い女の子たちが性暴力を受けたことは、どの罪名に吸収されたのか。また、M容疑者の個人生活や、幼い女の子に向けた特別な性的関心をあばくマスコミには、これを性暴力事件とする視点が完全に欠落しているのではないか――シンポジウムを主催した「女の人権と性」実行委員会の視点である。

コーディネーターは、評論家ヤンソン由実子氏。フリージャーナリストの宮淑子氏、弁護士の角田由紀子氏、参議院議員・堂本暁子氏、東京都議・三井マリ子氏、「わいふ」編集長田中喜美子氏がシンポジスト。

角田氏は「どんな犯罪もえん罪の可能性があるという立場」に立った上で、「日本には、強姦は女性の性的自由の侵害で、人間の尊厳への攻撃であるという認識がない」と指摘した。「性行為は人間の自由な意志によって行われるコミュニケーションという考えが欠落している。強姦が無罪になったある刑事裁判の判決文は『ある程度の有形力(つまり暴力)の行使を伴うのはふつうの性行為である』と述べ、性行為に伴う暴力は許されるという思想に貢献した。死ぬほど抵抗した場合のみ加害者が罰せられる。未成年者に向けた性暴力を『イタズラ』と表現するマスコミにも、同じ思想を見る」と明快だ。

堂本氏はTBS報道局員時代、子どもの問題を秀れたドキュメントに手がけた方。「私が取材した子どもたちには、体はどんどん発達するが、精神は幼いままで性的なものが肥大している例が多かった。秋田の精神病院で、14歳の男の子が独房のような所に三か月入れられていた。父は医者。彼は『父親と話すことができたら、違った人生を歩んだかもしれない』と語った。知的な教育は十分受けているが、情緒など全人的なものは育っていなかった。彼らにはアイデンティティー・実在感がない。だからオートバイをぶっとばし、アイドルのまねをすることで実在感を持つ。自分の存在は虚のまま、氾濫するポルノにのめり込む。女性をモノとしか見なくなる」と。

「性暴力を生み出す男女の乖離は、家庭の中、夫婦の間にも明らかに出ている」と田中氏。『「わいふ』で行ったアンケートでも、日常の会話が極めて少なく、性の充実感も乏しいカップルが半数近くあった。男は忙しいことを口実にして、家庭から逃げている。日本

の男は弱い。弱い者が権力を持つと、メチャメチャにいばり出す。M容疑者に、屈折した男の象徴を見る。日本では、収入が高く、学歴が高く、背が高いのが男の三高。そこからはじき出された男はワリを食うような社会で、人間と人間の関係をつくり上げることができなかったのがM容疑者ではないか」。

ヤンソン氏は「スウェーデンは、男は仕事・女は家庭が崩れた社会。そこに適合できない男はスウェーデンにも多い。不適合症の男は、アルコールに溺れ、暴力に訴え、自殺率が高まっている」。男と女の没コミュニケーションは、男女平等先進国にもあると。

会場からの発言を求める前に、司会は「今夜は女の視点を出したいから、発言は女性優先」と宣言し、女性からの活発な意見が相ついだ。「性犯罪の取材から、男性記者を外して」と訴えた人。「知人の男性記者が、性犯罪の取材が最も志気高揚すると言った」そうな。二百余人の女性が、熱心に語り合う場に参加していた少数の男性は、何を感じていたのだろう。その声を聞いてみたかった。

この犯行は「幼い年齢の女性に向けられた、まぎれもない性暴力事件であり、日本の社会の文化土壌が、性暴力を許容しているところに起きたもの」という、「女の人権と性」実行委員会の主張に同意する。シンポジストたちは、それに加えて「人と人との間の、男と女の間のコミュニケーションが、極めて貧しくひからびている」と指摘した。全くその通り。だからこそ、充実した時を共有した男性に、発言の機会を与えてほしかった。「男の性」を男の口から聞き、私が漠然と感じていたMの暗い性―それが思いこみか否かをただしたかった。このことだけが残念だった。

茨城県からたった一人で参加した人が、「六か月と五歳、二人の女の子の親として、まったく他人事と思えなかった。幼稚園からの通信は、一人で外遊びさせるな、必ず親が手を引いて……というものばかり。これでは子どもも息がつまると、父母会の話題にしたが、皆、話に乗りたがらない。若い親や主婦向きの雑誌に、事件をどうとらえるかの記事が、全然ないのも問題だ。ここに集ったような人々は、ぜひ女性誌にも意見や要望を出してほしい」と述べた。

電話で、子どもたちの悩みごと相談を受けているという若い人は「男の子も女の子も、恋愛イコール、セックスと思っているのですよ。女の子はポルノを、皆さんのようにいやだと思っていません。どうか、自分の周りの女の子たちに〝豊かな性〟を語って下さい。そのことによってのみ、オルタナティブな文化が生まれるのです！」と叫んだ。

容疑者Mが、ロリコンで「おたく」で、わいせつで、異常性格で、残虐で不気味と、個人的問題とみる発言は、シンポジウムで全く出なかった。日本の社会・文化土壌が、性暴力を許容しているところに起きた事件ととらえ、政府・法曹界・報道機関、ひとりひとりの市民に向けての提言をまとめた。

宮氏は、「性的被害にあった女性は、屈辱感からそれを誰にも話さない。警察に行ったとしても『あなたが挑発したのではないか』などと言われる。女子大生が比叡山で殺された事件でも『なぜ山の一人歩きをしたのか』と殺された側に落度があったように評されるのだから」と。三井氏は、教師間、議員間で、教師と生徒の間でも、男が優位に立ち、女を引きずりおろし辱める構造があると強調した。

男と女、人と人が、優越感や劣等感から解き放たれ、あるがままを認め、尊重し合える関係―そこに辿り着くまでの遙かな道のりを思う。どんなに遠くても、この道を往く。それ以外に道はないのだから。

Weに なんでも書おう なんでも聞こう

◆Weの八・九月合併号及び十月号を拝読。いずれも「地球」がテーマで、環境問題を取り上げた点、時流に沿ったものと思います。だが私は環境問題を扱った他のレポートを読んだときと同じように、もっと違う面から見ることはできないかな、と感じます。

環境悪化の最大の元凶が石油である点は全く正しいと思います。ここ一年ばかりの間に急速に浮上してきた地球の温暖化、酸性雨問題の主な原因は、石油に代表される化石燃料にあります。この視点からすれば原子力はクリーンであり、原子力かそれとも化石燃料か、あるいは化石燃料の中で石油か、石炭か、天然ガスか、という経済性と化学性の選択の問題がでてきますし、一方経済優先の考えに反発するところから来る（言葉は適切ではありませんが）、情緒的視点からの議論も多くみられます。Weにおける視点は失礼ながら後者であるように思います。

例えば十月号での木炭に与えている好意的な評価です。木炭は日本では、年間3.5万トン（'86年）の生産がありますが、これをエネルギー源とみることは現代では児戯に類する発想といわざるを得ません。もしこれを石油に代わるエネルギーとして考えるならば、木炭を生産するのに必要な薪の消費も含めて、またたく間に森林は破壊されてしまうでしょう。また前者の経済的・化学的視点からの議論も概ね短期的な見通しであることが多いように思います。

私がこういう視点もあるのではないかというのは次のようなことです。環境破壊とほぼ同じスピードで、人類はその生活の基盤である資源を食いつぶしつつあるということ。このことを見据えて、人類百年の将来を考えるべきではないかということです。

日本の一次エネルギーの構成は、石油56、石炭19、天然ガス10、原子力9、水力5、その他1（%、'86年）です。おおざっぱに言ってしまえば、世界の先進国は大同小異です。この内石油が最も効率が良いエネルギー源です。効率が良いとは、例えば部屋の温度を。1C上げるのに、灰などの後始末も含めて、石油が一番安いということです。

また石油はエネルギーとしての用途の他に、プラスチックのような石油化学製品の原料としても使われており、素材としての有益さは鉄鉱石と比肩しうるものであるということができます。

この石油は、'87年の推定では、あと四四年（'87年から計算して）で無くなります。実際には少しずつ新しい油田が発見されてきますから、もう少し延びるでしょうが、それほど多くを今後に期待することはできません。

原子力の燃料であるウランも天然ガスも石油とほぼ同じころに無くなります。石炭は石油の三十から四十倍の埋蔵量がありますが、その効率は石油に比べ数段劣り、また炭酸ガス排出量が石油の一・三倍もあります。

石油に代わるエネルギーは、日本ではNEDO（新エネルギー開発機構）という半官半民の組織をはじめ、民間企業の多くが研究していますが、石油に匹敵するものの開発の可能性は極めて乏しい現状です。実際に太陽電池は、1.5ボルト乾電池代替品を作り出した程度で、その非採算性から、企業の多くは撤退

すら考えています。

他に風力、地熱、アルコール等、どれも心細い限りです。

もし有効な代替エネルギーを探すことができないとき、私たちの生活はどうなるでしょうか。当面石炭が主力となりますが、これは現在の石油の役割をとうていカバーすることはできません。

まず食糧が無くなります。石油系農薬と農耕機械が無くなりますから、多分日本では、江戸時代並みの二千数百万そこそこの人口を支えるのがやっとのことになりかねません。

産業に全力を注ぐ結果、医療や福祉は衰退し、人口は急速に減るでしょう。現在世界の多くの人々は飢餓状態にありますが、さらに深刻化するでしょう。そうした時代があと五十年以降にやってくる可能性は極めて高いといえます。

ジェット旅客機が国内線で一回フライトするとき、ドラム缶百本以上の石油を消費します。高速道路を車で走っている人は、はるかアラビアから運んできた石油を一時間に10リットル使います。この文章はプラスチック製のシャープペンシルで書いています。石油の上につかの間浮いている文明の中で、私たちは暮らしています。1900年代の初めから始まったこの石油文明は人類の文明の頂点にあり、少なくとも現時点で、さらにこれを発展させることを可能にする石油代替エネルギー開発についての展望は無い。ということは、現在の文明を維持できる展望がないということです。

資源の枯渇への恐怖は西暦2000年ごろから人類の上に重くのしかかってくるでしょう。それは'74年と'80年の二度の石油ショックの比ではありません。その時現在の視点で議論している環境問題は霞んでしまっていることでしょう。冬はヒーターがきいて、夏はクーラーで涼しい部屋がいつまでもあるような幻想の中に私たちはいて、そしてそういう部屋の中で環境について議論をしているのです。ひ弱な議論というべきです。

どうすればよいかという結論を私は持っていません。私たちの今の生活をレベルダウンし、省エネに努めたとしても、よくて二十年ばかりを食いのばすことになるだけでしょう。人類の将来を冷徹に見据える視点をもって、その上での議論が望まれます。

（東京・佐藤哲生）

◆「食べものから地球を見る」特集は、どれを読んでも、いまが大変だなあとあせるような気がします。そんな話の中で、室田さんが「希望は持つしかないですね」と言っているのが、強く心に残りました。小出さんも、恐ろしい現状を見つめ述べながら「一歩一歩『平等』に向かう努力を教えるような『教育』こそ、わたしはしたいと思います」と言い切っておられるのをえらいと思いました。

「小学校では」の光永さんの「(3)人間らしさとは……」の冒頭の光景から「〝恥ずかしい〟という人間らしい気もちがうすくなっているのかもしれないね」という美しい言葉でしめくくりになるところまで持っていかれたことえらい、すごいと思いました。なかなか、そんなはらはらする過程を持ちこたえて、子どもに、そうか、と思わせることができるところまで、誰にでもできることではないと思いました。あらかじめ用意してあった言葉ではないでしょうから。

十月号は、人のことをえらいえらいと思って読み終えました。表紙の長野さんも、足と手でおさな心を表わすなんて、すてきな人です。

（横浜・羽生槙子）

◆八・九月号の特集「地球市民として生きる」とてもよかったです。気に入って、何度も読んでいます。楠原さんの日本の子供たちがある面では「アパルトヘイト」されている、というのもフムフムなるほどと思ったし、「アフリカ＝飢餓＝かわいそう」というのではないということも、よくわかりました。授業で何かできないかなあと、ボンヤリ考えているところで『死を招く援助』や『アジアと女性解放』を読んでいます。

十月号のテーマもおもしろいなあと思います。「食べものから地球を見る」そんな授業をしたいと思っていましたから。

「波」に私の名前が出ていてびっくり。恥ずかしいですね。原発の授業は、なんだかスッキリしてなくて、今年はどんなふうにしようかと方針もなかなか決まりません。一年生の時、すでに現代社会で習ったと、今年の二年生もそう言っています。去年も原発の問題を取りあげてはみましたが、その頃から、水俣病のことを、私はまだよく知らないけれど、何か共通点があるような気がして、水俣病について、少し勉強してみたいと思っていました。だから熊本フォーラムには、ぜひ行こうと思っていました。東京の根津さんたちと、水俣に行ったのが印象的です。

今は、原発だけでなく、水俣病のことも取り上げて、この二つを結びつけて考えられないかなと思っているのです。食べものから、いろんな問題が見えてくるような授業にしたいなと、思いはふくらむのですが、どう展開すればよいのか、迷いながらすすめているところです。それなりの形になれば、また報告することにします。

「波」十月号で書かれていた石川県の「家庭科・自主編成講座」というのは、どんなものなのでしょう？　寺島さんや荒井さんに、またお目にかかりたいなあと思いました。

今ひとりの大人として考えなければならない重要な問題と、家庭科で教えたいことというのは、私は一致していると思うのですけれど。だから私はWeを読んで、へぇーと思ったこと、心動かされたことを、やっぱり教室で生徒に伝えたいと思ってしまうし、教材にしようと思ってしまいます。

だって教科書に書いてあるから大事、なのでなく、自分がこれは大事だと感じたことこそ教えたい（伝えたい）と思うのではないでしょうか。そんな授業を創っていくことの楽しさを一度知ったら（本当は楽しいばかりでなく、私みたいに失敗ばかりが続くとつらいこともあるのですけれど）やめられないのでは？　どんなふうに教材にするのかが、初めは分かりにくいのかもしれませんね。

もしかして教科書を教えるのが教師の仕事と思っている人がいたら、または「家庭科とはこういうもの」という固い枠組みを持っている人にとっては、Weと家庭科の授業とが結びつかないかもしれません。私はWeを読んで、心が揺さぶられた時、よし、これを授業に生かしたいと強く思うのですが。「心が揺さぶられた内容」というのが、また難しいですね。人によって関心を持っていることも違うだろうし。

それから「新しい家庭科を創るために」の授業実践が、Weの特集と結び付いているようなものであれば、一つの問題を授業ではどう展開できるのか、わかりやすいのではないでしょうか。毎回でなくてもいいから、そういう例もあれば「つながり」が、わかりやすくなるのではないかなと思います。

（大阪・浅井由利子）

編集室からあなたに

◆Weの画期的な試みに御協力を！

1990年代を迎える時，Weは九年目に入ります。90年代には，家庭科も男女が学ぶ新しい時代を迎えます。

編集部では，例年九月，十月に来年の方針について話し合いますが，今年も時間をかけて討議しました。

Weの特徴は，家庭科の教師とともに，意識の高い市民層が読者であることです。かつて学んだ（学ばなかった）家庭科のイメージから，家庭科アレルギーの人が多いのですが，Weの読者の方は，徐々にそのアレルギーからぬけ出てこられたようです。

Weが，これまで掲げてきたテーマは，伝統的な家庭科の領域を越え，新しい家庭科に是非盛り込みたいと願うものでした。

一方，「新しい家庭科を創るために」の欄では，次々と登場される現場の先生方が力一杯独自の実践を書いて下さいました。しかし，その先生の得意な領域を自由に書いていただきましたので，その号のテーマに必ずしも関係を持ちませんでした。

このことは，家庭科以外の読者には物足りない思いだったのではないでしょうか。また「新しい家庭科」に盛り込みたい内容がテーマに掲げられていたとしても，かんじんの家庭科でどう教材化するかの実例がなければ，新しい家庭科のイメージを結ぶことはできないでしょう。

一方，家庭科の先生は，新しい領域だけに，発表できるほどの自信がない，という方が多いでしょう。一人の方に十回分テーマに添って，実践を書いていただくのは無理な願いです。

こんなことを思って，今まで踏み出せなかったことを，90年代に入ろうとする今，もう思い切らなければと話し合いました。ちょうどその日，浅井由利子さんから，右ページにのせたお便りをいただきました。編集部は，エイヤッと決心しました。

We九年目のテーマは，次の通りです。

4月号　'90年代，学校を変えよう
5月号　生，そして死に迫る教育
6月号　「家庭生活」をどう語る
7月号　「環境・資源」を見つめる
8・9月号　消費者教育は，何を目指す？
夏増刊号　家庭科，諸外国では
10月号　高齢化社会がやってくる
11月号　地域を蘇らせる
12月号　マス・メディアの構造
冬増刊号　夏季フォーラムの全記録
1月号　性役割の固定化は揺らいだか
2・3月号　新しい家庭科を創る

そのテーマになるべく関係のある，またはテーマに近づく実践を「新しい家庭科を創るために」で紹介します。従って従来の方法を改め，テーマにかかわって書いていただける方を，その都度募り，未開拓の分野を教材化する力を育て合いたいと願います。新しい家庭科を創る営みに，家庭科以外の方の関心を呼び，応援していただくために，社会科・理科・技術科……等の他教科の先生や，消費者運動などの活動をしていらっしゃる方からの御提言もうかがいたいと思います。

原稿募集を，テーマにかかわりを持つ実践まで一層広げます。問題は，書き手を発掘できるかどうか……それが一番不安です。どうぞあなたがこの新しい試みの主役になって下さい。お心をそそるテーマがありましたら，どうかアタックして下さい。また，あなたのお仲間や，お知りあいで，いい実践をしていらっしゃる方を御紹介下さい。企画の都合上，勝手ですが，出来るだけ早く名乗りを挙げていただきたいのです。

以上の意欲的なプランを成功させるために，あなたのお力添えをお願いします。

◆九年目のWeの御予約を

今年度は，消費税のために，何かと御面倒をおかけしました。来年度は，消費税込みで，下記のようにいたします。どうぞお早めに継続のお手続きを！

例月号…567円　増刊号…721円
年間購読料―例月号のみ…5665円
例月号プラス増刊号一冊…6386円
例月号プラス増刊号二冊…7107円

わたくしからあなたに

「足は口よりも、ものを言ひ」。いえ、ふざけてるワケじゃありません。赤ン坊のハナシです。ホント、赤ちゃんの足って、つい、顔や手のしぐさの愛らしさにお株を奪われて、認めてもらえませんが、いろんなこと訴えたり、言ったり、主張したりしているんです。ナーンテ、名もない子守りおばさんが言っても、信じてもらえないかもしれませんね。

最近、新生児が歩くとか、自分の体重を支えるほど握力があるとか、胎内で指しゃぶりもする、おしっこをする前に顔をしかめる等々、いろんな能力が見出され、えらい小児科の先生によって発表されていますが、私は、あまり驚きませんでした。

ひとさまの赤ちゃんを三人、毎日、自宅で保育するようになって十七年。自分の子供をおっかなびっくりで育てていた三十年前には考えもつかなかったいろんなことが、このごろ、少し見えてきました。

足の動きが面白いと感じ始めたのは、多分十年くらい前のことです。おしめがぬれるから泣くのではなく、尿意、便意で泣くらしいとわかったのも、同じ頃です。

半田さんがまだ家庭科教育を編んでおられた頃、「さようならそしてこんにちわ」なんて冷や汗ものの拙文を、巻頭に載せていただいたことがありましたが、それに名前の出てくるはるかちゃんが、それらの私の発見のきっかけであったような気がするのです。

はるかちゃんは、よく足を動かし、おしっこの前に大きな声で泣きます。その頃、私は伜を追い出して、ひとり暮らしにも馴れ、気持にも余裕ができつつありましたから、毎日の保育と母親たちとの交流を楽しんでもいました。それまでの数年、おしめを替えるときにふと気がつくと、赤ん坊の足指が私の膝をまさぐっていることがあって「〇〇クンはエッチだねえ」などと、お返しに両ワキをコチョコチョとくすぐったりしました。

ところが、ある日、朝、母親から抱き取るとき、母親にバイバイさせたくて向こうむきに抱くと、両足が宙に浮き、どうも落ちつかない様子。私の胸に背中を当てて抱くと、両足が私の腹や脇をさぐりにくるのです。

うつぶせに寝ている足元を通ると、声もかけないのに、利き足を後ざまに上げて指を精一杯のばして、宙をさぐっているのには驚きました。腰がすわって、椅子で食事をする頃には、毎日の生活習慣を理解してあまり足さぐりはしなくなるのに、椅子の前に座っている私の膝をやはり足指がさわりにきます。そして面白いことに、電話や来客で私が中座しようと腰を浮かしたトタン、足の親指がギューッと私の膝を押さえるのです。

また、おしめを替えているとき、私の機嫌がよいときは、私の腕に脚をからめたり、膝を踵でトントン叩いたりしますが、事務的に無表情でやっているときは、大の字でじっとしています。爪先で歩行器を動かしていたのが、ある日気づくと踵をつけて立っていて、「オヤ、あなたも人間になったのね」などと声をかけますが、この頃から多動になり、目にみえて知恵がつくような気がします。オトナの顔をのぞき込んで反応を確かめたり、仲間を意識しはじめるのも、この時期であるようです。

有名な小児科医の発表をテレビで見ていて、私は、新生児が歩くように片足ずつ前に出すのは、自分の居場所を足の裏で確保したいからなのではないかと思ったんです。足の裏が地につく迄、赤ン坊は脚で身の置きどころを計っているのではないか、羊水の中でも自分のいる位置や体に快い体位を保ってきたのは、脚なのではないか、脚が一番先に発達していたのではないだろうかと考えています。

新生児の頃、湯をつかわせるのに、両耳を押さえて掌で後首を支えて湯につけます。お尻と脚がどこかに着いていればいいのですが、脚が不安定だと手足をバタつかせて驚いたように泣くことがあり、初めての親は「うちの子、お風呂を嫌いみたい」とよく言います。そんなとき、私は「アゴを肩に乗せて、べったり抱いて入ってみて」と言うのですが、「ウソみたい」におとなしく入るのだそうです。「赤ン坊はクラゲじゃないんだから」と笑い話にしますが、どうも宙ぶらりんは嫌うよう。同じ理由で、うつぶせのほうが安眠します。

赤ン坊にとって不快なことが急に発生すると、怒りを露わにして、一茶の句ではありませんが、両足を力いっぱいこすりあわせて絶叫することにお気づきでしょう。そんなときには、声をかけながら脚を掌でさすっていると、不思議に早く泣きやむとか、人見知りを始めたくらいの子に、初めて会うときには、顔や手をさわるより脚にさりげなくさわるほうが早く仲よくなれるとか、まだ他にも面白いことがたくさんありそうです。

今朝(十月七日)、新聞を開いて思わず膝を打ちました。サル学者の河合雅雄氏がお若い頃、「人間は考える足である」という言葉を作られたそうです。私は「育児とは、独断と偏見でするもの」と人にも言い、自分でもそう信じているのですが、赤ン坊の脚の話も、とんだひとりよがりかもしれません。

赤ちゃんの顔をみつめてあげる、声をかけてあげる、さわってあげる、至れりつくせりの食事をあげる、温度・湿度は、と胎教、育児の事が溢れていますが、サービス過剰の対応ばかりが満載で、赤ちゃんの側からの働きかけについては、顔と手までしか書かれていません。かんじんの足が、ふとんの下から、保育者との距離や位置をこっそり探っていることにも気づいてあげてください。胎教で天才を育てなくても、赤ちゃんはそれぞれに胎内から自立しているのかもしれませんよ、ナーンチャッテ。もし、こんな話を聞いたり読んだりなさったかたは、笑ってください。

(東京・右田久仁)

◆いつも充実した記事を読ませていただいておりますが、とくに十月号の特集が、視野を広げ、環境破壊の問題をとりあげられましたこと、大変関心深く、大事なことと思いました。今後のテーマに、国土を破壊するゴルフ場問題もぜひおとりあげいただきたく思います。六一年のリゾート法、そして現在国会上程中の森林の保健機能増進と銘打つ特別措置法によって、森林も地下水もダメになっていきます。いつかWeでも特集していただけたらと思います。

(東京・井田恵子)

◆十月号の「川が生きかえった」を読んで…、川の浄化は、本職の方でも最近よくやっていますし、八幡新聞を出している里中悦子さんと相談して、地元でこうした運動がつくれないものかと、考えているところです。

〃性の自由化〃についての本は、知人と作業をすすめています。Weでも性の扱いは、生命尊重論または、自発的非婚カップルの紹介という感じですが、そのギャップというか空隙を正面から取上げていくつもりです。

(八幡市・安東尚美)

Weの読者会だより

〈We大阪の会〉

◆九月十日(日)、森之宮の中央青年センターにて。参加者十六名。大阪市職労組婦人部長の志方順子さんに「フィリピンの旅から見えたもの」と題して話してもらいました。

大阪市職婦人部は、今年結成三十周年。記念事業の一環としてフィリピンに五名が代表派遣された。費用は組合員のカンパでまかなった。政治の貧しさは、フィリピンでも日本でも弱い人々にしわ寄せされる。日本からのODA(政府開発援助)のほとんどがそのまま日本に還流され、企業を太らせる仕組みになっている。また、フィリピンの反米軍基地闘争を封じるための言葉「基地がなくなればジャパンに襲われる」が説得力を持っている。

日本軍の戦時中の行為を、私たちは知っているだろうか？　そんな歴史を学んできただろうか？　志方さんの言うように「地球規模の考えと、地域的な行動力」を、今こそ一人ひとりが身につけていかねばならない。そのためには知らなかったでは済まされない現実を学び、そこでがんばっている人々に対して、「あんたもしんどいけど、私もしんどい」と言えるようなものを常に持ち続けていかねばならないと福本さん。それは、同じ運動に関わっていくことではなく、自分の国や地域で、自分ができることにこだわり続けることだと宮崎さん。

「女と戦争」に関わり、地域にその跡を調べることを続ける豊中市職の橋本さんは、「被差別を認められない子は、また差別に加担していく」と言う。戦争で学んだことを伝えていかねばとも。この橋本さんや志方さんの考えに、教師の多くが忘れてきた、きれいごとではすまさない情熱を感じてしまった。志方さんの今回の旅が、私たちのみならず、すべての女性の励みとなるはずだと飯田さん。フィリピンの話に、ずっしり重さを感じつつも決して沈んだ会にはならず、かえって話がはずんだ。「楽しいやっていかんと……」と笑う志方さんの言葉にみんなうなずきました。

次回は十一月二十六日(日)。同じ中央青年センターにて。テーマは未定。

(北川好美)

〈We東久留米の会〉

◆九月三十日、滝山団地集会所に、六名と赤ちゃん一名が集まり、中村さん手作りのロールケーキを食べながら、読者会を開きました。今回は真面目に、We十月号のテーマに話題を集中できて大満足。パート労働と家事で一日のエネルギーをほとんど使い切る私にとって月一度のWeの会は、唯一の勉強会なのです。

特集では、小出さんの「放射能汚染食品が問う生き方と教育」がとても分りやすく感銘したという瀬戸井さんの解説で、皆同感しました。原発が弱い立場の人たちを、色々な意味で踏みつけにしていること、電気を使用している私も、被害者ではなく強い立場になることはショックでした。家族のために安全な食品を買い求めるのも大変な労力で、弱者の立場にいると思っていたのに、汚染食品を拒否しても、それが貧しく食糧に事欠いている人々に回ることは、やはり許されません。

私の住んでいる小平市では、学校給食の一部民間委託問題が一応解決し、安心しているところですが、またまた大変な問題が起きたという心境です。特別参加の川住さんの赤

ちゃんが無事成長して、お菓子を食べながらWeの会が開ける世の中であってほしいと、つい思ってしまいました。

田中正彦さんの「入籍ごっこ」は溜息が出ました。両姓を使いこなしている瀬戸井さんは別として、結婚前からWeにふれて意識を持っていれば、と後悔するのですが、籍に入ると○○家の人間になろうと努力した自分をも反省します。長男だから、遠く離れた両親の面倒をもっと見るよう、きょうだいから言われて困っている人もいて、老人問題も深刻になってくるでしょう。このような雑多な悩みも気軽に言えるWeの会に感謝。

次回は十一月二十五日(土)午前十時より、滝山団地集会所にて

連絡先　0424-72-6826（瀬戸井）

（大岩比佐枝）

〈We城北の会〉

◆九月九日、久しぶりの会、四年ぶりに野中しのぶさんが、あかねちゃんとみどりちゃんを連れていらっしゃり、続いて栄養士をなさっている太田さん、定連の礒部さんも見えてWe夏季フォーラムの報告や、子どものこと、北区の栄養士全校配置運動のこと…等などいろんな話ができました。

太田さんのお話から。「現在、北区では、小中学校六十六校中三十八校しか栄養士が配置されておらず、それがさらに減らされそう。また政府は、給食の民営化の方向をうちだしています。自分の子どもが通う学校に、栄養士がいるのかどうかよく知らない場合も多いし、PTAなどにも働きかけて、教職員・父母が一体になって、運動を強めていきたい。北区では、給食食器のメラミン化に反対して、コレール食器導入を実現させた実績もあり、是非多くの人に関心を持ってもらうよう働きかけていきましょう。

また紅葉中学校では、給食の食器洗いを、合成洗剤からせっけんにきりかえました。栄養士と調理の人が協力して取り組めば、各学校で割合い簡単にできるのではないか」。

大宮市の中学校では、市長の選挙公約で給食が始められましたが、センター方式でおいしくなくて残飯が多いというお話もありました。家庭でも合成洗剤をやめたり、添加物の少ないもの、低農薬のものを食べるように心がけたり、もっと関心を持ち、気を付けていかなくては…と話が弾みました。

十一月の例会は十一月十八日（土）二時から五時、十条出張所にて。

高校生李鳳梅（リフォンメイ）さんを囲んで。

We城北の会では、昨年から「真の国際化とは？」の問題を考えてきて、中国から引きあげて来た子どもたちを受け入れている都立北高校の鈴木啓介さんのお話、また日本語学校の教師の青木栄子さんからは、アジアからの就学生のお話をうかがってきました。

今回は、中国黒龍江省から日本に来て、現在北高校に学んでいらっしゃる李鳳梅さんにいらしていただきます。

李さんは、腰までの長い髪のよく似合うステキな娘さん。子どもの時の中国でのこと、日本に来て感じたこと、中国から来た二世たちのかかえる問題…等、いろんなこと話していただきたいと思っています。十代のお客さんを迎えるのは初めてのこと、ワクワクしています。

（蔡　和美）

Weの会通信

連絡先　石川由紀
東京都世田谷区上野毛4-19-12
☎03-701-8578
FAX 03-704-2254
本欄編集担当　平井雷太
東京都文京区本駒込6-15-1
河西ビル5F　すべーすらくだ
☎03-941-4659
FAX 03-941-5427

★フォーラム'90に向けて始動

今年のフォーラムの余韻のさめやらぬ中、熊本での決定「来年は首都圏でフォーラムを」を受けて早速準備を開始しました。実行委員を募り、さる九月十六日第一回実行委員会を東京・飯田橋で行いました。編集部を含めて三十名弱の会員、読者が集まりました。首都圏だけでなく、静岡や関西からの実行委員の参加があり、盛況でした。

実行委員長には若いセンスを、ということでごじらりょうこさん、事務局はファックスがある(?)ということで鈴木になりました。

基本テーマを決めるのに時間をかけたいので、とりあえずいま各自が関心を持っているテーマ、取り組みたい問題を自由に出し合ってみました。八〇年代を総括するテーマを考えてみたい、分科会を重視していこう、女性と政治の問題、環境汚染の問題、家庭科の実践を新しい角度から見る、アジアの中の日本をとらえたい、どう異文化とつきあうか考えたい、自己の老後の問題も含めて高齢化社会での生き方を探ってみたい、いい男をならべて鑑賞したい、本誌に連載されている人と交流したい、などなどいろいろな考え、あるいは提案が出ました。次回以降の実行委員会で少しずつ絞り込んで行くことになります。

通信による参加も含めて、会員の方、読者の方には実行委員になって下さるよう、お願いいたします（上記まで連絡を）。

会場をどこにするかも問題になりました。都心部よりも郊外のほうがいいのでは、ということで、多摩、房総、伊豆などのいくつかの宿泊施設に問い合わせをし、以下のごじらさんの文章のようになりました。候補地の情報を寄せて下さった実行委員の方々、本当にありがとうございました。

（鈴木昭彦）

＊　＊

十月八日（日）三島の梶原公子さん夫妻に案内していただき宿泊施設の下見に行きました。『来年は東京で』の合言葉からちょっと離れた伊豆長岡の富士見ハイツ。ぐるりを森・水・史跡・名所に囲まれ、三島駅から三十分位で着くここは「たいへん良いところである」と、下見に参加した実行委員全員のOKがおり、ひとまず仮予約をしてきました。

鈴木さんの文章のとおり、'90 We夏季フォーラムにむけては、分科会テーマがすでに幾つも温められており、「血が騒ぐ」といった気持ち。かかわる誰もがそれぞれに燃えています。その火を全部、みんなの元気・パワーのガソリンで、'91フォーラムに引き継ぐまでキープしたいね。

宿のつくりは、隠れんぼから人溜りまで、格好な条件がタップリです。子ども活動にも好条件です。

情報や課題の受け止め方は人それぞれ。同じときに生きているって事実を共有し、自分と他者とのネットワークから大きなうねりへのパワーを生み出すフォーラムを、一参加者として、皆さんと創る〝私〟で取り組みます。

個人的な関心テーマは、夫婦別姓（戸籍制度）、政治参加、環境問題他。だれでもどんどんフォーラムづくりに参加して下さい！

（ごじらりょうこ）

ハンド・イン・ハンドの会

〈円（まどか）より子〉

十年前にニコニコ離婚講座を開講した頃に比べると、隣婚を罪悪視する傾向は少なくなりましたが、まだ離婚者は生きにくい状況を抱えています。

ひとつは、男性優位の経済社会では法律の不備もあり、ゼロからのスタートを切らざるを得ない母子が多いことです。慰謝料・財産分与等何も夫から渡してもらえずに別れた人が半数。子供の養育費を送らない父親が九割―これが我が国の現状です。再就職の厳しさや、後だてのない母子がアパートを借りるのが困難といった、社会の差別もあります。

そこで、女たちが手をとりあって、社会の差別や偏見と闘っていこうと生まれたのがこの会です。現在、全国に一五〇〇人がいますが、入退会自由、会則もなく、ただ、毎月の会報の購読料（年間三千円）を払えばいいだけという気儘な雰囲気がうけているようです。

子供に離婚をどう伝えるか、父と子の行き来は良い影響を与えるか、離婚女性の老後の準備は、などの調査に積極的に取り組むかたわら、子供たちのネットワークを広げたり、再就職の情報交換をしたり、離婚前の悩みの渦中にある人のために電話相談（毎週土曜）をしたり、幅広く活動しています。

連絡先　〒150　東京都渋谷区神宮前3―33―2―202
☎ 03-402-7354　〒振替／東京 4-120542

イキイキぐるーぷ自己紹介

あごら

〈石黒　真貴子〉

〈あごら〉はフェミニズムの運動体。全国規模ですが、中心はなく、14の拠点はすべて平等・対等な関係。A5判32ページの『月刊あごら』も、旭川から福岡までの14拠点による持ち回り編集が建前です。持ち回りだから、テーマも右に飛び、左に舞い、一貫性がありません。記事も編集も出来栄えもさまざま。天皇報道、女の選挙、セクシャル・ハラスメント等々――ともかくマスメディアが書けないことを書いてこそミニコミ、と、〝女は度胸〟を合言葉に作ってきました。

とは言え、一見バラバラに見える『月刊』を貫いているのは、たしかに「志」です。女の情況（状況）を黙視していいのか……という、ひとりひとりのあふれる想い、その熱い想いにやけどしそうになりながら、編みあげて、あるいは織りあげていこうと、みんなが思っています。表現は静かですが、『あごら』は燃える雑誌なのです。

五年前、声を出せなかった読者が、今年は書き手として花を開く――そんな風景が、作り手たちを支えてきたのかも知れません。だからこそ、17年半も続けてこれたのでしょう。

今まで応援して下さった方々、ありがとう。そしてまだ見ぬあなたも御一緒に、『あごら』を作っていきませんか。

連絡先　〒160　東京都新宿区新宿1―9―6
☎ 03-354-3941　〒振替／東京0-5264（年間七千二百円）

泉

この頁は、あなたと私の情報交換の場。小さなスペースですが、ご利用ください

◆第六回教育委員の準公選をすすめるための全国交流集会

父母・教師・住民の教育要求と教育行政

。日時　十一月二十五日(土)p.m.三時～(総会)
十一月二十六日(日)a.m.九時半～(交流集会)

。場所　京都府婦人センター

。問合先　同連絡会事務局（〒182　東京都調布市緑ヵ丘2－18－28　☎03-309-3226)
京都府婦人センター（〒606　京都市左京区下鴨串木町1－6　☎075-791-3871)

◆コンサート〝美津と比呂美とのるかそるかのぼくらたち〟—自由の森学園の卒業生と一緒に

。日時　十一月二十六日（日）p.m.三時半～

。場所　芝増上寺地下ホール

。出演者　同学園卒業生バンド、人形芝居かわせみ座、田中美津、伊藤比呂美、同学園卒業生の太鼓と踊り

。参加費　大人—三千二百円
小学生以下—二千円

。問合先　☎03-813-5863　田中（昼）
☎0487-86-6342　吉沢（夜）

◆フィリピンの女たちをむかえて

'90年「女と健康国際会議inフィリピン」に心をよせる東京の集い

。日時　十一月十九日（日）p.m.一時～五時

。場所　杉並区高円寺会館

。内容　映画「中絶—北と南の女たち」上映
フィリピンの女たちの話（通訳あり）

。参加費　千円

。連絡先　'82優生保護法改悪阻止連絡会（〒160　東京都新宿区荒木町23　中沢ビル3F「ジョキ」内　☎03-353-4474)

◆ビデオ「中絶—北と南の女たち」

この映画は、アイルランド・ペルー・タイ・日本・カナダ・コロンビアの六ヵ国を取材し人工妊娠中絶の実態と女の置かれた状況を、女の目で描いたドキュメンタリーです。

。監督・脚本　ゲイル・シンガー
カナダ映画　カラー五十五分

。頒価　一万二千円（送料別)

。発売元　(財)横浜市女性協会

。申込先　(社)日本家族計画連盟
☎03-269-6214

◆第三回こがねい女性フォーラム
女と男でつくる地域のネットワーク

。日時　十一月二十六日（日）a.m.十時～

。場所　小金井市公民館本館・福祉会館

。内容　講演（ヤンソン由実子)
分科会（高齢者・子育て・働く女性)

。問合先　小金井市保育婦人課婦人施策推進室　☎0423-83-1111 内線302

◆女の手帳「J・Oダイアリー1990」

週スケジュール、月スケジュール、メモページ、生理カレンダー、フリーメモスペースしおり(赤藍の二本)、別冊ふろく（すぐに役立つ女のこころとからだ特集)

。タテ一七〇ミリ×ヨコ八三ミリ
赤・ピンク・紺・黒・銀—八百五十円
合成皮製（えんじ・黒)—千五百円

。申入先　ミズ・データ・バンク（〒162　東京都新宿区神楽坂6－38　中島ビル505
☎・Fax.03-269-7650)

◆女の手帳「スケジュールノートブック1990」

見開き二ページで一週間分書込める年間手帳、パステルカラーの紙、つきたちぬ表（月経を記録するページ）、日本の女たちのグループ・店（地図入り）、女性著者の本（海外のものも写真入りで紹介）

。タテ一七〇ミリ×ヨコ一二〇ミリ　二百八十八頁　厚さ約一cm　一冊―千二百円

。申込先　ジョジョ企画（〒272　千葉県市川市南八幡1―16―24　☎0473-77-6900）

◆登校拒否の子供による「登校拒否アンケート」

登校拒否の理由は、文部省の調査では「怠学・ずる休み」となっていますが、東京シューレでまとめた登校拒否の子供による調査では、①友達との関係、②学校の雰囲気、③いじめ、④勉強・授業、⑤先生、となりました。

。B5判　七十三頁　一部五百円

。問合先　東京シューレ（〒114　東京都北区東十条3―16―8　丸重ビル3F　☎03-914-6970）

（アンケートの実行委員は13歳から18歳までの十人の子で、随所に子供達が書いたイラストが入り、グラフも手書きです。「よくがんばったね」と一声掛けたくなる一冊です）

◆コマーシャルの中の男女役割を問い直す会会報第五号

。テレビコマーシャルコンテスト結果報告（'88年後期・'89年前期）―なかなか好感コマーシャル・そろそろやめてコマーシャル

。新聞切抜帖　第一部―広告の世界、第二部―商品そのものに問題あり、第三部―女の物化・性商品化、第四部―性差別をめぐって

。遅ればせ…私たちも「アグネス論争」

。メディア・CMを考える本・パンフ、女と男を問い直す本、女と男のネットワーキング

。B5判　百十二頁　八百円（送料一部二百十円）

。問合先　（〒657　神戸市灘区上野通7―1―4　吉田清彦）郵便振替　神戸2-8197

コマーシャルの中の男女役割を問い直す会

◆中・高校生のために、人間と性シリーズ⑪「愛ってステキ！　人間ってスゴイ！」

。岐阜の富田女子高校で、独自の教科「人間関係」「女性学」の特設を提案、教科書作成に参加し、「人間関係」を担当する田中良氏が執筆。人間、性、愛の三章から成るあたたかい語りかけが特徴。

。タテ一六八ミリ×ヨコ一七〇ミリ　三十六頁、定価二百五十円

。発行　社団法人日本家族計画協会（東京都新宿区市ヶ谷砂土原1―2、保健会館別館　☎03-269-2101）

〈We編集室から、秋のつどいのご案内〉

。日時　十一月二十六日（日）a.m.十時からp.m.四時まで

。場所　都立松が谷高等学校

。内容　午前中はパソコンを操作し、栄養計算、午後はシンポジウム〝コンピューターは家庭科を変えるか？〟

。参加費（含資料代）一日通し千八百円、午後のみ八百円、但し午前の部は定員五十名で〆切ります。午後のシンポジウムには、余裕があります。

。参加できない方でも申し込まれれば、実費を負担していただき、資料を送ります。

十字路

〈福島〉社会の教材を回収要請（朝日9／20）

いわき市教委が、同市立の平一中に対し、リクルート事件などの要約記事を載せた社会科の公民資料の補助教材を「内容が刺激的過ぎると父母からクレームがあった」として回収を要請していたことが、九月十九日明らかになり、同日の同市議会でも取り上げられるなど、波紋を広げている。同教材は県内の四十七中学校で使われているが、いわき市のようなケースは起きていない。この教材は、東京法令出版のもので副読本の「中学公民資料」を出版した後に起きた時事問題を解説している。今回は、消費税導入に伴う価格の変化を表やグラフで説明し、竹下首相退陣やリクルート事件などを新聞記事をもとにまとめている。大内県教育長は、二十五日の県議会代表質問で「教材選択の権限を持つ市教委が自主的な判断で学校側に再検討を求めたもの」との見解を述べた。（西内みなみ）

〈新潟〉生活科の公開授業に全国から1200人（新潟日報10／7）

来年四月から小学校低学年で教えることになる生活科の検討会が十月七日、上越市立大手町小学校で開かれ、全国から約千二百人の教職関係者が参加した。昨年の四月、都道府県ごとに一校ずつ文部省から指定を受けた研究校では既に試行的に一年半授業が行われている。検討会は、公開授業、分科会、シンポジウムの順に進行し、公開授業では、春から子供たちが育ててきた野菜の収穫祭や朝顔の発育日誌、ウサギの飼育記録などが発表された。シンポジウムでは、年間の授業計画のたて方、評価の仕方、三年生の理科、社会への移行の仕方など同校の実践例をもとに話し合われた。（山口久子）

〈京都〉「男と女」爆笑トーク（毎日10／1）

「現在（いま）、おんなたちが集う・創る―未来へ」をキャッチフレーズにした「KYOのあけぼのフェスティバル'89」＝府・府教委主催＝が九月三十日から二日間の日程で開かれた。評論家・樋口恵子さんと、社会学者・上野千鶴子さんによる〝爆笑トーク〔女たちの最前線〕〟などに約二千人が耳を傾けた。両者の発言に〝世代差〟はみられたものの、「男性と女性の望ましい関係をつくっていくために女性はどしどし発言し、行動すべし」で一致した。

心つきの性を照れずに話そうよ（朝日10／4）

同志社中学校、理科担当の小田切明徳さんがこのほど出版した「性はおおらかに」は、難しいとされる性教育の授業の様子や生徒の反応をありのままに紹介しているほか、わが子とは性についてとてもフランクに話せないという親たちに「照れないで子どもに健全な性を教えよう」と語りかけている。授業は三年の二学期に五時間をかける。生徒の感想は「よかったぜ。あんなこと、恥ずかしがらずに教えてくれて」。小田切さんは「性の事実が語れないでいると、すき間をぬってエログロの性産業が横行する」という。かもがわ出版（☎075-211-3587）刊　千三十円

（以上　塚崎美和子）

〈奈良〉デイセンターと養護施設〝同居〟（朝日9／9）

「お年寄りと子供たちに触れ合いが生まれる

きっかけを作りたい」と、生駒市の社会福祉法人宝山寺福祉事業団は、一階に寝たきりのお年寄りたちを預かり、入浴や機能回復訓練サービスをする老人デイセンター、二階に家族と一緒に暮らすことのできない子供たちが生活する養護施設という、全国で初めての施設をつくる。同事業団は、'75年から老人のデイサービスを続けてきたが、要求にこたえ切れなくなっていた。また、五十八人の子供たちが暮らしている愛染寮は老朽化が進み改築を迫られていた。辻村施設長は「最初からうまくいくとは思わないが、とにかく人間的な触れ合いが生まれる場にしたい」と語った。

養護学校――義務制実施十周年の集い（朝日9／17）

養護学校の義務制が実施されて十年。これを機に障害児教育の実態と展望を考えようと九月十六日、「養護学校義務制実施十周年の集い」が開かれ、養護学校の教師や卒業生、父母、職員ら約八十人が参加した。「希望すれば全員高等教育を受けられるなど障害児教育は前進したが、卒業後の進路保障などの問題が山積している」と基調報告があった後、各現場の代表が実情を報告した。

（以上　乾庸子）

〈兵庫〉紙パック再生で緑カムバック（朝日10／4）

「緑の地球を子どもたちへ」を合言葉に、全国で牛乳の紙パック回収、再利用運動に取り組むグループが集まって「第三回牛乳パックの再利用を考える全国大会」が大阪市で開かれた。使い捨て時代を見直し、地球規模で進む森林破壊を市民レベルで食い止めたいと、二日間で延べ約千人が参加した。この運動は'84年に山梨県に始まり、現在全国で七十団体が加盟している。国内で一日に使用されている牛乳パックは九百万枚、これは高さ八メートルほどの立ち木六千本分、面積では二ヘクタールに相当し、ゴミとして処理するには七百万円以上かかるという。経済企画庁の省資源・省エネルギー生活推進室長や製紙メーカー代表も参加したシンポジウムでは、企業、行政、市民の三者が一体になった運動の必要性が語られた。問合せ　全国パック連事務局（☎0554-22-3611）　（由良サダコ）

〈福岡〉「新編日本史」採択の背景をさぐる（毎日10／8）

〝復古調教科書〟として論議のある高校用教科書「新編日本史」が来春は今年より二校増え十校の県立高校で使用されることが決まった。全国でこの教科書を使用するのは国公立高十四校、私立高十九校、福岡県が全体の三割を占め、四年連続で最多となる。かつては〝日教組ご三家〟といわれた闘う同県高教組があり、革新県政でもあるのに、この教科書が多く使われるようになったのには、〝教育正常化〟を目指して設立された諸団体の活発な動きがある。その一つ、民間団体の福岡県民教育協議会は一昨年「新編」採択に特別の御配慮をとの文書を高校長あてに配った。今年は文書郵送の他、高校を訪問して依頼した。さらに福岡県高等学校新教職員組合、（略称・新高教組）は、'72年、日教組所属の福高教組に反対して結成され、現在公称千八百人、組織率30％。日教組加盟の福高教組は三千九百人、組織率60％弱。採択校ではいずれも福高教組の組合員が極端に少ない。一方歴史教師二百人でつくる福岡県歴史教育者協議会は'87年三月から「新編日本史を斬る！　ニュース」を二ヶ月に一度出している。だが「新編日本史」をめぐる攻防は今後福岡だけの問題ではなくなりそうだ。　（安部宣人）

の受験者総数は14,560人。このうち26.7%にあたる3,890人が合格し，史上最高になったことが29日，文部省のまとめでわかった。5年前に比べるとほぼ2倍で，合格者の内訳では高校中退者が過半数を占めた。(9.30日付朝日)

"★心の相談係"に「資格」

これまで臨床心理学に関する専門家は「臨床心理技術者」「カウンセラー」「サイコセラピスト」「心理相談員」などの名称で活躍してきたが，社会的地位を高めようと日本心理臨床学会をはじめ20の学術団体が賛同して「日本臨床心理士資格認定協会」(木田宏会頭）を設立し，「臨床心理士」の認定制度を発足させた。受験資格は，心理学の大学院修士課程を修了した後，1年以上の心理臨床経験をもつ者，医師免許取得者で取得後2年以上の心理臨床経験を有する者など，かなり高いレベルを要求している。'51年に米国で初めて資格認定が実施されたのをはじめ，ブラジル，イギリス，スウェーデン，フランスで制度化されている。

この団体の設立によって「臨床心理士」の資格認定の動きは活発化しているが（すでに1,719人が取得)，「資格の条件が高く，医師と対等になって，運営がやりにくくなる」「短大や大学を卒業して，カウンセリングをやっている人たちが，無資格になる恐れがある」等，批判の声もあがっている。(10.14日付朝日)

★子どもの権利条約，国連で採択へ

子どもの人権を国際的に保障するための国連子どもの権利条約が，児童の権利宣言30周年記念日の11月20日，国連総会で採択される見通しとなった。国際人権規約子ども版ともいえるこの条約は，子どもを保護の対象より権利の主体とみる，生存権さえ奪われている第三世界の子どもたちを国際協力で守る，などが重要な柱。日本でも批准に向けて，運動が活発となっているが，校則や体罰など，今の学校教育のあり方の問題や，不十分な国内法の改正も必要になってくる。(10.10日付朝日)

14日，「学校とプライバシー」をテーマにしたシンポジウム（「国民総背番号制に反対しプライバシーを守る中央会議」主催）で，「内申書の本人への公開」に関連して，育英短大講師の広沢明さんは，同条約の草案28条をあげ「子どもの教育への権利」として，「教育上および職業上の情報ならびに指導を，すべての子どもにとって利用可能であり，かつアクセスできるものとする」とされており，「条約批准後は，内申書を本人に公開しないのは条約違反になるのではないか」と語った。(10.17日付朝日)

★生活や体格別の適正カロリーは？

厚生省は22日，健康な生活を送っていくうえで標準となるエネルギー量と栄養素の種類，摂取量を示した「日本人の栄養所要量」を，5年ぶりに改定，発表した。'69年に栄養不足を解消していくための指標として出されたが，最近は，運動不足の中で「飽食」を抑え，「成人病」などを防いでいくための目安としての色彩を強めている。今回は，平均的な所要量に加え，各人の年齢や身長，労働の強弱などをもとに個々に適したエネルギー量をはじき出せる，簡易算出式を示しているのが特色で，来年度から，国，自治体による食生活改善指導や，学校給食の献立作りなどの基礎資料として使用される。(9.23日付朝日)

★「パソコン教育」できる先生わずか1割

'93年度から「情報基礎」を教えなければならない中学の技術・家庭科の教諭のうち，指導できる力があるのは，まだわずか1割に過ぎないという実態が，文部省がまとめた公立学校の調査でわかった。情報教育の推進を掲げる新学習指導要領が示されたこともあって，パソコンの導入は急ピッチで進んでいるが，指導者の養成が追いつかない実態が明らかになった。(10.18日付読売)

アンテナ

★地球環境で国際協力

世界の17ヵ国と台湾が参加して東京で開かれた初の地球環境保全国際議員フォーラムは10日，「人類の生命と共通の財産を守るため国境を超えて連帯することを決意する」とうたった宣言をまとめて閉幕した。宣言は「相互の協力と国際機関への支援の強化」を確認するとともに，造林計画の推進，全世界の国会議員のネットワークづくり，エネルギー・資源の節約を「具体的行動」として掲げている。(10.11日付朝日)

★東独40年，市民の大量脱出

駐プラハ（チェコスロバキア）の西独大使館に西側亡命を求め逃げ込んだ東独市民約12,000人の出国が4日始まり，ベルリンの壁構築（'61年）以来最大の出国者を出した。77歳の高齢指導者，ホーネッカー政権の命運は尽きたとする西欧の観測も強まる中，23日にはライプチヒで，約30万人の市民がデモに参加したのをはじめ，各地で集会やデモが行われ民主化運動が高まっている。東独は，建国40周年をむかえ，いま最大の危機に直面した。(10.5・6・24日付朝日)

★シスコでM6.9の大地震

17日午後5時4分（日本時間18日午前9時4分），サンフランシスコ湾周辺部を襲った大地震は，カリフォルニア州当局によると，63人が死亡，約3,089人が負傷。

一夜明けた市内では，大部分の地区で停電が続き，地下鉄，道路は寸断されたままで，市民生活はマヒ状態。救援活動も十分に行われておらず，今後死傷者数が増える可能性もあるとブッシュ大統領は被害にあった地域を特別災害地域に指定，同州当局は州北部の7郡に非常事態を宣言。州兵と連邦軍兵士が治安維持に出動した。(10.19・28日付各紙)

★米，教育に競争原理導入

ブッシュ大統領は米国経済の国際的落ち込みの背景には，歴代政権が放置してきた教育の荒廃があることを認め，学業成績に関する全国的な目標の設定，競争原理の導入などの画期的な方針を，9月27～28日，バージニア州で開かれた「全米教育サミット」で打ち出した。最近の民間団体の推計によると，米国の労働人口の5人に1人が，中学2年生程度以下の読解能力しかなく，8人に1人は小学生程度しかできない。中学生の約半数が分数を正確に理解できず，4人に1人は満足な手紙が書けないという研究報告もある。「生徒，教師，学校間での競争の精神を生み，これらのすべてに成績表をつける必要がある」と大統領は，全体としての教育水準の向上を強調してやまなかった。(10.6日付朝日)

★第三次家永教科書訴訟判決

外交問題にまで発展した'80～'83年度の教科書検定で，「侵略」という用語や「南京大虐殺」などの記述について，文部省から高校生用の日本史教科書原稿の書き換えを求められた家永三郎（元東京教育大教授）が「検定制度は，違憲・違法」として，国に損害賠償を求めた「第三次教科書訴訟」の判決が3日，東京地裁で言い渡された。

加藤和夫裁判長は，検定制度や適用の仕方は合憲としたうえで，個々の検定に当たっての文部大臣の裁量については「事実の基礎を欠く場合または社会通念上著しく妥当性を欠く場合は裁量権乱用となる」と一定のワクをはめ，問題とされた「草莽（そうもう）隊」の記述に対する検定のみ裁量権逸脱の違法を認めて，原告に10万円（請求200万円）の慰謝料を支払うよう，国に命じた。しかし，判決は注目された「沖縄戦」などの戦争記述への検定については，「違法とはいえない」とした。一部とはいえ，検定の行き過ぎを指摘した判決に文部省は反発を示しているが，家永氏側も実質敗訴と受け止め，控訴する方針。(10.3日付各紙)

★大検合格者，最多を更新

高校を卒業しなくても大学に進む資格が得られる大学入学資格検定（大検）の今年

★バックナンバーのご案内

84/12 つきあいを考える 530円(送込み)

- 家族はつきあいの原点(高見澤たか子)
- 中・高校生とつきあう (森口秀志)
- 連翹の花―若者とつきあう―(中谷君恵)
- 歌で世界とつきあう (菅原やすのり)
- オリンピックとつきあい(越村佳代子)
- いろいろ SAY 差別 (鈴木みち子)

他

◆単行本のご案内

●子ども発、大人へ

―いま生まれる新しい関係―

「学習の主人公」&小沢牧子著

1339円(〒260)

●人間って不思議

――つの視角―

半田たつ子著

1545円(〒310)

●ご注文は、最寄りの書店(地方小扱い)または、料金をおそえの上、振替で直接ウイ書房へ。

★バックナンバーのご案内★
ご注文は、最寄りの書店(地方小扱い)または、料金をおそえの上、振替で直接ウイ書房へ。

WE EDITOR'S NOTE

♠ある教研に参加しましたが、家庭科の分科会は、他の教科に比べて、参加者も多く、この時期、関心の高さを示していました。

発表内容も、男女で学ぶ教科内容に集中し、パソコンをはじめ、OHP、ビデオ、スライドなどを駆使した発表が相次ぎました。衣の制作で、男女で何を教材とするか…とか、〝家庭科〟が本当に問われる時期だと痛感しました。 (青木)

◆自分の感じたことを自然に相手に伝える―ただ、それだけのことが、もしかして、いま一番難しくなっているのではないか。怒りや悲しみを外に出せず、溜めこんでしまう人も、反対に、怒りを通してしか、人との関わりを持てない人も、それぞれに苦しい。

「知識」や「思想」がどんどんふくれあがってくるにつれて、感じる力が衰えてゆくのが怖い。 (稲邑)

♣十一月二十六日の、We秋のつどい〝コンピューターは家庭科を変えるか〟に申込みやお問合せが来ています。読者でない方でお友達と一緒に申込まれた方、「全く初めてなんですが」と言われる方、当日は参加できないけれど資料を望まれる方―うれしいです。十一月六日現在で午前の部はまだ余裕があります。まずお電話下さい。詳細は十一月号91頁をご覧下さい。(中野)

♥「コミュニケーション―私をひらく」と聞くと、「ワッ、大変」と思ってしまう。傷つくのが恐くて、なるべく内面を暴露しないように生きてきたから…。でも、閉じ籠っていては、進歩も成長もありませんね。

♥「泉」向けにお便り下さる方、催しの二ヵ月くらい前に届くようにお願いします。発行日前に終ってしまうものが多くて、とても残念なのです。 (柳田)

★原田正純氏の『水俣が映す世界』が大佛次郎賞に輝きました。選考委員の一人都留重人氏が、医聖ヒポクラテスの言葉「下医は病気を治す、中医は人間を治す上医は社会を治す」を引いて、「原田氏は、水俣病こそ『上医』を必要とすることを痛感した」と書いていました。原田氏の「学問にもっと生活者の参加を」と共に胸に響きました。次号は「フェミニズムの〝いま〟」です。ご期待を。 (半田)

新しい家庭科―We
Vol.8 No 9 1989年11月20日発行
定価567円(本体550円+税17円)送料共
年間購読料・定価7107円(本体6900円+税207円)
編集兼発行人/半田たつ子

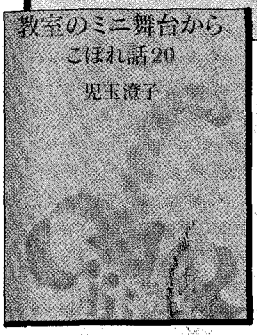
発行所/(有)ウイ書房
〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
☎03(326)1380 郵便振替 東京6-59867
第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292
印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

新刊ご案内

人と人とのかかわりを紡ぐ

「先生、おはなしー」とせがむ生徒たちがいて
自らの旅や、出会いの決定的瞬間を語りかけたい教師がいて
教室に、いのちが通い
好奇心が息づき
目が輝き、心が開く
そんな希有な教室があった。
語る者、聞く者を結んだ　珠玉の小編20
それは、また、読む人の心もとらえて離さないだろう

●児玉澄子著　■B6判／224頁



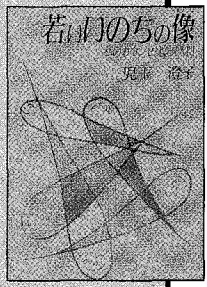
教室のミニ舞台から
―こぼれ話20―

■定価　1350円(税込)　〒260円

〈著者の言葉〉
「先生のお話を聞くと元気が出るんです」というコメントに、逆に、元気づけられて、授業の合間に語ったおはなし20編―退職記念にまとめてみれば、30年間の高校教師としてのエッセンスが、自ずとにじみ出たように思う。

既刊

●児玉澄子著　■B6判／224頁



若いいのちの像（すがた）
―私のカウンセリング入門―

■定価　1336円(税込)　〒260円

色眼鏡をはずして、自分の眼で、自分の心の中に起こっていることを静かに見つめよう。自分に都合のよい論に乗ったり、あれこれとがなり立てる、騒音にしか過ぎない情報に振り回されたりすることなく。

■直接小社にご注文の場合は、書名、冊数および住所・氏名を明記の上、代金に送料を加えた金額をお送り下さい。
■二冊以上の場合の送料は、実費をご請求いたします。
■電話、はがきでお申し込みの際は、代金、送料を記入した振替用紙を同封いたしますので、到着次第お支払い下さい。

ウイ書房　〒182 調布市西つつじヶ丘2-25-14 ☎ 03・326・1380(振替・東京6-59867)